

「斯んな所へ来る筈ぢやなかつたんですが」と自分はつい言譯らしい事を云つた。

「何故。だつて立派な御茶屋ぢやありませんか。結構だわ」と嫂が答へた。其答へ振から推すと、彼女は最初から斯ういふ料理屋めいた所へでも来るのを豫期してゐたらしかつた。

實際、嫂のいつた通り其座敷は物綺麗に且堅牢に出来上つてゐた。

「東京邊の安料理屋より却て好い位ですね」と自分は柱の木口や床の軸などを見廻した。嫂は手摺の所へ出て、中庭を眺めてゐた。古い梅の株の下に蘭の茂りが蒼黒い影を深く見せてゐた。梅の幹にも硬くて細長い苔らしいものが處々に喰付いてゐた。

下女が浴衣を持って風呂の案内に來た。自分は風呂に這入る時間が惜しかつた。さうして日が暮はしまいかと心配した。出来るならば一刻も早く用を片付けて、約束通り明るい路を濱邊まで歸りたいと念じた。

「何うします姉さん、風呂は」と聞いて見た。

嫂も明るいうちには歸るやうに兄から兼て云ひ付けられてゐたので、其處は能く承知してゐた。彼女は帯の間から時計を出して見た。

「まだ早いよ、二郎さん。お湯へ這入つても大丈夫だわ」

彼女は時間の遅く見えるのを全く天氣の所爲にした。尤も濁つた雲が幾重にも空を鎖してゐるので、時計の時間よりは世の中が暗く見えたのは慥に違ひなかつた。自分は又今にも降り出しさうな雨を恐れた。降るなら一仕切さつと來た後で、歸つた方が却て樂だらうと考へた。

「ぢや一寸汗を流して行きませうか」

二人はとう／＼風呂に入つた。風呂から出ると膳が運ばれた。時間からいふと飯には早過ぎた。酒は遠慮しなかつた。且飲める口でもなかつた。自分は已を得ず、吸物を吸つたり、刺身を突ついたりした。下女が邪魔になるので、用があれば呼ぶからと云つて下げた。

嫂には改まつて云ひ出したものだらうか、又は夫となく話の序に其處へ持つて行つたものだらうかと思案した。思案し出すと何方も宜い様で又何方も悪い様であつた。自分は吸物椀を手にした儘ぼんやり庭の方を眺めてゐた。

「何を考へて居らつしやるの」と嫂が聞いた。

「何、降りやしまいかと思つてね」と自分は宜い加減な答をした。

「左右。そんなに御天氣が怖い。貴方にも似合はないのね」

「怖くないけど、もし強雨にでもなつちや大變ですからね」

自分が斯う云つてゐる内に、雨はぼつり／＼と落ちて來た。餘程早くからの宴會でもあるのか、向ふに見える二階の廣間に、二三人紋付羽織の人影が見えた。其見當で藝者が三味線の調子を合はせてゐる音が聞え出した。

宿を出るとき既にざわついてゐた自分の心は、此時一層落付を失ひ掛けて來た。自分は腹の中で、今日は到底しんみりした話をする氣になれないと恐れた。何故又其今日に限つて、こんな變な事を引受けたのだらうと後悔もした。

三十

嫂はそんな事に氣の付く筈がなかつた。自分が雨を氣にするのを見て、彼女は却て不思議さうに詰つた。

「何でそんなに雨が氣になるの。降れば後が涼しくなつて好いちやありませんか」

「だつて何時已むか解らないから困るんです」

「困りやしないわ。いくら約束があつたつて、御天氣の所爲なら仕方がないんだから」

「然し兄さんに對して僕の責任がありますよ」

「ちやすぐ歸りませう」

嫂は斯う云つて、すぐ立ち上つた。其様子には一種の決斷があらはれてゐた。向の座敷では客の頭が揃つたのか、三味線の音が雨を隔て、爽かに聞え出した。電燈も既に輝いた。自分も半ば嫂の決心に促されて、腰を立て掛けたが、考へると受合つて來た話はまだ一言も口へ出してゐなかつた。後れて歸るのが母や兄に濟まない如く、少しも嫂に肝心の用談を打ち明けないので又自分の心に濟まなかつた。

「姉さん此雨は容易に已みさうもありませんよ。それに僕は姉さんに少し用談があつて來たんだから」

自分は半分空を眺めて又嫂を振り返つた。自分は固よりの事、立ち上つた彼女も、まだ歸る仕度は始めなかつた。彼女は立ち上つたには、立ち上つたが、自分の様子次第で其以後の態度を

一定しようと、五分の隙間なく身構てゐるらしく見えた。自分は又軒端へ首を出して上の方を望んだ。室の位置が中庭を隔て、向ふに大きな二階建の廣間を控へてゐるため、空は何時ものやうに廣くは眼界に落ちなかつた。従つて雲の往來や雨の降り按排も、一般的には能く分らなかつた。けれども凄まじさが先刻よりは一層甚だしく庭木を痛振つてゐるのは事實であつた。自分は雨よりも空よりも、まづ此風に辟易した。

「あなたも妙な方ね。歸るといふから其積で仕度をすれば、又坐つて仕舞つて」

「仕度つて程の仕度もしないぢやありませんか。只立つた限でさあ」

自分が斯う云つた時、嫂はにつこりと笑つた。さうして故意と己れの袖や裾のあたりを成程といつたやうな又意外だと驚いたやうな眼付で見廻した。それから微笑を含んで其様子を見てゐた自分の前に再びべたりと坐つた。

「何よ用談があるつて。妾にそんな六づかしい事が分りやしないわ。それよりか向ふの御座敷の三味線でも聞いてた方が増しよ」

雨は軒に響くといふよりも寧風に乘せられて、氣儘な場所へ叩き付けられて行く様な音を起し

た。其間に三味線の音が氣紛れものらしく時々二人の耳を掠め去つた。

「用があるなら早く仰やいな」と彼女は催促した。

「催促されたつて一寸云へる事ぢやありません」

自分は實際彼女から促された時、何と切り出して好いか分らなかつた。すると彼女はにや／＼と笑つた。

「貴方取つて幾何なの」

「そんなに冷かしや不可ません。本當に眞面目な事なんだから」

「だから早く仰しやいな」

自分は愈改まつて忠告がましい事を云ふのが厭になつた。さうして彼女の前へ出た今の自分が何だか彼女から一段低く見縊られてゐる様な氣がしてならなかつた。それなのに其處に一種の親しみを感せずには又居られなかつた。

「姉さんは幾何でしたつけね」と自分は遂に即かぬ事を聞き出した。

「是でもまだ若いよ。貴方より餘つ程下の積ですわ」

自分は始めから彼女の年と自分の年を比較する氣はなかつた。

「兄さんとこへ来てからもう何年になりますかね」と聞いた。

嫂は唯澄まして「左右ね」と云つた。

「妾そんな事みんな忘れちまつたわ。だいち自分の年さへ忘れる位ですもの」

嫂の此恍惚方は如何にも嫂らしく響いた。さうして自分には却て嬌態とも見える此不自然が、眞面目な兄に甚だしい不愉快を與へるのではなからうかと考へた。

「姉さんは自分の年にさへ冷淡なんですわね」

自分は斯んな皮肉を何となく云つた。然し云つたときの浮氣な心にすぐ氣がつくと急に兄に濟まない恐ろしさに襲はれた。

「自分の年なんか、いくら冷淡でも構はないから、兄さんに丈はもう少し氣を付けて親切にして上げて下さい」

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出来る丈の事は兄さんに爲て上てる積よ。兄さん許ぢやないわ。貴方にだつて左右でせう。ねえ二郎さん」

自分は、自分にもつと不親切にして構はないから、兄の方には最少し優しくして呉れると、頼む積で嫂の眼を見た時、又急に自分の甘いのに氣が付いた。嫂の前へ出て、斯う差し向ひに坐つたが最後、到底眞底から誠實に兄の爲に計る事は出来ないのだと迄思つた。自分は言葉には少しも窮しなかつた。何んな言語でも兄の爲に使はうとすれば使はれた。けれども其を使ふ自分の心は、兄の爲でなくつて却つて自分の爲に使ふのと同じ結果になりやすかつた。自分は決して斯んな役割を引き受けべき人格でなかつた。自分は今更のやうに後悔した。

「貴方急に黙つちまつたのね」と其時、嫂が云つた。恰も自分の急所を突く様に。

「兄さんの爲に、僕が先刻からあなたに頼んでゐる事を、姉さんは眞面目に聞いて下さらないから」

人行

自分は耻づかしい心を抑へてわざと斯う云つた。すると嫂は變に淋しい笑ひ方をした。

「だつて夫や無理よ二郎さん。妾馬鹿で氣が付かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるか

も知れないけれど、是で全く出来る丈の事を兄さんに對してしてゐる氣なんですもの。——妾や本當に腑抜なのよ。ことに近頃は魂の抜殻になつちまつたんだから」

「さう氣を腐らせないで、もう少し積極的にしたら何うです」

「積極的つて何うするの。御世辭を使ふの。妾御世辭は大嫌ひよ。兄さんも御嫌ひよ」

「御世辭なんか嬉しがるものもないでせうけれども、もう少し何うかしたら兄さんも幸福でせうし、姉さんも仕合せだらうから……」

「宜御座んす。もう伺はないでも」と云つた嫂は、其言葉の終らないうちに涙をぼろ／＼と落した。

「妾のやうな魂の抜殻はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう。然し私は是で満足です。是で澤山です。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積です。其位の事は二郎さんも大抵見てゐて解りさうなものだのに……」

泣きながら云ふ嫂の言葉は途切れ／＼にしか聞こえなかつた。然し其途切れ／＼の言葉が鋭い力をもつて自分の頭に應へた。

三十二

自分は經驗のある或年長者から女の涙に金剛石は殆んどない、大抵は皆ギヤマン細工だと嘗て教はつた事がある。其時自分は成程そんなものかと思つて感心して聞いてゐた。けれども夫は單に言葉の上の智識に過ぎなかつた。若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪へないやうな氣がした。外の場合なら彼女の手を取つて共に泣いて遣りたかつた。

「そりや兄さんの氣六づかしい事は誰にでも解つてます。あなたの辛抱も並大抵ぢやないでせう。けれども兄さんはあれで潔白すぎる程潔白で正直すぎる程正直な高尚な男です。敬愛すべき人物です……」

「二郎さんに何もそんな事を伺はないでも兄さんの性質位妾だつて承知してゐる積です。妻ですもの」

人行

嫂は斯う云つて又しやくり上げた。自分は益可哀さうになつた。見ると彼女の眼を拭つてゐた小形の手帛が、皺だらけになつて濡れてゐた。自分は乾いてゐる自分ので彼女の眼や頬を撫で

てやるために、彼女の顔に手を出したくて堪らなかつた。けれども、何とも知れない力が又其手をぐつと抑へて動けないやうに締め付けてゐる感じが強く働いた。

「正直な所姉さんは兄さんが好きなんですか、又嫌なんですか」

自分は斯う云つて仕舞つた後で、此言葉は手を出して嫂の頬を、拭いて遣れない代りに自然口の方から出たのだと気が付いた。嫂は手帛と涙の間から、自分の顔を覗くやうに見た。

「二郎さん」

「えゝ」

此簡単な答は、恰も磁石に吸はれた鐵の屑の様に、自分の口から少しの抵抗もなく、何等の自覺もなく釣り出された。

「貴方何の必要があつて其んな事を聞くの。兄さんが好きか嫌ひかなんて。妾が兄さん以外に好いてる男でもあると思つてゐらつしやるの」

「左右いふ譯ちや決してないんですが」

「だから先刻から云つてるちやありませんか。私が冷淡に見えるのは、全く私が腑抜の所爲だ

つて」

「さう腑抜を殊更に振り舞はされちや困るね。誰も宅のものでそんな悪口を云ふものは一人もないんですから」

「云はなくつても腑抜よ。能く知つてるわ、自分だつて。けど、是でも時々是他から親切だつて賞められる事もあつてよ。さう馬鹿にしたものでもないわ」

自分は嘗て大きなクツションに蜻蛉だの草花だのを色々の糸で、嫂に縫ひ付けて貰つた御禮に、あなたは親切だと感謝した事があつた。

「あれ、まだ有るでせう綺麗ね」と彼女が云つた。

「えゝ。大事にして持つてゐます」と自分は答へた。自分は事實だから斯う答へざるを得なかつた。斯う答へる以上、彼女が自分に親切であつたといふ事實を裏から認識しない譯に行かなかつた。

不圖耳を欬てると向ふの二階で弾いてゐた三味線は何時の間にか已んでゐた。残り客らしい人の酔つた聲が時々風を横切つて聞こえた。もう夫程遅くなつたのかと思つて、時計を捜し出しに

掛つた所へ女中が飛石傳に縁側から首を出した。

自分等は此女中を通じて、和歌の浦が今暴風雨に包まれてゐるといふ事を知つた。電話が切れて話を通じないといふ事を知つた。往來の松が倒れて電車が通じないといふ事も知つた。

三十三

自分は其時急に母や兄の事を思ひ出した。眉を焦す火の如く思ひ出した。狂ふ風と渦巻く浪に弄ばれつゝある彼等の宿が想像の眼にあり／＼と浮んだ。

「姉さん大變な事になりましたね」と自分は嫂を顧みたら、嫂は夫程驚いた様子もなかつた。けれども氣の所爲か、常から蒼い頬が一層蒼いやうに感ぜられた。其蒼い頬の一部と眼の縁に先刻泣いた痕跡がまだ残つてゐた。嫂はそれを下女に悟られるのが厭なんだらう、電燈に疎い不自然な方角へ顔を向けて、わざと入口の方を見なかつた。

「和歌の浦へは何うしても歸られないんでせうか」と云つた。
見當違ひの方から出た此間は、自分に云ふのか、又は下女に聞くのか、一寸解らなかつた。

「伸でも駄目だらうね」と自分が同じ様な間を下女に取次いだ。

下女は駄目といふ言葉こそ繰返さなかつたが、危険な意味を反覆説明して、聞かせた上、是非今夜文は和歌山へ泊れと忠告した。彼女の顔は寧ろ吾々二人の利害を標的にして物を云つてらしく眞面目に見えた。自分は下女の言葉を信ずれば信ずる程母の事が氣になつた。

防波堤と母の宿との間には彼は五六町の道程があつた。波が高くて少し土手を越す位なら、容易に三階の座敷迄來る氣遣ひはなからうとも考へた。然しもし海嘯が一度に寄せて來るとすると、……

「おい海嘯ですこいらの宿屋がすつかり波に攫はれる事があるかい」

自分は本當に心配の餘り下女に斯う聞いた。下女はそんな事はないと斷言した。然し波が防波堤を越えて土手下へ落ちてくるため、中が湖水のやうに一杯になる事は二三度あつたと告げた。

「夫にしたつて、水に浸つた家は大變だらう」と自分は又聞いた。

下女は、高々水の中で家がぐる／＼回る位なもので、海迄持つて行かれる心配は先づあるまいと答へた。此香氣な答へが心配の中にも自分を失笑せしめた。

「ぐる／＼回りや夫で澤山だ。其上海迄持つてかれた日にや好い災難ぢやないか」
下女は何とも云はずに笑つてゐた。嫂も暗い方から電燈をまともに見始めた。

「姉さん何うします」

「何うしますつて、妾女だから何うして好いか解らないわ。若し貴方が歸ると仰しやれば、何んな危険があつたつて、妾一所に行くわ」

「行くのは構はないが、——困つたな。ぢや今夜は仕方がないから此處へ泊るとしますか」

「貴方が御泊りになれば妾も泊るより外に仕方がないわ。女一人で此暗いのにとても和歌の浦迄行く譯には行かないから」

下女は今迄勘違をしてゐたと云はぬ許の眼遣をして二人を見較べた。

「おい電話は何うしても通じないんだね」と自分は又念のため聞いて見た。

「通じません」

自分は電話口へ出て直接に試みて見る勇氣もなかつた。

「ぢや仕様がない泊ることに極めませう」と今度は嫂に向つた。

「えゝ」

彼女の返事は何時もの通り簡單でさうして落付いてゐた。

「町の中なら俵が通ふんだね」と自分は又下女に向つた。

三十四

二人はこれから料理屋で周旋して呉れた宿屋迄行かなければならなかつた。仕度をして玄關を下りた時、其所に輝く電燈と、車夫の提灯とが、雨の音と風の叫びに冴えて、恰も闇に狂ふ物凄さを照らす道具のやうに思はれた。嫂は先づ色の眼に付くあでやかな姿を黒い幌の中へ隠した。自分もつゞいて窮屈な深い桐油の中に身體を入れた。

幌の中に包まれた自分は殆んど往來の凄しさを見る邊がなかつた。自分の頭はまだ経験した事のない海嘯といふものに絶えず支配された。でなければ、意地の悪い天候のお蔭で、自分が兄の前で一徹に退けた事を、何うしても實行しなければならなくなつた運命をつらく観じた。自分の頭は落付いて想像したり観じたりする程の餘裕を無論有たなかつた。たゞ亂雑な火事場のやうに

人行

取留めもなくくるく廻轉した。

そのうち俣の棍棒が一軒の宿屋のやうな構の門口へ横付になつた。自分は何だか暖簾を潜つて土間へ這入つたやうな氣がしたが儘には覺えてゐない。土間は幅の割に堅からいつて大分長かつた。帳場も見えず番頭も居ず、たゞ一人の下女が取次に出た丈で、宵の口としては至つて淋しい光景であつた。

自分達は黙つて其所に突立てゐた。自分は何故だか嫂に話したくなかつた。彼女も澄まして絹張の傘の先を斜に土間に突いたなりで立つてゐた。

下女の案内で二人の通された部屋は、縁側を前に御簾の様な簀垂を軒に懸けた古めかしい座敷であつた。柱は時代で黒く光つてゐた。天井にも煤の色が一面に見えた。嫂は例の傘を次の間の衣桁に懸けて、「こゝは向ふが高い棟で、此方が厚い練堀らしいから風の音がそんなに聞えないけれど、先刻俣へ乗つた時は大變ね。幌の上でひゆくひゆくいふのが氣味が悪かつた位よ。あなた風の重みが俣の幌に乘し掛つて來るのが乗つて、分つたでせう。妾もう少しで俣が引つ繰返るかも知れないと思つたわ」と云つた。

自分は少し逆上してゐたので、そんな事はよく注意してゐられなかつた。けれども其通りを眞直に答へる程の勇氣もなかつた。

「えゝ随分な風でしたね」と胡魔化した。

「此處で此位ぢや、和歌の浦はさぞ大變でせうね」と嫂が始めて和歌の浦の事を云ひ出した。自分は胸が又わく／＼し出した。「姐さん此處の電話も切れてゐるのかね」と云つて、答へも待たずに風呂場に近い電話口迄行つた。其處で帳面を引つ繰返しながら、號鈴をしきりに鳴らして、母と兄の泊つてゐる和歌の浦の宿へ掛けて見た。すると不思議に向ふで二言三言何か云つた様な氣がするので、是は有難いと思ひつゝ、猶暴風雨の模様を聞かうとすると、又薩張通じなくなつた。それから何遍もし／＼と呼んでも幾何號鈴を鳴らしても、呼び甲斐も鳴らし甲斐も全く無くなつたので、遂に我を折つてわが部屋へ引き戻して來た。嫂は蒲團の上に坐つて茶を啜つてゐたが、自分の足音を聞きつゝ、振り返つて、「電話は何うして？通じて？」と聞いた。自分は電話に就いて今の一部始終を説明した。

「大方其んな事だらうと思つた。到底も駄目よ今夜は。いくら掛けたつて、風で電話線を吹き

切つちまつたんだから。あの音を聞いたつて解るぢやありませんか」

風は何處からか二筋に縋れて來たのが、急に擦違になつて唸る様な怪しい音を立て、又虚空遙に騰る如くに見えた。

三十五

二人が風に耳を峙だてゝゐると、下女が風呂の案内に來た。それから晩食を食ふかと聞いた。自分は晩食などを欲しいと思ふ氣になれなかつた。

「何うします」と嫂に相談して見た。

「左右ね。何うでも宜いけども。折角泊つたもんだから、御膳だけでも見た方が宜いでせう」と彼女は答へた。

下女が心得て立て行つたかと思ふと、宅中の電燈がぱたりと消えた。黒い柱と煤けた天井でたゞさへ陰氣な部屋が、今度は眞暗になつた。自分は鼻の先に坐つてゐる嫂を嗅げば嗅がれるやうな氣がした。

「姉さん怖ありませんか」

「怖いわ」といふ聲が想像した通りの見當で聞こえた。けれども其聲のうちには怖らしい何物をも含んでゐなかつた。又わざと怖がつて見せる若々しい蓮葉の態度もなかつた。

二人は暗黒のうちに坐つてゐた。動かすに又物を云はずに、黙つて坐つてゐた。眼に色を見ない所爲か、外の暴風雨は今迄よりは餘計耳に付いた。雨は風に散らされるので夫程恐ろしい音も傳へなかつたが、風は屋根も塼も電柱も、見境なく吹き捲つて悲鳴を上げさせた。自分達の室は地面の上の穴倉見た様な所で、四方共頑丈な建物だの厚い塗壁だのに包まれて、縁の前の小さい中庭さへ比較的安安全全に見えたけれども、周圍一面から出る一種凄じい音響は、暗闇に伴つて起る人間の抵抗し難い不可思議な威嚇であつた。

「姉さんもう少しだから我慢なさい。今に女中が灯を持つて來るでせうから」

自分は斯う云つて、例の見當から嫂の聲が自分の鼓膜に響いてくるのを暗に豫期してゐた。すると彼女は何事をも答へなかつた。それが漆に似た暗闇の威力で、細い女の聲さへ通らないやうに思はれるのが、自分には多少無氣味であつた。仕舞に自分の傍に慥に坐つてゐるべき筈の嫂の

存在が氣に掛り出した。

「姉さん」

嫂はまだ黙つてゐた。自分は電氣燈の消えない前、自分の向ふに坐つてゐた嫂の姿を、想像で適當の距離に描き出した。さうして其れを便りに又「姉さん」と呼んだ。

「何よ」

彼女の答は何だか蒼蠅さうであつた。

「居るんですか」

「居るわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此處へ来て手で障つて御覽なさい」

自分は手搜りに搜り寄つて見たい氣がした。けれども夫程の度胸がなかつた。其うち彼女の坐つてゐる見當で女帯の擦れる音がした。

「姉さん何かしてゐるんですか」と聞いた。

「ええ」

「何をしてゐるんですか」と再び聞いた。

「先刻下女が浴衣を持つて來たから、着換へようと思つて、今帯を解いてゐる所です」と嫂が答へた。

自分が暗闇で帯の音を聞いてゐるうちに、下女は古風な蠟燭を點けて縁側傳ひに持つて來た。さうしてそれを座敷の床の横にある机の上に立てた。蠟燭の焰がちら／＼右左へ揺れるので、黒い柱や煤けた天井は勿論、灯の勢の及ぶ限りは、穩かならぬ薄暗い光にどよめいて、自分の心を淋しく焦立たせた。殊更床に掛けた軸と、其前に活けてある花とが、氣味の悪い程目立つて蠟燭の灯の影響を受けた。自分は手拭を持つて、又汗を流しに風呂へ行つた。風呂は怪しげなカンテラで照らされてゐた。

三十六

自分は佗びしい光でやつと見分のつく小桶を使つてさあ／＼脊中を流した。出掛に又念のためだから電話をちりん／＼鳴らして見たが更に通じる氣色がないので已めた。

嫂は自分と入れ代りに風呂に入つたかと思ふとすぐ出て來た。「何だか暗くつて氣味が悪いの

人行

ね。それに桶や湯槽が古いんで緩くり洗ふ氣にもなれないわ」

其時自分は長まつた下女を前に置いて蠟燭の灯を便に宿帳を付けべく餘儀なくされてゐた。

「姉さん宿帳は何う付けたら好いでせう」

「何うでも。好い加減に願ひます」

嫂は斯う云つて小さい袋から櫛やなにか這入つてゐる更紗の疊紙を出し始めた。彼女は後向になつて蠟燭を一つ占領して鏡臺に向ひつゝ何か遣つてゐた。自分は仕方なしに東京の番地と嫂の名を書いて、わざと傍に一郎妻と認めた。同様の意味で自分の側にも一郎弟とわざ／＼断つた。飯の出る前に、何の拍子か、先に暗くなつた電燈が又一時に明るくなつた。其時臺所の方であと喜びの鬨の聲を挙げたものがあつた。暴風雨で魚がないと下女が言譯を云つたに拘はらず、吾々の膳の上は明かであつた。

「丸で生返つた様ね」と嫂が云つた。

すると電燈が又ぱつと消えた。自分は急に箸を消えた處に留めたぎり、しばらく動かさなかつた。

「おや／＼」

下女は大きな聲をして朋輩の名を呼びながら燈火を求めた。自分は電氣燈がぱつと明るくなつた瞬間に嫂が、何時の間にか薄く化粧を施したといふ艶かしい事實を見て取つた。電燈の消えた今、其顔丈が眞闇なうちに故の通り残つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

「姉さん何時御粧したんです」

「あら厭だ眞闇になつてから、そんな事を云ひだして。貴方何時見たの」

下女は暗闇で笑ひ出した。さうして自分の眼ざとい事を賞めた。

「斯んな時に白粉迄持つて来るのは實に細かいですね、姉さんは」と自分は又暗闇の中で嫂に云つた。

「白粉なんか持つて来やしないわ。持つて来たのはクリームよ、貴方」と彼女は又暗闇の中で辯解した。

自分は暗がりの中で、しかも下女の居る前で、斯んな冗談を云ふのが常よりは面白かつた。そこへ彼女の朋輩が又別の蠟燭を二本許點けて来た。

室の中は裸蠟燭の灯で渦を巻くやうに動揺した。自分も嫂も眉を擧めて燃える焰の先を見詰めて居た。さうして落付かない淋しさでも形容すべき心持を味はつた。程なく自分達は寐た。便所に立たし時、自分は窓の間から空を仰ぐ様に覗いて見た。今迄多少静まつて居た暴風雨が、此時は夜更と共に募つたものか、眞黒な空が眞黒いなりに活動して、瞬間も休まない様に感ぜられた。自分は恐ろしい空の中で、黒い電光が擦れ合つて、互に黒い針に似たものを隙間なく出しながら、此暗さを大きな音の中に維持してゐるのだと想像し、かつ其想像の前に畏縮した。

蚊帳の外には蠟燭の代りに下女が床を延べた時、行燈を置いて行つた。其行燈が又古風な陰気なもので、一層吹き消して闇がりにした方が、微かな光に照らされる無氣味さよりは却て心持が好い位だつた。自分は燐寸を擦つて、薄暗い所で煙草を呑み始めた。

三十七

自分は先刻から少しも寐なかつた。小用に立つて、一本の紙巻を吹かす間にも色々な事を考へ

た。それが取り留もなく雑然と一度に來るので、自分にも何が主要の問題だか捕へられなかつた。自分は燐寸を擦つて煙草を呑んでゐる事さへ時々忘れた。而も其處に氣が付いて、再び吸口を唇に衝へる時の煙の無味さは又特別であつた。

自分の頭の中には、今見て來た正體の解らない黒い空が、凄まじく一樣に動いてゐた。夫から母や兄のゐる三階の宿が波を幾度となく被つて、くるりくと廻り出してゐた。それが片付かないうちに、此部屋の中に寐てゐる嫂の事が又氣になり出した。天災とは云へ二人で此處へ泊つた言譯を何うしたものだらうと考へた。辯解してから後、兄の機嫌を何うして取り直したものだらうとも考へた。同時に今日嫂と一所に出て、滅多にない斯んな冒險を共にした嬉しさが何處から湧いて出た。其嬉しさが出た時、自分は風も雨も海嘯も母も兄も悉く忘れた。すると其嬉しさが又俄然として一種の恐ろしさに變化した。恐ろしさと云ふよりも、寧ろ恐ろしさの前觸であつた。何處かに潜伏してゐるやうに思はれる不安の徴候であつた。さうして其時は外面を狂ひ廻る暴風雨が、木を根こぎにしたり、塀を倒したり、屋根瓦を捲くつたりするのみならず、今薄暗い行燈の下で味のない煙草を吸つてゐる此自分を、粉微塵に破壊する豫告の如く思はれた。

自分が斯んな事をぐる／＼考へてゐるうちに、蚊帳の中に死人の如く大人しくしてゐた嫂が、急に寤返をした。さうして自分に聞えるやうに長い欠伸をした。

「姉さんまだ寐ないんですか」と自分は煙草の煙の間から嫂に聞いた。

「え、だつて此吹き降りちや寐ようにも寐られないぢやありませんか」

「僕もあの風の音が耳に付て何うする事も出来ない。電燈の消えたのは、何でも此處いら近所にある柱が一本とか二本とか倒れたためだつてね」

「さうよ、其んな事を先刻下女が云つたわね」

「御母さんと兄さんは何うしたでせう」

「妾も先刻から其事ばかり考へてゐるの。然しまさか浪は這入らないでせう。這入つたつて、あの土手の松の近所にある怪しい藁屋位なものよ。持つてかれるのは。もし本當の海嘯が來てあすこ界限を悉皆攪つて行くんなら、妾本當に惜い事をしたと思ふわ」

「何故」

「何故つて、妾そんな物凄しい所が見たいんですもの」

「冗談ぢやない」と自分は嫂の言葉を打つた切る積で云つた。すると嫂は眞面目に答へた。

「あら本當よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」

自分は小説などを夫程愛讀しない嫂から、始めて斯んなロマンチックな言葉を聞いた。さうして心のうちでは全く神經の昂奮から來たに違ひないと判じた。

「何かの本にでも出て來さうな死方ですわね」

「本に出るか芝居で遣か知らないが、妾や眞劍にさう考へてるのよ。嘘だと思ふなら是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか」

「あなた今夜は昂奮してゐる」と自分は慰撫める如く云つた。

「妾の方が貴方より何の位落ち付いてゐるか知れやしない。大抵の男は意氣地なしね、いざとなると」と彼女は床の中で答へた。

自分は此時始めて女といふものをまだ研究してゐない事に気が付いた。嫂は何處から何う押ししても押し様のない女であつた。此方が積極的に進むと丸で暖簾の様に抵抗がなかつた。仕方なしに此方が引き込むと、突然變な所へ強い力を見せた。其力の中には到底も寄り付けさうにない恐ろしいものもあつた。又は是なら相手に出来るから進まうかと思つて、まだ進みかねてゐる中に、弗と消えて仕舞ふのもあつた。自分は彼女と話してゐる間始終彼女から翻弄されつゝある様な心持がした。不思議な事に、其翻弄される心持が、自分に取て不愉快であるべき筈なのに、却て愉快でならなかつた。

彼女は最後に物凄しい決心を語つた。海嘯に攫はれて行きたいとか、雷火に打たれて死にたいとか、何しろ平凡以上に壯烈な最後を望んでゐた。自分は平生から（ことに二人で此和歌山に來てから）體力や筋力に於て遙に優勢な位地に立ちつゝも、嫂に對しては何處となく無氣味な感じがあつた。さうして其無氣味さが甚だ狎れ易い感じと妙に相伴つてゐた。

自分は詩や小説にそれ程親しみのない嫂のくせに、何に昂奮して海嘯に攫はれて死にたい杯と云ふのか、其處をもつと突き留めて見たかつた。

「姉さんが死ぬなんて事を云ひ出したのは今夜始めてですわね」

「え、口へ出したのは今夜が始めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふなら、和歌の浦迄連れて行つて頂戴。屹度浪の中へ飛込んで死んで見せるから」

薄暗い行燈の下で、暴風雨の音の間に此言葉を聞いた自分は、實際物凄かつた。彼女は平生から落付いた女であつた。歇斯的里風な所は殆んどなかつた。けれども寡言な彼女の頬は常に蒼かつた。さうして何處かの調子で眼の中に意味の強い解すべからざる光が出た。

「姉さんは今夜餘程何うかしてゐる。何か昂奮してゐる事でもあるんですか」

自分は彼女の涙を見る事は出来なかつた。又彼女の泣き聲を聞く事も出来なかつた。けれども今にも其處に至りさうな氣がするので、暗い行燈の光を便りに、蚊帳の中を覗いて見た。彼女は赤い蒲團を二枚重ねて其上に縁を取つた白麻の掛蒲團を胸の所迄行儀よく掛けてゐた。自分が暗い灯で其姿を覗き込んだ時、彼女は枕を動かして自分の方を見た。

「あなたた昂奮昂奮つて、よく仰しやるけれども妾や貴方よりいくら落付いてるか解りやしない

わ。何時でも覺悟が出来てるんですもの」

自分は何と答ふべき言葉も持たなかつた。黙つて二本目の敷島を暗い灯影で吸ひ出した。自分のはわが鼻と口から濛々と出る煙ばかりを眺めてゐた。自分は其間に氣味のわるい眼を轉じて、時々蚊帳の中を窺つた。嫂の姿は死んだ様に静であつた。或は既に寐付いたのではないかとも思はれた。すると突然仰向けになつた顔の中から、「二郎さん」と云ふ聲が聞こえた。

「何ですか」と自分は答へた。

「貴方其處で何をして居らつしやるの」

「煙草を呑んでるんです。寐られないから」

「早く御休みなさいよ。寐られないと毒だから」

「えゝ」

自分は蚊帳の裾を捲くつて、自分の床の中に這入つた。

三十九

翌日は昨日と打つて變つて美しい空を朝まだきから仰ぐ事を得た。

「好い天氣になりましたね」と自分は嫂に向つて云つた。

「本當ね」と彼女も答へた。

二人は能く寐なかつたから、夢から覺めたといふ心持はしなかつた。たゞ床を離れるや否や魔から覺めたといふ感じがした程、空は蒼く染められてゐた。

自分は朝飯の膳に向ひながら、廂を洩れる明らかな光を見て、急に氣分の變化に心付いた。従つて向ひ合つてゐる嫂の姿が昨夕の嫂とは全く異なるやうな心持もした。今朝見ると彼女の眼に何處といつて浪漫的な光は射してゐなかつた。たゞ寐の足りない眼が急に爽かな光に照らされて、それに抵抗するのが如何にも慵いと云つたやうな一種の倦怠るさが見えた。頬の蒼白いのも常に變らなかつた。

人行

我々は出来る丈早く朝飯を済まして宿を立つた。電車はまだ通じないだらうといふ宿のものゝ注意を信用して俵を雇つた。車夫は土間から表に出た我々を一目見て、すぐ夫婦ものと鑑定したらしかつた。俵に乗るや否や自分の梶棒を先へ上げた。自分はそれを留める様に、「後から後か

ら」と云つた。車夫は心得て「奥さんの方が先だ」と相圖した。嫂の俾が自分の傍を擦り抜ける時、彼女は例の片脛を見せて「御先へ」と挨拶した。自分は「さあ何うぞ」と云つたやうなもの、腹の中では車夫の口にした奥さんといふ言葉が大いに氣になつた。嫂はそんな景色もなく、自分を乗り越すや否や、琥珀に刺繍のある日傘を翳した。彼女の後姿は如何にも涼しさうに見えた。奥さんと云はれても云はれないでも全く無關係の態度で、俵の上に澄まして乗つてゐるとしか思はれなかつた。

自分は嫂の後姿を見詰めながら、又彼女のひととなりに思ひ及んだ。自分は平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてゐる積であつたが、いざ本式に彼女の口から本當の所を聞いて見ようとする、丸で八幡の藪知らずへ這入つた様に、凡てが解らなくなつた。

凡ての女は、男から觀察しようとする、みんな正體の知れない嫂の如きものに歸着するのであるまいか。經驗に乏しい自分は斯うも考へて見た。又其正體の知れない所が即ち他の婦人に見出しがたい。嫂丈の特色であるやうにも考へて見た。兎に角、嫂の正體は全く解らないうちに、空が蒼々と晴れて仕舞つた。自分は氣の抜けた麥酒の様な心持を抱いて、先へ行く彼女の後姿を

絶えず眺めてゐた。

突然自分は宿へ歸つてから嫂について兄に報告をする義務がまだ残つてゐる事に氣が付いた。自分は何と報告して好いか能く解らなかつた。云ふべき言葉は澤山あつたけれども、夫を一々兄の前に並べるのは到底自分の勇氣では出来なかつた。よし並べたつて最後の一句は正體が知れないといふ簡単な事實に歸する丈であつた。或は兄自身も自分と同じく、此正體を見届ようと煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか。自分は自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は兄以上に神経を惱ましはしまいかと思つて、始めて恐ろしい心持がした。俵が宿へ着いたとき、三階の縁側には母の影も兄の姿も見えなかつた。

四十

人行

兄は三階の日に遠い室で例の黒い光澤のある頭を枕に着けて仰向きになつてゐた。けれども眠つてはゐなかつた。寧ろ充血した眼を見張るやうに緊張して天井を見詰めてゐた。彼は自分達の足音を聞くや否や、いきなり其血走つた眼を自分と嫂に注いだ。自分は兼てから其眼付を豫想し得

なかつた程兄を知らない譯でもなかつた。けれども室の入口で嫂と相並んで立ちながら、昨夕まんじりともしなかつたと自白して居るやうな彼の赤くて鋭い眼付を見た時は、少し驚かされた。自分は斯ういふ場合の緩和劑として例の通り母を求めた。其母は座敷の中にも縁側にも何處にも見當らなかつた。

自分が彼女を探してゐるうちに嫂は兄の枕元に坐つて挨拶をした。

「只今」

兄は何とも答へなかつた。嫂は又坐つたなり其處を動かさなかつた。自分は勢ひとして口を開くべく餘儀なくされた。

「昨夕此方は大變な暴風雨でしたつてね」

「うん随分非道い風だつた」

「波があゝの石の土手を越して松並木から下へ流れ込んだの」

是は嫂の言葉であつた。兄はしばらく彼女の顔を眺めてゐた。それから徐ろに答へた。

「いや左右でもない。家に故障はなかつた筈だ」

「ぢや。無理に歸れば歸れたのね」

嫂は斯う云つて自分を顧みた。自分は彼女よりも寧ろ兄の方に向いた。

「いや到底も歸れなかつたんです。電車がだいち通じないんですもの」

「左右かも知れない。昨日は夕方あたりからあの波が非常に高く見えたから」

「夜中に宅が揺れやしなかつて」

是も嫂の兄に聞いた問であつた。今度は兄がすぐ答へた。

「揺れた。お母さんは危険だからと云つて下へ降りて行かれた位揺れた」

自分は兄の眼色の險惡な割合に、夫程殺氣を帯びてゐない彼の言語動作を漸々確め得た時やつと安心した。彼は自分の性急に比べると約五倍がたの癩癩持であつた。けれども一種天賦の能力があつて、時に其癩癩を巧に殺す事が出来た。

其内に明神様へ御参りに行つた母が歸つて來た。彼女は自分の顔を見て漸く安心したといふやうな色をして呉れた。

「よく早く歸れて好かつたね。——まあ昨夕の恐ろしさつたら、夫や御話にも何にもならない

人行

んだよ、二郎。此柱がぎい／＼つて鳴るたんびに、座敷が右左に動くんだらう。そこへ持つて来て、あの浪の音がね。——わたしや今聞いても本當に慄とするよ……」
母は昨夕の暴風雨を非道く怖がつた。殊に其聯想から出る、防波堤を碎きにかゝる浪の音を嫌つた。

「もう／＼和歌の浦も御免。海も御免。慾も得も要らないから、早く東京へ歸りたいよ」
母は斯う云つて眉をひそめた。兄は肉のない頬へ皺を寄せて苦笑した。

「二郎達は昨夕何處へ泊つたんだい」と聞いた。

自分は和歌山の宿の名を擧げて答へた。

「好い宿かい」

「何だか彼だか、たゞ暗くつて陰氣な文です。ねえ姉さん」

其時兄は走るやうな眼を嫂に轉じた。

嫂はたゞ自分の顔を見て「丸でお化でも出さうな宅ね」と云つた。

日の夕暮に自分は嫂と階段の下で出逢つた。其時自分は彼女に「何うです、兄さんは怒つてる

んでせうか」と聞いて見た。嫂は「何うだか腹の中は一寸解らないわ」と淋しく笑ひながら上へ昇つて行つた。

四十一

母が暴風雨に怖氣が付いて、早く立たうと云ふのを機に、みんな此處を切上て一刻も早く歸る事にした。

「如何な名所でも一日二日は好いが、長くなると詰らないですね」と兄は母に同意してゐた。

母は自分を小蔭へ呼んで、「二郎お前何うする積だい」と聞いた。自分は自分の留守中に兄が萬事を母に打ち明けたのかと思つた。然し兄の平生から察すると、そんな行き抜けの人と成でもなさうであつた。

「兄さんは昨夕僕等が歸らないんで、機嫌でも悪くしてゐるんですか」

自分が斯う質問を掛けた時、母は少しの間黙つてゐた。

「昨夕はね、知つての通りの浪や風だから、そんな話をする閑も無かつたけれども……」

母は何うしても其處迄しか云はなかつた。

「お母さんは何だか僕と嫂さんの仲を疑ぐつてゐらつしやる様だが……」と云ひ掛けると、今迄自分の眼を凝と見てゐた母は急に手を振つて自分を遮つた。

「そんな事があるものかねお前、お母さんに限つて」

母の言葉は實際判然した言葉に違なかつた。顔付も眼付もきび／＼してゐた。けれども彼女の腹の中は到底讀めなかつた。自分は親身の子として、時たま本當の父や母に向ひながら嘘と知りつゝ眞顔で何か云ひ聞かされる事を覺えて以來、世の中で本式の本當を云ひ續けに云ふものは一人もないと諦めてゐた。

「兄さんには僕から萬事話す事になつてゐます。さう云ふ約束になつてゐるんだから、お母さんが心配なさる必要はありません。安心して居らつしやい」

「ちや成るべく早く片付けた方が好いよ二郎」

自分達は其明る宵の急行で東京へ歸る事に極めてゐた。實はまだ大阪を中心として、見物かた／＼歩くべき場所は澤山あつたけれども、母の氣が進まず、兄の興味が乗らず、大阪で中繼をす

る時間さへ惜んで、すぐ東京迄寢臺で通さうと云ふのが母と兄の主張であつた。

自分達は是非共翌日の朝の汽車で和歌山から大阪へ向けて立たなければならなかつた。自分は母の命令で岡田の宅迄電報を打つた。

「佐野さんへは掛ける必要もないでせう」と云ひながら自分は母と兄の顔を眺めた。

「あるまい」と兄が答へた。

「岡田へさへ打つて置けば、佐野さんは打ちやつて置いても屹度送りに来て呉れるよ」

自分は電報紙を持ちながら、是非共お貞さんを貰ひたいといふ佐野のお凸額と其金縁眼鏡を思ひ出した。

「では彼のお凸額さんは止て置かう」

自分は斯う云つて、みんなを笑はせた。自分が疾うから佐野の御凸額を氣にしてゐた如く、外のものも同じ人の同じ特色を注意してゐたらしかつた。

「寫眞で見たより御凸額ね」と嫂は眞面目な顔で云つた。

自分は冗談のうちに自分を紛しつゝ、何んな折を利用して嫂の事を兄に復命したものだらうか

と考へてゐた。それで時々偷むやうに又先方の氣の付かない様に兄の様子を見た。所が兄は自分の豫期に反して、全くそれには無頓着の様に思はれた。

四十二

自分が兄から別室に呼出されたのは夫が済んで少時してゝあつた。其時兄は常に變らない様子をして、(嫂に評させると常に變らない様子を装つて)「二郎一寸話がある。彼方の室へ来て呉れ」と穩かに云つた。自分は大人しく「はい」と答へて立つた。然し何うした機が立つときに嫂の顔を一寸見た。其時は何の氣も付かなかつたが、此平凡な所作が其後自分の胸には絶えず驕慢の發現として響いた。嫂は自分と顔を合せた時、いつもの通り片脛を見せて笑つた。自分と嫂の眼を他から見たら、何處かに得意の光を帯びてゐたのではあるまいか。自分は立ちながら、次の室で浴衣を疊んでゐた母の方を一寸顧みて、思はず立竦んだ。母の眼付は先刻からたつた一人ですつと我々を観察してゐたとしか見えなかつた。自分は母から疑惑の矢を胸に射付けられたやうな氣分で兄の居る室へ這入つた。

其頃は丁度舊曆の盆で、所謂盆波の荒いためか、泊り客は無論、日返りの遊び客さへ何時も程は影を見せなかつた。廣い三階建ては従つて空いてゐる室の方が多かつた。少しの間融通しようと思へば、何時でも自分の自由になつた。

兄は兼てから下女に命じて置いたものと見えて、室には麻の蒲團が差し向ひに二枚、華奢な煙草盆を間に、團扇さへ添へて据ゑられてあつた。自分は兄の前に坐つた。けれども何と云ひ出して然るべきだか、其手加減が一寸解らないので、たゞ黙つてゐた。兄も容易に口を開かなかつた。然しこんな場合になると性質上屹度兄の方から積極的になるに違ひないと踏んだ自分は、わざと巻簾を吹かしつゞけた。

自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戲ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす氣味でゐたのは慥である。尤も自分が何故それ程兄に對して大膽になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つてゐたものだらう。自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。自分が巻簾を吹かして黙つてゐると兄は果して「二郎」と呼びかけた。

「お前直の性質が解つたかい」

「解りません」

自分は兄の間の餘りに嚴格なため、つい斯う簡単に答へて仕舞つた。さうして其あまりに形式的な後から氣が付いて、悪かつたと思ひ返したが、もう及ばなかつた。

兄は其後一口も聞きもせず、又答へもしなかつた。二人斯うして黙つてゐる間が、自分には非常な苦痛であつた。今考へると兄には、猶更の苦痛であつたに違ない。

「二郎、おれはお前の兄として、たゞ解りませんといふ冷淡な挨拶を受けようとは思はなかつた」

兄は斯う云つた。さうして其聲は低くかつ顫へてゐた。彼は母の手前、宿の手前、又自分の手前と問題の手前とを兼ね、高くなるべき筈の咽喉を、やつとの思ひで抑へてゐるやうに見えた。

「お前そんな冷淡な挨拶を一口したぎりで済むものと、高を括つてるのか、子供ちやあるまいし」

「いえ決して其んなわけぢやありません」

是文の返事をした時の自分は眞に純良なる弟であつた。

四十三

「さう云ふ積でなければ、積でない様にもつと詳しく話したら好いちやないか」

兄は苦り切つて團扇の繪を見詰めてゐた。自分は兄に顔を見られないのを幸ひに、暗に彼の様子を窺つた。自分から斯ういふと兄を輕蔑するやうで甚だ濟まないが、彼の表情の何處かには、といふよりも、彼の態度の何處かには、少し大人氣を缺いた稚氣さへ現はれてゐた。今の自分は此純粹な一本調子に對して、相應の尊敬を拂ふ見地を具へてゐる積である。けれども人格の出來てゐなかつた當時の自分には、たゞ向の隙を見て事をするのが賢いのだといふ利害の念が、斯んな問題に迄付け纏はつてゐた。

自分はしばらく兄の様子を見てゐた。さうして是は與し易いといふ心が起つた。彼は痲癩を起してゐる。彼は焦れ切つてゐる。彼はわざとそれを抑へようとしてゐる。全く餘裕のない程緊張してゐる。然し風船球の様に軽く緊張してゐる。もう少し待つてゐれば自分の力で破裂するか、

又は自分の力で何處かへ飛で行くに相違ない。——自分は斯う觀察した。

嫂が兄の手に合はないのも全く此處に根ざしてゐるのだと自分は此時漸く勘付いた。又嫂として存在するには、彼女の遣口が一番巧妙なんだらうとも考へた。自分は今日迄たゞ兄の正面ばかり見て、遠慮したり氣兼ねしたり、時によつては恐れ入つたりしてゐた。然し昨日一日一晚嫂と暮した経験は圖らずも此苦々しい兄を裏から甘く見る結果になつて眼前に現はれて來た。自分は何時嫂から兄を斯う見ろと教はつた覺はなかつた。けれども兄の前へ出て、是程度胸の据つた事も亦なかつた。自分は比較的濟まして、團扇を見詰めてゐる兄の額のあたりを此方でも見詰めてゐた。

すると兄が急に首を上げた。

「二郎何とか云はないか」と勵しい言葉を自分の鼓膜に射込んだ。自分は其聲で又はつと平生の自分に返つた。

「今云はうと思つてる所です。然し事が複雑な丈に、何から話して好いか解らないんで一寸困つてるんです。兄さんも外の事たあ違ふんだから、最う少し打ち解けて緩くり聞いて下さらなく

つちや。さう裁判所みたやうに生眞面目に叱り付けられちや、折角咽喉迄出掛つたものも、辟易して引込んぢまいますから」

自分が斯う云ふと、兄は流石に一見識ある人丈あつて、「あゝ左右か己が悪かつた。お前が性急の上へ持つて來て、己が痲痺持と來てゐるから、つい變にもなるんだらう。二郎、それちや何時緩り話される。緩り聞く事なら今でも己には出来る積だが」と云つた。

「まあ東京へ歸る迄待つて下さい。東京へ歸るたつて、あすの晩の急行だから、もう直です。其上で落付いて僕の考へも申し上げたいと思つてますから」

・「夫でも好い」

兄は落付いて答へた。今迄の彼の痲痺を自分の信用で吹き拂ひ得た如くに。

「では何うか、左右願ひます」と云つて自分が立ち掛けた時、兄は「あゝ」と肯づいて見せたが、自分が敷居を跨ぐ拍子に「おい二郎」と又呼び戻した。

「詳しい事は追つて東京で聞くとして、唯一言だけ要領を聞いて置かうか」

「姉さんに就いて……」

「無論」

「姉さんの人格に就て、御疑ひになる所は丸であります」
自分が斯う云つた時、兄は急に色を變へた。けれども何にも云はなかつた。自分はそれぎり席を立てて仕舞つた。

四十四

自分は其時場合によれば、兄から拳骨を食ふか、又は後から熱罵を浴せ掛けられる事と豫期してゐた。色を變へた彼を後に見捨て、自分の席を立つた位だから、自分は普通より餘程彼を見縊つてゐたに違なかつた。其上自分はいざとなれば腕力に訴へても嫂を辯護する氣概を十分具へてゐた。是は嫂が潔白だからといふよりも嫂に新たなる同情が加はつたからと云ふ方が適切かも知れなかつた。云ひ換へると、自分は兄を夫丈輕蔑し始めたのである。席を立つ時などは多少彼に對する敵愾心さへ起つた。

自分が室へ歸つて來た時、母はもう浴衣を疊んではゐなかつた。けれども小さい行李の始末に

餘念なく手を動かしてゐた。それでも心は手許になかつたと見えて、自分の足音を聞くや否や、すぐ此方を向いた。

「兄さんは」

「今來るでせう」

「もう話は済んだの」

「済むの済まないのつて、始めからそんな大した話ぢやないんです」

自分は母の氣を休めるため、わざと蒼蠅さうに斯う云つた。母は又行李の中へ、こまなくしたものを出したり入れたりし始めた。自分は今度は彼の女に耻ぢて、決して傍に手傳つてゐる嫂の顔を敢て見なかつた。それでも彼女の若くて淋しい唇には冷かな笑の影が、自分の眼を掠めるやうに過ぎた。

「今から荷造りですか。ちつと早過ぎるな」と自分はわざと年を取つた母を嘲ける如く注意した。

人行
「だつて立つとなれば、成るだけ早く用意して置いた方が都合が好いからね」

「左右ですとも」

嫂の此返事は、自分が何か云はうとする先を越して聲に應ずる響の如く出た。

「ぢや繩でも絡げませう。男の役だから」

自分は兄と反對に車夫や職人のするやうな荒仕事に妙を得てゐた。ことに行李を括るのは得意であつた。自分が繩を十文字に掛け始めると、嫂はすぐ立つて兄の居る室の方に行つた。自分は思はず其後姿を見送つた。

「二郎兄さんの機嫌は何うだつたい」と母がわざ／＼小さな聲で自分に聞いた。

「別は是と云ふ事ありません。なあに心配なさる事があるもんですか。大丈夫です」と自分は殊更に荒つぽく云つて、右足で行李の蓋をぎい／＼締めた。

「實はお前にも話したい事があるんだが。東京へでも歸つたら何れ又緩くりね」

「え、緩くり伺ひませう」

自分は斯う無造作に答へながら、腹の中では母の所謂話なるものゝ内容を臆氣ながら髣髴した。少時すると、兄と嫂が別席から出て來た。自分は平氣を粧ひながら母と話してゐる間にも、兩

人の會見と其會見の結果に就いて多少氣掛りな所があつた。母は二人の並んで來る様子を見て、やつと安心した風を見せた。自分にも何處かにそんな所があつた。

自分は行李を絡げる努力で、顔やら脊中やらから汗が澤山出た。腕揺りをした上、浴衣の袖で汗を容赦なく拭いた。

「おい暑さうだ。少し扇いで遣るが好い」

兄は斯う云つて嫂を顧みた。嫂は靜に立つて自分を扇いで呉れた。

「何よござんす。もう直ですから」

自分が斯う斷つてゐるうちに、やがて明日の荷造りは出來上つた。

歸つてから

一

自分は兄夫婦の仲が何うなる事かと思つて和歌山から歸つて來た。自分の豫想は果して外れなかつた。自分は自然の暴風雨に次で、兄の頭に一種の旋風が起る徴候を十分認めて彼の前を引き下つた。けれども其徴候は嫂が行つて十分か十五分話してゐるうちに、殆んど警戒を要しない程穩かになつた。

自分は心のうちで此變化に驚いた。針鼠の様に尖つてゐるあの兄を、僅かの間に丸め込んだ嫂の手腕には猶更敬服した。自分は漸く安心したやうな顔を、晴々と輝かせた母を見る丈でも満足であつた。

兄の機嫌は和歌の浦を立つ時も變らなかつた。汽車の内でも同じ事であつた。大阪へ來ても猶續いてゐた。彼は見送りに出た岡田夫婦を捕まへて戲談さへ云つた。

「岡田君お重に何か言傳はないかね」

岡田は要領を得ない顔をして、「お重さんに文ですか」と聞き返してゐた。

「さうさ君の仇敵のお重にさ」

兄が斯う答へた時、岡田はやつと氣の付いたといふ風に笑ひ出した。同じ意味で謎の解けたお兼さんも笑ひ出した。母の豫言通り見送りに來てゐた佐野も、漸く笑ふ機會が來た様に、憚りなく口を開いて周囲の人を驚かした。

自分は其時迄、嫂に何うして兄の機嫌を直したかを聞いて見なかつた。其後もついぞ聞く機會を有たなかつた。けれども斯ういふ靈妙な手腕を有つてゐる彼女であればこそ、あの兄に對して始終あゝ高を括つてゐられるのだと思つた。さうして其手腕を彼女はわざと出したり引込ましたりする、單に時と場合ばかりでなく、全く己れの氣儘次第で出したり引込ましたりするのではあるまいかと疑ぐつた。

人行

汽車は例の如く込み合つてゐた。自分達は仕切りの付いてゐる寢臺をやつとの思ひで四つ買つた。四つで一室になつてゐるので都合は大變好かつた。兄と自分は體力の優秀な男子と云ふ譯で、

婦人方二人に、下のベッドを當がつて、上へ寐た。自分の下には嫂が横になつてゐた。

自分は暗い中を走る汽車の響のうちに自分の下にある嫂を何うしても忘れる事が出来なかつた。彼女の事を考へると愉快であつた。同時に不愉快であつた。何だか柔かい青大將に身體を絡まれるやうな心持もした。

兄は谷一つ隔て、向ふに寐てゐた。是は身體が寐てゐるよりも本當に精神が寐てゐるやうに思はれた。さうして其寐てゐる精神を、ぐにや／＼した例の青大將が筋違に頭から足の先迄巻き詰めてゐる如く感じた。自分の想像には其青大將が時々熱くなつたり冷たくなつたりした。夫からその巻きやうが緩くなつたり、緊くなつたりした。兄の顔色は青大將の熱度の變する度に、それから其絡みつく強さの變する度に、變つた。

自分は自分の寐臺の上で、半は想像の如く半は夢の如くに此青大將と嫂とを連想して已なかつた。自分は此詩に似たやうな眠が、驛夫の呼ぶ名古屋名古屋と云聲で、急に破られたのを今でも記憶してゐる。其時汽車の音がはたりと留ると同時に、さあといふ雨の音が聞こえた。自分は靴足袋の裏に濕氣を感じて起き上ると、足の方に當る窓が塵除の紗で張てあつた。自分はいそい

で窓を閉て換へた。外の人のは何うかと思つて、聞いて見たが、答がなかつた。たゞ嫂丈が雨が降り込むやうだといふので、已を得ず上から飛び下りて又窓を閉て換へてやつた。

二

「雨の様ね」と嫂が聞いた。

「ええ」

自分は半ば風に吹き寄せられた厚い窓掛の、じと／＼に濕つたのを片方へがらりと引いた。途端に母の寐返りを打つ音が聞こえた。

「二郎、此處は何處だい」

「名古屋です」

自分は吹き込む紗の窓を通して、殆んど人影の射さない停車場の光景を、雨のうちに眺めた。名古屋々々と呼ぶ聲がまだ遠くの方で聞こえた。夫からこつりこつりといふ足音がたつた一人で行

「二郎序に妾の足の方も縮めて御呉れな」

「御母さんの所も硝子が閉つてゐないんですか。先刻呼んだら能く寐て居らつしやる様でしたから……」

自分は嫂の方を片付けて、すぐ母の方に行つた。厚い窓掛を片寄せて、手探りに探つて見ると、案外にも立派に硝子戸が締まつてゐた。

「御母さん此方は雨なんか遣入りやしませんよ。大丈夫です、此通りだから」

自分がかう云ひながら、母の足の方に當る硝子を、とん／＼と手で叩いて見せた。

「おや雨は遣入らないのかい」

「遣入るものですか」

母は微笑した。

「何時頃から雨が降り出したか御母さんは些とも知らなかつたよ」

母はさも愛想らしく又辯疏らしく口を利いて、「二郎、御苦勞だつたね、早く御休み。もう餘つ程遅いんだらう」と云つた。

時計は十二時過ぎであつた。自分は又そつと上の寢臺に登つた。車室は元の通り静かになつた。

嫂は母が口を利き出してから、何も云はなくなつた。母は自分が自分の寢臺に上つてから、何も云はなくなつた。たゞ兄丈は始めから仕舞迄一言も物を云はなかつた。彼は聖者の如く只すやすやと眠つてゐた。此眠方が自分には今でも不審の一つになつてゐる。

彼は自分で時々公言する如く多少の神経衰弱に陥つてゐた。さうして時々不眠のために苦しめられた。又正直にそれを家族の誰彼に訴へた。けれども眠くて困ると云つた事は未だ會つてなかつた。

富士が見え出して雨上りの雲が列車に逆らつて飛ぶ景色を、みんなが起きて珍らしさうに眺める時すら、彼は前後に關係なく心持よささうに寐てゐた。

食堂が開いて乗客の多數が朝飯を済ました後、自分は母を連れて昨夜以來の空腹を充たすべく細い廊下を傳はつて後部の方へ行つた。其時母は嫂に向つて、「もう好い加減に一郎を起して、一所に彼方へ御出で。妾達は向へ行つて待つてゐるから」と云つた。嫂は何時もの通り淋しい笑ひ方をして、「え、直御後から参ります」と答へた。

自分達は室内の掃除に取り懸らうとする給仕を後にして食堂へ這入つた。食堂はまだ大分込んでゐた。出たり這入つたりするものが絶えず狭い通り路をざわつかせた。自分が母に紅茶と果物を勧めてゐる時分に、兄と嫂の姿が漸く入口に現れた。不幸にして彼等の席は自分達の傍に見出せる程、食卓は空いてゐなかつた。彼等は入口の所に差し向ひで座を占めた。さうして普通の夫婦のやうに笑ひながら話したり、窓の外を眺めたりした。自分を相手に茶を啜つてゐた母は、時々其様子を満足らしく見た。

自分達は斯くして東京へ歸つたのである。

三

繰返していふが、我々は斯うして東京へ歸つたのである。

東京の宅は平生の通り別にこれと云つて變つた様子もなかつた。お貞さんは襦袢を掛けて別條なく働いてゐた。彼女が手拭を被つて洗濯をしてゐる後姿を見て、一段落置いた昔のお貞さんを思ひだしたのは、歸つて二日目の朝であつた。

芳江といふのは兄夫婦の間に出来た一人つ子であつた。留守のうちはお重が引受けて萬事世話をしてゐた。芳江は元來母や嫂に馴付いてゐたが、いざとなると、お重丈でも不自由を感じない程世話の焼けない子であつた。自分はそれを嫂の氣性を受けて生れたためか、さうでなければお重の愛嬌のあるためだと解釋してゐた。

「お重お前の様なものが能くあの芳江を預かる事が出来るね。流石にやつぱり女だなあ」と父が云つたら、お重は膨れた顔をして、「御父さんも随分な方ね」と母にわざ／＼訴へに來た話を、汽車の中で聞いた。

自分は歸つてから一兩日して、彼女に、「お重お前を御父さんが矢つ張り女だなと仰しやつたつて怒つてるさうだね」と聞いた。彼女は「怒つたわ」と答へたなり、父の書齋の花瓶の水を易へながら、乾いた布巾で水を切つてゐた。

「まだ怒つてるのかい」

「まだつて最う忘れちまつたわ。——綺麗ね此花は何といふんでせう」

「お重然し、女だなあといふのは、夫りや賞めた言葉だよ。女らしい親切な子だといふんだ。

怒る奴があるもんか」

「何うでも能くつてよ」

お重は帯で隠した尻の邊を左右に振つて、両手で花瓶を持ちながら父の居間の方へ行つた。それが自分には恰も彼女が尻で怒を見せてゐるやうで可笑かつた。

芳江は我々が歸るや否や、すぐお重の手から母と嫂に引渡された。二人は彼女を奪ひ合ふ様に抱いたり下したりした。自分の平生から不思議に思つてゐたのは、この外見上冷靜な嫂に、頑固でない芳江がよくあれ程に馴付得たものだといふ眼前の事實であつた。この眸の黒い髪の澤山ある、さうして母の血を受けて人並よりも蒼白い頬をした少女は、馴れ易からざる彼女の母の後を、奇蹟の如く追つて歩いた。それを嫂は日本一の誇りとして、宅中の誰彼に見せびらかした。ことに己の夫に對しては見せびらかすといふ意味を通り越して、寧ろ残酷な敵打をする風にも取れた。兄は思索に遠ざかる事の出来ない讀書家として、大抵は書齋裡の人であつたので、いくら腹のうちで此少女を鍾愛しても、鍾愛の報酬たる親しみの程度は甚だ稀薄なものであつた。感情的な兄がそれを物足らず思ふのも無理はなかつた、食卓の上などで夫が色に出る時さへ兄の性質として

は偶にはあつた。さうなると外のものよりお重が承知しなかつた。

「芳江さんは御母さん子ね。何故御父さんの側に行かないの」など、故意とらしく聞いた。

「だつて……」と芳江は云つた。

「だつて何うしたの」とお重が又聞いた。

「だつて怖いから」と芳江はわざと小さな聲で答へた。それがお重には猶更忌々しく聞こえるのであつた。

「なに？怖いつて？誰が怖いの？」

斯んな問答がよく繰り返へされて、時には五分も十分も續いた。嫂は斯う云ふ場合に、決して眉目を動かさなかつた。何時でも蒼い頬に微笑を見せながら何處までも尋常な應對をした。仕舞には父や母が雙方を宥めるために、兄から果物を貰はしたり、菓子を受け取らしたりさせて、「さあ夫で好い。御父さんから旨いものを頂戴して」とやつと御茶を濁す事もあつた。お重は夫でも腹が癒えなさうに膨れた頬をみんなに見せた。兄は黙つて獨り書齋へ退くのが常であつた。

父は其年始めて誰かゝら朝貌を作る事を教はつて、しきりに變つた花や葉を愛玩してゐた。變つたと云つても普通のものがたゞ縮れて見立がなくなる丈だから、宅中でそれを顧みるものは一人もなかつた。たゞ父の熱心と彼の早起と、幾何も並んでゐる鉢と、綺麗な砂と、それから最後に、厭に拗ねた花の様や葉の形に感心する丈に過ぎなかつた。

父はそれらを縁側へ並べて誰を捉まへても説明を怠らなかつた。

「成程面白いですなあ」と正直な兄までさも感心したらしく御世辭を餘儀なくされてゐた。

父は常に我々とは懸け隔つた奥の二間を専領してゐた。簀垂の懸つた其縁側に、朝貌は何時でも並べられた。従つて我々は「おい一郎」とか「おいお重」とか云つて、わざ／＼其處へ呼び出されたものであつた。自分は兄よりも遙に父の氣に入るやうな贊辭を呈して引き退がつた。さうして父の聞えない所で、「何うもあんな朝貌を賞めなけりやならないなんて、實際恐れ入るね。親父の酔興にも困つちまふ」など、悪口を云つた。

一體父は講釋好の説明好であつた。其上時間に暇があるから、誰でも構はず、號鈴を鳴らして呼寄せては色々な話をした。お重などは呼ばれるたびに、「兄さん今日は御願だから代りに行つて頂戴」と云ふ事がよくあつた。其お重に父は又解り悪い事を話すのが大好だつた。

自分達が大阪から歸つたとき朝貌はまだ咲いてゐた。然し父の興味はもう朝貌を離れてゐた。

「何うしました。例の變り種は」と自分が聞いて見ると、父は苦笑ひをして「實は朝貌もあまり思はしくないから、來年からはもう止めだ」と答へた。自分は大方父の誇りとして我々に見せた妙な花や葉が、恐らく其道の人から鑑定すると、成つてゐなかつたらうと判斷して、茶の間で大きな聲を立て、笑つた。すると例のお重とお貞さんが父を辯護した。

「さうぢや無いのよ。あんまり手数が掛るんで、御父さんも根氣が盡きちまつたのよ。夫でも御父さんだからあれ丈に出來たんですつて、皆な賞めて居らしたわ」

母と嫂は自分の顔を見て、さも自分の無識を嘲けるやうに笑ひ出した。すると傍にゐた小さな芳江迄が嫂と同じやうに意味のある笑ひ方をした。

こんな瑣事で日を暮してゐるうちに兄と嫂の間柄は自然自分達の胸を離れるやうになつた。自

分はかねて約束した通り、兄の前へ出て嫂の事を説明する必要がなくなつた様な気がした。母が東京へ歸つてから緩くり話さうと云つた六づかしさうな事件も母の口から容易に出ようとも思へなかつた。最後にあれ程嫂に就いて智識を得たがつてゐた兄が、段々冷靜に傾いて來た。其代り父母や自分に對しても前程は口を利かなくなつた。暑い時でも大抵は書齋へ引籠つて何か熱心に遣つてゐた。自分は時々嫂に向つて、「兄さんは勉強ですか」と聞いた。嫂は「えゝ大方來學年の講義でも作つてるんでせう」と答へた。自分は成程と思つて、其忙しさが永く續くため、彼の心を全然其方の方へ轉換させる事が出来はしまいかと念じた。嫂は平生の通り淋しい秋草のやうに其處らを動いてゐた。さうして時々片唇を見せて笑つた。

五

其うち夏も次第に過ぎた。宵々に見る星の光が夜毎に深くなつて來た。梧桐の葉の朝夕風に揺ぐのが、肌に応へるやうに眼をひや／＼と揺振つた。自分は秋に入ると生れ變つた様に愉快な気分を時々感じ得た。自分より詩的な兄は曾て透き通る秋の空を眺めてあゝ生き甲斐のある天だといふ時々を感じ得た。自分より詩的な兄は曾て透き通る秋の空を眺めてあゝ生き甲斐のある天だとい

云つて嬉しさに眞蒼な頭の上を眺めた事があつた。

「兄さん愈生き甲斐のある時候が來ましたね」と自分は兄の書齋のエランダに立つて彼を顧みた。彼は其處にある藤椅子の上に寐て居た。

「まだ本當の秋の氣分にやなれない。もう少し経たなくつちや駄目だね」と答へて彼は膝の上に伏せた厚い書物を取り上げた。時は食事前の夕方であつた。自分はそれなり書齋を出て下へ行かうとした。すると兄が急に自分を呼び止めた。

「芳江は下にゐるかいい」

「居るでせう。先刻裏庭で見たやうでした」

自分は北の方の窓を開けて下を覗いて見た。下には特に彼女の爲に植木屋が拵へたブランコがあつた。然し先刻ゐた芳江の姿は見えなかつた。「おや何處へか行つたかな」と自分が獨言を云つてると、彼女の鋭い笑ひ聲が風呂場の中で聞えた。

「あゝ湯に這入てゐます」

「直と一所がい。御母さんとかい」

芳江の笑ひ聲の間には儘に、女として深さのあり過ぎる嫂の聲が聞えた。

「姉さんです」と自分は答へた。

「大分機嫌が好ささうぢやないか」

自分は思はず斯う云た兄の顔を見た。彼は手に持つてゐた大きな書物で頭まで隠してゐたから此言葉を發した時の表情は少しも見る事が出来なかつた。けれども、彼の意味は其調子で自分によく呑み込めた。自分は少し逡巡した後で、「兄さんは子供をあやす事を知らないから」と云つた。兄の顔は夫でも書物の後に隠れてゐた。それを急に取るや否や彼は「己の綾成す事の出来ないのは子供ばかりぢやないよ」と云つた。自分は黙つて彼の顔を打ち守つた。

「己は自分の子供を綾成す事が出来ないばかりぢやない。自分の父や母でさへ綾成す技巧を持つてゐない。それ所か肝心のわが妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が付かないんだ。此年になる迄學問をした御蔭で、そんな技巧は覺える餘暇がなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする爲に、何うしても必要と見えるね」

「でも立派な講義さへ出來りや、それで凡てを償つて餘あるから好いでさあ」

自分は斯う云つて、様子次第、退却しようとした。所が兄は中止する氣色を見せなかつた。

「己は講義を作るため許に生れた人間ぢやない。然し講義を作つたり書物を讀んだりする必要があるために肝心の人間らしい心持を人間らしく満足させる事が出来なくなつてしまつたのだ。でなければ先方で満足させて呉れる事が出来なくなつたのだ」

自分は兄の言葉の裏に、彼の周囲を呪ふやうに苦々しい或物を發見した。自分は何とか答へなければならなかつた。然し何と答へて好いか見當が付なかつた。たゞ問題が例の嫂事件を再發させては大變だと考へた。それで卑怯の様ではあるが、問答が其處へ流れ入る事を故意に防いだ。「兄さんが考へ過ぎるから、自分でさう思ふんですよ。夫よりか此好天氣を利用して、今度の日曜日に、何處かへ遠足でもしようぢやありませんか」

兄はかすかに「うん」と云つて慵げに承諾の意を示した。

六

人行
兄の顔には孤獨の淋しみが廣い額を傳はつて瘠けた頬に漲つてゐた。

「二郎己は昔から自然が好きだが、詰り人間と合はないので、巳を得ず自然の方に心を移す譯になるんだらうかな」

自分は兄が氣の毒になつた。「そんな事はないでせう」と一口に打ち消して見た。けれどもそれで兄の満足を買ふ譯には行かなかつた。自分はすかさず又斯う云つた。

「矢つ張り家の血統にさう云ふ傾きがあるんですよ。御父さんは無論、僕でも兄さんの知つていらつしやる通りですし、夫にね、あのお重が又不思議と、花や木が好きで、今ちや山水畫などを見ると感に堪へたやうな顔をして時々眺めてゐる事がありますよ」

自分は成るべく兄を慰めようとして、色々な話をしてゐた。其處へお貞さんが下から夕食の報知に來た。自分は彼女に、「お貞さんは近頃嬉しいと見えて妙にこゝろしてゐますね」と云つた。自分が大阪から歸るや否や、お貞さんは暑い下女室の隅に引込んで容易に顔を出さなかつた。それが大阪から出したみんなの合併繪葉書の中へ、自分がお貞さん宛に「御目出たう」と書いた五字から起つたのだと知れて家内中大笑ひをした。其爲か一つ家にゐながらお貞さんは變に自分を回避した。従つて顔を合はせると自分は殊更に何か云ひたくなつた。

「お貞さん何が嬉しいんですか」と自分は面白半分追窮するやうに聞いた。お貞さんは手を突いたなり耳迄赤くなつた。兄は藤椅子の上からお貞さんを見て、「お貞さん、結婚の話で顔を赤くするうちが女の花だよ。行つて見るとね、結婚は顔を赤くする程嬉しいものでもなければ、耻づかしいものでもないよ。それ所か、結婚をして一人の人間が二人になると、一人でゐた時よりも人間の品格が墮落する場合が多い。恐ろしい目に會ふ事さへある。まあ用心が肝心だ」と云つた。お貞さんには兄の意味が全く通じなかつたらしい。何と答へて好いか解らないので、寧ろ途方に暮れた顔をしながら涙を眼に一杯溜めてゐた。兄はそれを見て、「お貞さん餘計な事を話して御氣の毒だつたね。今のは冗談だよ。二郎の様な向ふ見ずに云つて聞かせる事を、ついお貞さん見たいな優しい娘さんに云つちまつたんだ。全くの間違だ。勘辨して呉れ玉へ。今夜は御馳走があるかね。二郎それぢや御膳を食べに行かう」と云つた。

お貞さんは兄が藤椅子から立ち上るのを見るや否や、すぐ腰を立て、一足先へ階子段をとん／＼と下りて行つた。自分は兄と肩を比べて室を出に掛つた。其時兄は自分を願ひて「二郎、此間の問題もそれぎりになつてゐたね。つい書物や講義の事が忙しいものだから、聞かう」と思

ひながら、つい其儘にして置いて濟まない。其内緩くり聴く積だから、どうか話して呉れ」と云つた。自分は「此間の問題とは何ですか」と空惚けたかつた。けれどもそんな勇氣は此際出る餘裕がなかつたから、まづ體裁の好い挨拶文をして置いた。

「斯う時間が経つと、何だか氣の抜けた麥酒見た様で、僕には話し悪くなつて仕舞ひましたよ。然し折角のお約束だから聴くと仰しやれば遣らん事ありませんがね。然し兄さんの所謂生き甲斐のある秋にもなつたものだから、其んな詰らない事より、先づ第一に遠足でもしようぢやありませんか」

「うん遠足も好からうが……」

二人は斯んな話を交換しながら、食卓の据ゑてある下の室に入つた。さうして其處に芳江を傍に引き付けてゐる嫂を見出した。

七

食卓の上で父と母は偶然又お貞さんの結婚問題を話頭に上せた。母は兼て白縮緬を織屋から買

つて置いたから、それを紋付に染めようと思つてゐるなど、云つた。お貞さんは其時みんなの後に坐つて給仕をしてゐたが、急に黒塗の盆をおはちの上へ置いたなり席を立てて仕舞つた。

自分は彼女の後姿を見て笑ひ出した。兄は反對に苦い顔をした。

「二郎お前が無暗に調戲ふから不可ない。あゝ云ふ乙女にはもう少しデリカシーの籠つた言葉を使つて遣なくつては」

「二郎は丸で堂摺連と同じ事だ」と父が笑ふやうな又窘なめる様な句調で云つた。母文は一人不思議な顔をしてゐた。

「何二郎がね。お貞さんの顔さへ見れば御目出たうだの嬉しい事がありさうだのつて、色々の事を云ふから、向ふでも恥かしがるんです。今も二階で顔を赤くさせた許の所だもんだから、すぐ逃げ出したんです。お貞さんは生れ付からして直とは丸で違つてるんだから、此方でも其積で注意して取り扱つて遣らないと不可ません……」

兄の説明を聞いた母は始めて成程と云つたやうに苦笑した。もう食事を済ましてゐた嫂は、わざと自分の顔を見て變な眼遣をした。それが自分には一種の相圖の如く見えた。自分は父から評

された通り大分堂摺連の傾きを持つてゐたが、此時は父や母に憚つて、嫂の相圖を返す氣は毫も起らなかつた。

嫂は無言の儘すつと立つた、室の出口で一才振り返つて芳江を手招きした。芳江もすぐ立つた。「おや今日はお菓子を頂かないで行くの」とお重が聞いた。芳江は其處に立つた儘、何うしたものだらうかと思案する様子に見えた。嫂は「おや芳江さん來ないの」と左も大人しやかに云つて廊下の外へ出た。今迄躊躇してゐた芳江は、嫂の姿が見えなくなるや否や、急に意を決したものの如く、ばた／＼と其後を追駈けた。

お重は彼女の後姿を左も忌々しさうに見送つた。父と母は厳格な顔をして己れの皿の中を見詰めてゐた。お重は兄を筋違ひに見た。けれども兄は遠くの方をぼんやり眺めてゐた。尤も彼の眉根には薄く八の字が描かれてゐた。

「兄さん、其ブツヂングを妾に頂戴。ね、好いでせう」とお重が兄に云つた。兄は無言の儘皿をお重の方に押遣つた。お重も無言の儘其を匙で突ついたが、自分から見ると、食べたくない物を業腹で食てゐるとしか思はれなかつた。

兄が席を立つて書齋に入つたのは夫からして少時後の事であつた。自分は耳を時て、彼の上靴が靜に階段を上つて行く音を聞いた。聽て上の方で書齋の戸がどたんとなら閉まる聲がして、後は靜になつた。

東京へ歸つてから自分は斯んな光景をしば／＼目撃した。父も其處には氣が付いてゐるらしいかつた。けれども一番心配さうなのは母であつた。彼女は嫂の態度を見破つて、かつ容赦の色を見せないお重を、一日も早く片付けて若い女同士の葛藤を避けたい氣色を色にも顔にも舉動にも現した。次には成るべく早く嫁を持たして、兄夫婦の間から自分といふ厄介ものを抜き去りたかつた。けれども複雑な世の中は、さう母の思ふ様に旨く回轉して呉れなかつた。自分は相變らず、のら／＼として居た。お重は益々嫂を敵の様に振舞つた。不思議に彼女は芳江を愛した。けれども夫は嫂の居ない留守に限られてゐた。芳江も嫂の居ない時ばかりお重に縫り付いた。兄の額には學者らしい皺が段々深く刻まれて來た。彼は益々書物と思案の中に沈んで行つた。

斯んな譯で、母の一番軽く見てゐたお貞さんの結婚が最初に極まつたのは、彼女の思はくとは丸で反對であつた。けれども早晚片付なければならぬお貞さんの運命に一段落を付けるのも、矢張り父や母の義務なんだから、彼等は岡田の好意を喜びこそすれ、決してそれを悪く思ふ筈はなかつた。彼女の結婚が家中の問題になつたのも語りはその爲であつた。お重は此問題に就いてよくお貞さんを捕まへて離さなかつた。お貞さんは又お重には赤い顔も見せず、色々の相談をしたり己れの將來をも語り合つたらしい。

或日自分が外から歸つて来て、風呂から上つた所へ、お重が、「兄さん佐野さんて一體どんな人なの」と例の前後を顧慮しない調子で聞いた。是は自分が大阪から歸つてから、もう二度目若しくは三度目の質問であつた。

「何だそんな藪から棒に。御前は一體輕卒で不可ないよ」

怒り易いお重は黙つて自分の顔を見てゐた。自分は胡坐をかきながら、三澤へ遣る端書を書いてゐたが、此様子を見て、一寸筆を留めた。

「お重又怒つたな。——佐野さんはね、此間云つた通り金縁眼鏡を掛けたお凸額さんだよ。夫

で好いちやないか。何遍聞いたつて同じ事だ」

「お凸額や眼鏡は寫眞で充分だわ。何も兄さんから聞かないだつて妾知つて、よ。眼があるぢやありませんか」

彼女はまた打ち解けさうな口の利き方をしなかつた。自分は靜かに端書と筆を机の上へ置いた。

「全體何を聞かうと云ふのだい」

「全體貴方は何を研究して入らしたんです。佐野さんに就いて」

お重といふ女は議論でも遣り出すと丸で自分を同輩の様に見る、癖だか、親しみだか、猛烈な氣性だか、稚氣だかがあつた。

「佐野さんに就いてつて……」と自分は聞いた。

「佐野さんの人と爲りに就いてです」

自分は固よりお重を馬鹿にしてゐたが、斯ういふ眞面目な質問になると、腹の中でどつしりした何物も貯へてゐなかつた。自分は済まして巻煙草を吹かし出した。お重は口惜しさうな顔をした。

「だつて餘まりぢやありませんか、お貞さんがあんなに心配してゐるのに」

「だつて岡田が儲だつて保証するんだから、好いちやないか」

「兄さんは岡田さんを何の位信用して居らつしやるんです。岡田さんは高が將棋の駒ぢやありませんか」

「顔は將棋の駒だつて何だつて……」

「顔ぢやありません。心が浮いてるんです」

自分は面倒と癩癩でお重を相手にするのが厭になつた。

「お重御前そんなにお貞さんの事を心配するより、自分が早く嫁にでも行く工夫をした方が餘つ程利口だよ。お父さんやお母さんは、お前が片付いて呉れる方をお貞さんの結婚より何の位助かると思つてゐるか解りやしない。お貞さんの事なんか何うでも宜いから、早く自分の身體の落ち付くやうにして、少し親孝行でも心掛けるが好い」

お重は果して泣き出した。自分はお重と喧嘩をするたびに向ふが泣いて呉れないと手應がない様で、何だか物足らなかつた。自分は平氣で眞を吹かした。

「ぢや兄さんも早くお嫁を貰つて獨立したら好いでせう。其方が妾が結婚するより幾ら親孝行になるか知れやしない。厭に嫂さんの肩ばかり持つて……」

「お前は嫂さんに抵抗し過ぎるよ」

「當前ですわ。大兄さんの妹ですもの」

九

自分は三澤へ端書を書いた後で、風呂から出立の頬に髮剃を中てようと思つてゐた。お重を相手に愚圖々々いふのが面倒になつたのを好い幸ひに、「お重氣の毒だが風呂場から熱い湯をうがひ茶碗に一杯持つて来て呉れないか」と頼んだ。お重は嗽茶碗どころの騒ぎではないらしかつた。夫より未十倍も嚴肅な人生問題を考へてゐるものゝ如く澄まして膨れてゐた。自分はお重に構はず、手を鳴らして下女から必要な湯を貰つた。それから机の上へ旅行用の鏡を立て、象牙の柄のついた髮剃を並べて、熱湯で濡らした頬をわざと滑稽に膨らませた。

自分が物新しさうにシェーヴィング、ブラツシを振り廻して、石鹼の泡で顔中を眞白にしてゐ

ると、先刻から傍に坐つて此様子を見てゐたお重は、ワツと云ふ悲劇的な聲を振り上げて泣き出した。自分はお重の性質として、早晩此處に来るだらうと思つて、暗に此悲鳴を豫期してゐたのである。そこで益頼べたに空気を一杯入れて、白い石鹼をすう／＼と髮剃の刃で心持宜さうに落し始めた。お重はそれを見て業腹だか何だか益願々しい聲を立てた。仕舞に「兄さん」と鏡どく自分を呼んだ。自分はお重を馬鹿にして居たには違ないが、此鋭い聲には少し驚かされた。

「何だ」

「何だつて、そんなに人を馬鹿にするんです。是でも私は貴方の妹です。嫂さんはいくら貴方が最良にしたつて、もと／＼他人ぢやありませんか」

自分は髮剃を下へ置いて、石鹼だらけの頬をお重の方に向けた。

「お重お前は逆せてゐるよ。お前が己の妹で、嫂さんが他家から嫁に来た女だ位は、お前に教はらないでも知てるさ」

「だから私に早く嫁に行けなんて餘計な事を云はないで、あなたこそ早く貴方の好きな嫂さん見た様な方をお貰ひなすつたら好いちやありませんか」

自分は平手でお重の頭を一つ張り付けて遣りたかつた。けれども家中騒ぎ廻られるのが怖いで、容易に手は出せなかつた。

「ぢやお前も早く兄さん見た様な學者を探して嫁に行つたら好からう」

お重は此言葉を聞くや否や、急に掴み懸りかねまじき凄じい勢ひを示した。さうして涙の途切れ目途切れ目に、彼女の結婚がお貞さんより後れたので、夫でこんなに愚弄されるのだと言明した末、自分を兄妹に同情のない野蠻人だと評した。自分も固より彼女の相手になり得る程の悪口家であつた。けれども最後にとう／＼根氣負がして黙つて仕舞つた。夫でも彼女は自分の傍を去らなかつた。さうして事實は無論の事、事實が生んだ飛んでもない想像迄縦横に喋舌り廻して已まなかつた。其中で彼女の最も得意とする主題は、何でも蚊でも自分と嫂とを結び付けて當て擦るといふ悪い意地であつた。自分は夫が何より厭であつた。自分は其時心の中で、何んなお多福でも構はないから、お重より早く結婚して、此夫婦關係が何うだの、男女の愛が何うだのと囁く女を、たつた一人後に取り残して遣りたい氣がした。夫から其方が又實際母の心配する通り、兄夫婦にも都合が好からうと眞面目に考へても見た。

自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の佛頂面を覚えてゐる。お重は又石鹼を溶いた金盥の中に顔を突込んだとしか思はれない自分の異な顔を、何うしても忘れ得ないさうである。

十

お重は明らかに嫂を嫌つてゐた。是は學究的に孤獨な兄に同情が強いためと誰にも肯づかれた。お重は明らかに嫂を嫌つてゐた。是は學究的に孤獨な兄に同情が強いためと誰にも肯づかれた。

「御母さんでも居なくなつたら何うなさるでせう。本當に御氣の毒ね」
凡てを隠す事を知らない彼女はかつて自分に斯う云つた。是は固より頼べたを眞白にして自分が彼女と喧嘩をしない遠い前の事であつた。自分は其の時彼女を相手にしなかつた。たゞ「兄さん見たいに譯の解つた人が、家庭間の關係で、御前杯に心配して貰ふ必要が出て来るものか、黙つて見て居らつしやい。御父さんも御母さんも付いてゐらつしやるんだから」と訓戒でも與へるやうに云つて聞かせた。

自分は其時分からお重と嫂とは火と水の様な個性の差異から、到底圓熟に同棲する事は困難だらうと既に觀察してゐた。

「御母さんお重も早く片付て仕舞はないと不可せんね」と自分は母に忠告がましい差出口を利いた事さへあつた。其折母は何故とも何とも聞き返さなかつたが、左も自分の意味を呑み込んでらしい眼付をして、「お前が云つて呉れないでも、御父さんだつて妾だつて心配し抜いてゐる所だよ。お重許ぢやないやね。御前のお嫁だつて、蔭ぢや何の位みんなに手敷を掛けて探して貰つてるか分りやしない。けれども是許は縁だからね……」と云つて自分の顔をしげじけと見た。自分は母の意味も何も解らずに、たゞ「はあ」と子供らしく引き下がつた。

お重は何でも直むきになる代りに裏表のない正直な美質を持つてゐたので、母よりは寧ろ父に愛されてゐた。兄には無論可愛がられてゐた。お貞さんの結婚談が出た時にも「先づお重から片付けるのが順だらう」と云ふのが父の意見であつた。兄も多少はそれに同意であつた。けれども折角名ざして申し込まれたお貞さんのために、澤山ない機會を逃すのはつまり兩損になるといふ母の意見が實際上に尤もなので、理に明るい兄はすぐ折れて仕舞つた。兄の見地に多少讓歩してゐる父も無事に納得した。

けれども黙つてゐたお重には、夫が甚だしい不愉快を與へたらしかつた。然し彼女が今度の結

婚問題に就て萬事快くお貞さんの相談に乗るのを見ても、彼女が機先を制せられたお貞さんに悪感情を抱いてゐないのは慥な事實であつた。

彼女はたゞ嫂の傍にゐるのが厭らしく見えた。いくら父母のゐる家であつても、いくら思ひ通りの子供らしさを精一杯に振り舞はす事が出来ても、此冷かな嫂からふんといふ顔付で眺められるのが何より辛かつたらしい。

斯ういふ氣分に神經を焦つかせてゐる時、彼女は不圖女の雜誌か何かを借りるために嫂の室へ這入つた。さうして其處で嫂がお貞さんの爲に縫つてゐた嫁入仕度の着物を見た。

「お重さんはお貞さんのよ。好いでせう。あなたも早く佐野さん見た様な方の所へ入らつしやいよ」と嫂は縫つてゐた着物を裏表引繰返して見せた。其態度がお重には見せびらかしの面當の様に聞えた。早く嫁に行く先を極て、斯んなものでも縫ふ覺悟でもしろといふ謎にも取れた。何時迄小姑の地位を利用して人を苛虐めるんだといふ諷刺とも解釋された。最後に佐野さんの様な人の所へ嫁に行くと云はれたのが尤も神經に障つた。

彼女は泣きながら父の室に訴へに行つた。父は面倒だと思つたのだらう、嫂には一言も聞糺さ

ずに、翌日お重を連れて三越へ出掛た。

十一

夫から二三日して、父の所へ二人程客が來た。父は生來交際好の上に、職業上の必要から、大分手廣く諸方へ出入してゐた。公の務を退いた今日でも其情性だか影響だかで、知合間の往來は絶える間もなかつた。尤も始終顔を出す人に、夫程有名な人も勢力家も見えなかつた。其時の客は貴族院の議員が一人と、ある會社の監査役が一人とであつた。

父は此二人と譚の方の仲善と見えて、彼等が來る度に譚をうたつて樂んだ。お重は父の命令で、少しの間鼓の稽古をした覺があるので、さう云ふ時には能く客の前へ呼び出されて鼓を打つた。自分は其高慢ちきな顔をまだ忘れずにゐる。

「お重お前の鼓は好いが、お前の顔は頗る不味いね。悪い事は云はないから、嫁に行つた當座は決して鼓を御打ちでないよ。いくら御亭主が譚氣狂でもあゝ澄まされた日にや、愛想を盡かさるゝ文だから」とわざ／＼罵しつた事がある。すると傍に聞いてゐたお貞さんが眼を丸くして、

「まあ非道い事を仰しやる事、随分ね」と云つたので、自分も少し言ひ過ぎたかと思つた。けれども烈しいお重は平生に似ず全く自分の言葉を氣に掛ないらしかつた。「兄さんあれでも顔の方はまだ上等なのよ。鼓と來たらそれこそ大變なの。妾の御客がある程厭な事はないわ」とわざ／＼自分に説明して聞かせた。お重の顔ばかりに注意してゐた自分は、彼女の鼓が夫程不味いとは夫迄氣が付かなかつた。

其日も客が來てから一時間半程すると豫定の通り謡が始まつた。自分はやがて又お重が呼び出される事と思つて、調戲半分茶の間の方に行つた。お重は一生懸命に會席膳を拭いてゐた。

「今日はボン／＼鳴らさないのか」と自分がことさらに聞くと、お重は妙にとぼけた顔をして、立つてゐる自分を見上げた。

「だつて今御膳が出るんですもの。忙しいからつて、斷つたのよ」

自分は臺所や茶の間のごた／＼した中で、巫山戯過ぎて母に叱られるのも面白くないと思つて、又室へ取つて返した。

夕食後一寸散歩に出て歸つて來ると、まだ自分の室に這入らない先から母に捉まつた。

「二郎丁度好い所へ歸つて來てお呉れた。奥へ行つて御父さんの謡を聞いて入らつしやい」
自分は父の謡を聞き慣れてゐるので、一番位聴くのは左程厭とも思はなかつた。

「何を遣るんです」と母に質問した。母は自分とは正反對に謡が又大嫌ひだつた。「何だか知らないがね。早く入らつしやいよ。皆さんが待つて居らつしやるんだから」と云つた。

自分は委細承知して奥へ通らうとした。すると暗い縁側の所にお重がそつと立つてゐた。自分は思はず「おい……」と大きな聲を出し掛けた。お重は急に手を振つて相圖のやうに自分の口を塞いで仕舞つた。

「何故そんな暗い所に一人で立つて居るんだい」と自分は彼女の耳へ口を付けて聞いた。彼女はすぐ「何故でも」と答へた。然し自分が其返事に満足しないで矢張り元の所に立つてゐるのを見て、「先刻から、何遍も出て來い／＼つて催促するのよ。だから御母さんに斷つて、少し加減が悪い事にしてあるのよ」

「何故又今日に限つて、そんなに遠慮するんだい」

「だつて妾鼓なんか打つのはもう厭になつちまつたんですもの、馬鹿らしくつて。それに是か

ら遣るのなんか六づかしくつて到底も出来ないんですもの」
「感心にお前見た様な女でも謙遜の道は少々心得てゐるから偉いね」と云ひ放つた儘、自分は奥へ通つた。

十二

奥には例の客が二人床の前に坐つてゐた。二人とも品の好い容貌の人で、其薄く禿げ掛つた頭が後に掛つてゐる探幽の三幅對と能く調和した。

彼等は二人とも袴の儘、羽織を脱ぎ放しにしてゐた。三人のうちで袴を着けてゐなかつたのは父許であつたが、其父でさへ羽織丈は遠慮してゐた。

自分は見知り合だから正面の客に挨拶かたぐ、
「何うか拜聴を……」と頭を下げた。客は一寸恐縮の體を装つて、「いや何うも……」と頭を掻く眞似をした。父は自分に又お重の事を尋ねたので、「先刻から少し頭痛がするさうで、御挨拶に出られないのを残念がつてゐました」と答へた。父は客の方を見ながら、「お重が心持が悪いなんて、丸で鬼の霍亂だな」と云つて、今度は自分に、

「先刻綱（母の名）の話では腹が痛い様に聞いたがさうぢやない頭痛なのかい」と聞き直した。自分は仕舞つたと思つたが「多分兩方なんぞでせう。胃腸の熱で頭が痛む事もあるやうだから。然し心配する程の病氣ぢやないやうです。ぢき癒るでせう」と答へた。客は蒼蠅い程お重に同情の言葉を注射した後、「ぢや残念だが始めませうか」と云ひ出した。

聽手には、自分より前に兄夫婦が横向になつて、行儀よく併んで坐つてゐたので、自分も鹿瓜らしく嫂の次に席を取つた。「何を遣るんです」と坐りながら聞いたら、斯道について何の素養も趣味もない嫂は、「何でも景清ださうです」と答へて、それ限何とも云はなかつた。

客のうちで精顔の恰腹の好い男が仕手をやる事になつて、其隣の貴族院議員が脇、父は主人役で「娘」と「男」を端役だと云ふ譯か二つ引き受けた。多少譚を聞分ける耳を持つてゐた自分は、最初から何んな景清が出来るかと心配した。兄は何を考へてゐるのか、甚だ要領を得ない顔をして、凋落しかつた前世紀の肉聲を夢のやうに聞いてゐた。嫂の鼓膜には肝腎の「松門」さへ人間としてよりも寧ろ獸類の吠として不快に響いたらしい。自分がかねてから此「景清」といふ譚に興味を持つてゐた。何だか勇ましいやうな慘ましいやうな一種の氣分が、盲目の景清の強い言

葉遣から、又遙々父を尋ねに日向迄下る娘の態度から、涙に化して自分の眼を輝かせた場合が、一二度あつた。

然し夫は歴乎とした謠手が本氣に各自の役を引き受けた場合で、今聞かせられてゐるやうな胡麻節を辿つて漸く出来る景清に對しては殆んど同情が起らなかつた。

やがて景清の戦物語も済んで一番の謠も滞りなく結末迄來た。自分は其成蹟を何と評して好いか解らないので、少し不安になつた。嫂は平生の寡言にも似ず「勇しいものですね」と云つた。自分も「左右ですね」と答へて置いた。すると多分一口も開くまいと思つた兄が、急に緒顔の客に向つて、「さすがに我も平家なり物語り申してとか、始めてとかいふ句がありました、あのさすがに我も平家なりといふ言葉が大變面白う御座いました」と云つた。

兄は元來正直な男で、かつ己れの教育上嘘を吐かないのを、品性の一部分と心得てゐる位だから、此批評に疑ふ餘地は少しもなかつた。けれども不幸にして彼の批評は謠の上手下手でなくつて、文章の巧拙に屬する話だから、相手には殆んど手應がなかつた。

斯う云ふ場合に馴た父は「いや彼處は非常に面白く拜聴した」と客の謠ひ振を一應賞めた後で、

「實はあれに就いて思ひ出したが、大變興味のある話がある。丁度あの文句を世話に崩して、景清を女にしたやうなものだから、謠よりは餘程艶である。しかも事實でね」と云ひ出した。

十三

父は交際家だけあつて、斯ういふ妙な話を澤山頭の中に仕舞つてゐた。さうして客でもあると、獻酬の間に能くそれを臨機應變に運用した。多年父の傍に寐起してゐる自分にも此女景清の逸話は始めてであつた。自分は思はず耳を傾けて父の顔を見た。

「つい此間の事で、又實際あつた事なんだから御話をするが、その發端はずつと古い。古いたつて何も源平時代から説き出すんぢやないから其處は御安心だが、何しろ今から二十五六年前、丁度私の腰辨時代とでも云ひませうかね……」

父は斯ういふ前置をして皆なを笑はせた後で本題に這入つた。それは彼の友達と云ふよりも寧ろずつと後輩に當る男の艶聞見たやうなものであつた。尤も彼は遠慮して名前を云はなかつた。自分は家へ出入る人の數々に就いて、大抵は名前も顔も覚えてゐたが、此逸話を有つた男丈はい

くら考へても何んな想像も浮かばなかつた。自分は心のうちで父は今表向多分此人と交際してゐるのではなからうと疑ぐつた。

何しろ事は其人の二十前後に起つたので、其時當人は高等學校へ這入り立てたとか、這入つてから二年目になるとか、父は甚だ曖昧な説明をしてゐたが、それは何方にしたつて、我々の氣に掛る所ではなかつた。

「其人は好い人間だ。好い人間にも色々あるが、まあ好い人間だ。今でもさうだから、廿歳位の時分は定めて可愛らしい坊ちやんだつたらう」

父は其男を斯荒つぽく叙述して置いて、其男と其家の召使とがある關係に陥つた因果を極單簡に物語つた。

「元來其奴はね本當の坊ちやんだから、情事なんて洒落た經驗は丸で夫迄知らなかつたのださうだ。當人も亦婦人に慕はれるなんて粹事は自分の様なものに到底有り得べからざる奇蹟と思つてゐたのださうだ。所が其奇蹟が突然天から降つて來たので大變驚ろいたんですね」

話し掛られた客は寧ろ眞面目な顔をして、「成程」と受けてゐたが、自分は可笑しくて堪らなかつた。

淋しさうな兄の頬にも笑の渦が漂よつた。

「しかも夫が男の方が消極的で、女の方が積極的なんだから愈妙ですよ。私が其奴に、其女が君に覺召があると悟つたのは何ういふ機だと思いたらね。眞面目な顔をして、色々云ひましたが、其うちで一番面白いと思つた所爲か、未だに覚えてゐるのは、そいつが瓦煎餅か何か食つてゐる所へ女が來て、私にも其御煎餅を頂戴なと云ふや否や、そいつの食ひ缺いた残りの半分を引つ手練つて口へ入れたといふ時なんです」

父の話方は無論滑稽を主にして、大事の眞面目な方を背景に引き込ませて仕舞ふので、聞いてゐる客を始め我々三人もたゞ笑ふ丈笑へばそれで後には何も残らないやうな氣がした。其上客は笑ふ術を何處かで練修して來たやうに旨く笑つた。一座のうちで比較的眞面目だつたのはたゞ兄一人であつた。

「兎に角其結果は何うになりました。目出たく結婚したんですか」と冗談とも思はれない調子で聞いてゐた。

「いや其處を是から話さうといふのだ。先刻も云つた通り『景清』の趣の出てくる所は是から

さ。今言つてゐる所はほんの冒頭だて」と父は得意らしく答へた。

十四

父の話す所によると、其男と其女の關係は、夏の夜の夢のやうに果敢ないものであつた。然し契りを結んだ時、男は女を未來の細君にすると言明したさうである。尤も是は女から申し出した條件でも何でもなかつたので、唯男の口から勢ひに驅られて、おのづと進しつた、誠ではあるが實行しにくい感情的の言葉に過ぎなかつたと父は態々説明した。

「と云ふのはね、兩方共おない年でせう。然も一方は親の脛を噛つてゐる前途遼遠の書生だし、一方は下女奉公でもして暮さうといふ貧しい召使ひなんだから、どんな堅い約束をしたつて、其約束の實行が出来る長い年月の間には、何んな故障が起らないとも限らない。で、女が聞いたさうですよ。貴方が學校を卒業なさると、二十五六に御成んなさる。すると私も同じ位に老て仕舞ふ。夫でも御承知ですかつてね」

父は其處へ來て、急に話を途切らして、膝の下にあつた銀烟管へ煙草を詰めた。彼が薄青い烟

を一時に鼻の穴から出した時、自分は何ともしさの餘り「其人は何て答へました」と聞いた。

父は吸殻を手で叩きながら「二郎が屹度何とか聞くだらうと思つた。二郎面白だらう。世間には随分色々な人があるもんだよ」と云つて自分を見た。自分は只「へえ」と答へた。

「實はわしも聞いて見た、其男に。君何て答へたかつて。すると坊ちゃんだね、斯う云ふんだ。僕は自分の年も先の年も知つてゐた。けれども僕が卒業したら女が幾何になるか、其處迄は考へて居られなかつた、況や僕が五十になれば先も五十になるなんて遠い未來は全く頭の中に浮かんで來なかつたつて」

「無邪氣なものですな」と兄は寧ろ贊嘆の口振を見せた。今迄黙つてゐた客が急に兄に賛成して、「全くの所無邪氣だ」とか「成程若いものになると如何にも一圖ですな」とか云つた。

「所が一週間経つか経たないうちに其奴が後悔し始めてね、なに女は平氣なんだが、其奴が自分で恐縮して仕舞つたのさ。坊ちゃん丈に意氣地のない事つたら。然し正直ものだからとうとう女に對してまともに結婚破約を申し込んで、しかも極りの悪さうな顔をして、御免よとか何とか云つて謝罪まつたんだつてね。そこへ行くとおない年だつて先は女だもの、『御免よ』なんて子供

らしい言葉を聞けば可愛いくもなるだらうが、又馬鹿々々しくもなるだらうよ」

父は大きな聲を出して笑つた。御客も其反響の如くに笑つた。兄だけは可笑しいのだから、苦々しいのだから變な顔をしてゐた。彼の心には凡て斯う云ふ物語が嚴肅な人生問題として映るらしかつた。彼の人生觀から云つたら父の話し振さへ或は輕薄に響いたかもしれない。

父の語る所を聞くと、其女は少時くしてすぐ暇を貰つて其處を出てしまつた限再び顔を見せなかつたけれども、其男はそれ以來二三ヶ月の間何か考へ込んだなり魂が一つ所にこびり付いた様に動かなかつたさうである。一遍其女が近所へ來たと云つて寄つた時などでも、外の人の手前だか何だか殆んど一口も物を云はなかつた。しかも其時は丁度午飯の時、其女が昔の通り御給仕をしたのだが、男は丸で初対面の者にでも逢つた様に口敷を利かなかつた。

女もそれ以來決して男の家の敷居を跨がなかつた。男は丸で其女の存在を忘れて仕舞つたやうに、學校を出て家庭を作つて、二十年といふつい近頃迄女とは何等の交渉もなく打過た。

十五

「それ丈で済めばまあ唯の逸話さ。けれども運命といふものは恐ろしいもので……」と父が又語り續けた。

自分は父が何を云ひ出すかと思つて、彼の顔から自分の眼を離し得なかつた。父の物語りの概要を摘んで見ると、ざつと斯うであつた。

其男が其女を丸で忘れた二十年の後、二人が偶然運命の手引で不意に會つた。會つたのは東京の真中であつた。しかも有樂座で名人會とか美音會とかのあつた薄ら寒い宵の事ださうである。其時男は細君と女の子を連れて、土間の何列目か知らないが、かねて注文して置いた席に並んでゐた。すると彼等が入場して五分経つか立たないのに、今云つた女が他の若い女に手を引かれながら這入つて來た。彼等も電話か何かで席を豫約して置いたと見えて、男の隣にあるエンゲージドと紙札を張つた所へ案内された儘大人なしく腰を掛けた。二人は斯ういふ奇妙な所で、奇妙に隣合はせに坐つた。猶更奇妙に思はれたのは、女の方が昔と違つた表情のない盲目になつてしまつて、外に何んな人が居るか全く知らずに、たゞ舞臺から出る音楽の響にばかり耳を傾けてゐるといふ、男に取つては丸で想像すらし得なかつた事實であつた。

人行

男は始め自分の傍に坐る女の顔を見て過去二十年の記憶を逆さに振られた如く驚ろいた。次に黒い眸を凝と据ゑて自分を見た昔の面影が、何時の間にか消えてゐた女の面影に氣が付いて、又愕然として心細い感に打たれた。

十時過迄一つ席に殆んど身動きもせず坐つてゐた男は、舞臺で何を遣らうが、殆ど耳へは這入らなかつた。たゞ女に別れてから今日に至る運命の暗い糸を、色々に想像する丈であつた。女は又わが隣にゐる昔の人を、見もせず、知りもせず、全く意識に上す暇もなく、たゞ自然に凋落しかつた過去の音楽に、やつとの思ひで若い昔を偲ぶ氣色を濃い眉の間に示すに過ぎなかつた。二人は突然として邂逅し、突然として別れた。男は別れた後も、風女の事を思ひ出した。ことに彼女の盲目が氣に掛つた。それで何うかして女の居る所を突き留めようとした。

「馬鹿正直な丈に熱心な男だもんだから、とうとう成功した。其筋道も聞くには聞いたが、くだくしくつて忘れちまつたよ。何でも彼が其次に有樂座へ行つた時、案内者を捕まへて、何とか彼んとかした上に、大分込み入つた手数を掛けたんださうだ」

「何處に居たんです其女は」と自分は是非確めたくなつた。

「夫は秘密だ。名前や所は一切云はれない事になつてゐる。約束だからね。それは好いが、其奴が私に其盲目の女のゐる所を訪問して呉れと頼むんだね。何といふ主意か解らないが、詰りは無沙汰見舞のやうなものさ。當人に云はせると、學問した丈に、鹿瓜らしい理窟を何が條も並べるけれども。つまり過去と現在の中間を結び付けて安心したいのさ。夫に何うして盲目になつたか、それが大變當人の神經を悩ましてゐたと見えてね。と云つて今更其女と新しい關係を付ける氣はなし、且は女房子の手前もあるから、自分はわざ／＼出掛け度ないのさ。のみならず彼が又昔其女と別れる時餘計な事を饒舌つてゐるんです。僕は少し學問する積だから三五六にならなければ妻帯しない。で已を得ず此間の約束は取消にして貰ふんだつてね。所が奴學校を出るとすぐ結婚してゐるんだから良心の方から云つちやあまり心持は能くないのだらう。其でとう／＼私が行く事になつた」

「まあ馬鹿らしい」と嫂が云つた。

人行
「馬鹿らしかつたけれどもとう／＼行つたよ」と父が答へた。客も自分も興味ありげに笑ひ出した。

父には人に見られない一種剽軽な所があつた。或者は直な方だとも云ひ、或者は氣の置けない男だとも評した。

「親爺は全くあれで自分の地位を拵へ上げたんだね。實際の所それが世の中なんだらう。本式に學問をしたり眞面目に考へを纏めたりしたつて、社會ではちつとも重寶がらない。唯輕蔑される丈だ」

兄は斯んな愚痴とも厭味とも、又諷刺とも事實とも、片の付かない感慨を、蔭ながら會て自分に洩らした事があつた。自分は性質から云ふと兄よりも寧ろ父に似て居た。其上年が若いので、彼のいふ意味が今程明瞭に解らなかつた。

何しろ父が其男に頼まれて、快よく訪問を引受けたのも、多分持つて生れた物數奇から來たのだらうと自分は解釋してゐる。

父はやがて其盲目の家を音信た。行く時に男は土産のしるしだと云つて、百圓札を一枚紙に包

んで水引を掛けたのに、大きな菓子折を一つ添へて父に渡した。父はそれを受取つて、俵を其女の家に驅つた。

女の家は狭かつたけれども小綺麗に且つ住心地よく出來てゐた。縁の隅に丸く彫り抜いた御影の手水鉢が据ゑてあつて、手拭掛には小新らしい三越の手拭さへ拵めてゐた。家内も小人數らしく寂然として音もしなかつた。

父は此日當りの好い然し茶がかつた小座敷で、初めて其盲人に會つた時、一寸何と云て好いか分らなかつたさうである。

「己の様なものが言句に窮するなんて馬鹿げた恥を話すやうだが實際困つたね。何しろ相手が盲目なんだからね」

父はわざと斯う云つて皆なを興がらせた。

彼は其場でとう／＼男の名を打ち明けて、例の土産ものを取り出しつゝ女の前に置いた。女は眼が悪いので菓子折を撫でたり擦つたりして見た上、「何うも御親切に……」と恭しく禮を述べたが、其上にある紙包を手で取上げるや否や、少し變な顔をして「是は？」と念を押す様に聞いた。

父は例の氣性だから、呵々と笑ひながら、「それも御土産の一部分です、何うか一緒に受取つて置いて下さい」と云つた。すると女が水引の結び目を持つた儘、「もしや金子では御座いませんか」と問ひ返した。

「いえ何甚だ輕少で、——然し〇〇さんの寸志ですから何うぞ御納め下さい」

父が斯う云つた時、女はばかりと此紙包を疊の上に落した。さうして閉ぢた眸を屹と父の方へ向けて、「私は今寡婦で御座いますが、此間迄歷乎とした夫が御座いました。子供は今でも丈夫で御座います。たとひ何んな關係があつたにせよ、他人さまから金子を頂いては、樂に今日を過すやうにして置いて呉れた夫の位牌に對して濟ませんから御返し致します」と判切云つて涙を落した。

「是には實に閉口したね」と父は皆なの顔を一顧見渡したが、其時に限つて、誰も笑ふものはなかつた。自分も腹の中で、いかな父でも流石に弱つたらうと思つた。

「其時わしは閉口しながらも、あゝ景清を女にしたら矢つ張り斯んなものぢやなからうかと思つてね。本當は感心しましたよ。何ういふ譯で景清を思ひ出したかと思ふとね。たゞ雙方とも盲

目だからと云ふ許ぢやない。何うも其女の態度がね……」

父は考へてゐた。父の筋向ふに坐つてゐた緒顔の客が、「全く氣込が似てゐるからですね」と左も六づかしい謎でも解やうに云つた。

「全く氣込です」と父はすぐ承服した。自分は是で父の話が結末に來たのかと思つて、「成程夫は面白い御話です」と全體を批評する様な調子で云つた。すると父は「まだ後があるんだ。後の方がまだ面白い。ことに二郎の様な若い者が聞くと」と付け加へた。

十七

父は意外な女の見識に、話の腰を折られて、已を得ず席を立たうとした。すると女は始めて女らしい表情を面に湛へて、縋りつくやうに父を留めた。さうして何時何日何處で〇〇が自分を見たのかと聞いた。父は例の有樂座の事を包み藏さず盲人に話して聞かせた。

「丁度あなたの隣に腰を掛けてゐたんださうです。あなたの方では丸で知らなかつたでせうが、〇〇は最初から氣が付いてゐたのです。然し細君や娘の手前、口を利く事も出來惡かつたんでせ

う。夫なり宅へ歸つたと云つてゐました」

父は其時始めて盲目の涙腺から流れ出る涙を見た。

「失禮ながら眼を御煩ひになつたのは餘程以前の事なんですか」と聞いた。

「斯ういふ不自由な身體になつてから、もう六年程にもなりませうか。夫が亡くなつて一年経つか経たないうちの事で御座います。生れ付の盲目と違つて、當座は大變不自由を致しました」父は慰め様もなかつた。彼女の所謂夫といふのは何でも、請負師か何かで、存生中に大分金を使つた代りに、相應の資産も残して行つたらしかつた。彼女は其御蔭で眼を煩つた今日でも、立派に獨立して暮して行けるのだらうと父は説明した。

彼女は人に誇つて然るべき倅と娘を持つてゐた。其倅には高等の教育こそ施してないやうだつたけれども、何でも銀座邊のある商會へ這入つて獨立し得る丈の収入を得てゐるらしかつた。娘の方は下町風の育て方で、唄や三味線の稽古を専一と心得させるやうに見えた。凡てを通じて〇〇とは遠い過去に焼き付けられた一點の記憶以外に何もものをも共通に有つてゐるとは思へなかつた。

父が有樂座の話をした時に、女は兩方の眼をうるませて、「本當に盲目程氣の毒なものは御座いませぬね」と云つたのが、痛く父の胸には應へたさうである。

「〇〇さんは今何をして御出で御座いますか」と女は又空中に何物をか想像するが如き眼遣をして父に聞いた。父は残りなく〇〇が學校を出てから以後の経歴を話して聞かせた後、「今ぢや中々偉くなつてゐますよ。私見たいな老朽とは違つてね」と答へた。

女は父の返事には耳も借さずに、「定めてお立派な奥さんをお貰ひになつたで御座いませうね」と大人しやかに聞いた。

「え、最う子供が四人あります」

「一番お上のは幾何にお成りで」

「左様さもう十二三にも成りませうか。可愛らしい女の子ですよ」

女は黙つたなり頻りに指を折つて何か勘定し始めた。其指を眺めてゐた父は、急に恐ろしくなつた。さうして腹の中で餘計な事を云つて、もう取り返しが付かないと思つた。

女は少後間を置いて、たゞ「結構で御座います」と一口云つて後は淋しく笑つた。然し其笑ひ

方が、父には泣かれるよりも怒られるよりも變な感じを興へたと云つた。

父は〇〇の宿所を明らかに告げて、「ちと暇な時に遊びがてら御嬢さんでも連れて行つて御覽なさい。一寸好い家ですよ。〇〇も夜なら大抵御目にかゝれると云つておましたから」と云つた。すると女は忽ち眉を曇らして、「そんな立派な御屋敷へ我々風情が到底も御出入は出来ませんが」と云つた儘しばらく考へてゐたが、忽ち抑へ切れないやうに眞剣な聲を出して、「御出入は致しません。先様で来いと仰しやつても此方で御遠慮しなければなりません。然したゞ一つ一生の御願に伺つて置きたい事が御座います。斯うして御目に掛れるのも最う二度とない御縁だらうと思ひますから、何うぞ夫丈聞かして頂いた上心持よく御別れが致したいと存じます」と云つた。

十八

父は年の割に度胸の悪い男なので、女から斯う云はれた時は、何んな凄まじい文句を並べられるかと思つて、少からず心配したさうである。

「幸ひ相手の眼が見えないので、自分の周章さ加減を覺られずに済んだ」と彼は殊更に付け加

へた。其時女は斯う云つたさうである。

「私は御覽の通り眼を煩つて以來、色といふ色は皆目見ません。世の中で一番明るい御天道様さへもう拜む事は出来なくなりました。一寸表へ出るにも娘の厄介にならなければ用事は足せません。いくら年を取ても一人で不自由なく歩く事の出来る人間が幾人あるかと思ふと、何の因果で斯んな業病に罹つたのかと、つくづく辛い心持が致します。けれども此眼は潰れても左程苦しいとは存じません。たゞ兩方の眼が満足に開いて居る癖に、他の料簡方が解らないのが一番苦しい御座います」

父は「成程」と答へた。「御尤も」とも答へた。けれども女のいふ意味は一向通じなかつた。彼にはさういふ経験が丸でなかつたと彼は明言した。女は曖昧な父の言葉を聞いて、「ねえ貴方左右では御座いませんか」と念を押した。

「そりや其んな場合は無論有るでせう」と父が云つた。

「有るでせうでは、貴方もわざ／＼〇〇さんに御頼まれになつて、此處迄入らしつて下すつた甲斐がないでは御座いませんか」と女が云つた。父は益窮した。

自分は此の時偶然兄の顔を見た。さうして彼の神経的に緊張した眼の色と、少し冷笑を洩らし
てゐるやうな嫂の唇との對照を比較して、突然彼等の間に此間から蟠まつてゐる妙な關係に氣
が付いた。その蟠まりの中に、自分も引きすり込まれてゐるといふ、一種厭ふべき空氣の匂ひも
容赦なく自分の鼻を衝いた。自分は父が何故座興とは云ひながら、擇りに擇つて、斯んな話をす
るのだらうと、漸く不安の念が起つた。けれども萬事は既に遅かつた。父は知らぬ顔をして勝手
次第に話頭を進めて行つた。

「おれは夫でも解らないから、淡泊に其女に聞いて見た。折角○○に頼まれてわざ／＼此處迄
来て、肝心な要領を伺はないで引き取つては、あなたに對しては勿論○○から云つても定めし不
本意だらうから、何うかあなたの胸を存分私に打明けて下さいませんか。夫でない私も歸つ
てから○○に話がし悪いからつて」

其時女は始めて思ひ切つた決斷の色を面に見せて、「では申し上げます。貴方も○○さんの代理
にわざ／＼尋ねて来て下さる位で居らつしやるから、定めし關係の深い御方には違ひ御座いませ
んでせう」といふ冒頭を置いて、彼女の腹を父に打明けた。

○○が結婚の約束をしながら一週間経つか経たないのに、それを取り消す氣になつたのは、周
圍の事情から壓迫を受けて已を得ず斷つたのか、或は別に何か氣に入らない所でも出来て、其氣
に入らない所を、結婚の約束後急に見付けたため斷つたのか、其有體の本當が聞きたいのだと云
ふのが、女の何より知りたい所であつた。

女は二十年以上○○の胸の底に隠れてゐる此秘密を掘り出し度つて堪らなかつたのである。彼
女には天下の人が悉く持つてゐる二つの眼を失つて、殆んど他から片輪扱ひにされるよりも、一
且契つた人の心を確實に手に握れない方が遙かに苦痛なのであつた。

「御父さんはどういふ返事をして御遣りでしたか」と其時兄が突然聞いた。其顔には普通の興
味といふよりも、異狀の同情が籠つてゐるらしかつた。

「己も仕方がないから、夫や大丈夫、僕が受け合ふ。本人に輕薄な所は些ともないと答へた」
と父は好い加減な答へを却て自慢らしく兄に話した。

「女はそんな事で満足したんですか」と兄が聞いた。自分から見ると、兄の此間には冒す可らざる強味が籠つてゐた。夫が一種の念力のやうに自分には響いた。

父は氣が付いたのか、氣が付かなかつたのか、平氣で斯んな答をした。

「始は満足しかねた様子だつた。勿論此方の云ふ事がそら夫程根のある譯でもないんだからね。本當を云へば、先刻お前達に話した通り男の方は丸で坊ちゃんなんで、前後の分別も何もないんだから、眞面目な挨拶はとても出来ないのさ。けれども其奴が一旦女と關係した後で止せば好かつたと後悔したのは、何うも事實に違なからうよ」

兄は苦々しい顔をして父を見てゐた。父は何といふ意味か、兩手で長い頬を二度程撫でた。

「此席で斯んな御話をするのは少し憚りがあるが」と兄が云つた。自分は何んな議論が彼の口から出るか、次第によつては途中から其鋒先を、一座の迷惑にならない方角へ向易へようと思つて聞いてゐた。すると彼は斯う續けた。

「男は情慾を満足させる迄は、女よりも烈しい愛を相手に捧げるが、一旦事が成就すると其愛が段々下り坂になるに反して、女の方は關係が付くと夫から其男を益慕ふ様になる。是が進化

論から見ても、世間の事實から見ても、實際ぢやなからうかと思ふのです。夫で其男も此原則に支配されて後から女に氣がなくなつた結果結婚を斷つたんぢやないでせうか」

「妙な御話ね。妾女だからそんな六づかしい理窟は知らないけれども、始めて伺つたわ。随分面白い事があるのね」

嫂が斯う云つた時、自分は客に見せたくないやうな厭な表情を兄の顔に見出したので、すぐそれを胡麻化するため何か云つて見ようとした。すると父が自分より早く口を開いた。

「そりや學理から云へば色々解釋が付くかも知れないけれども、まあ何だね、實際は其女が厭になつたに相違ないとした所で、當人面喰らつたんだね、まづ第一に。其上小膽で無分別で正直と來てゐるから、それ程厭でなくつても斷りかねないのさ」

父はさう云つたなり洒然としてゐた。

床の前に謠本を置いてゐた一人の客が、其時父の方を向いて斯う云つた。

「然し女といふものは兎に角執念深いものです。二十何年も其事を胸の中に疊込んで置くんですからね。全くの所貴方は好い功德を爲すつた。さう云つて安心させて遣れば其眼の見えない

女のために何の位嬉しかつたか解りやしません」

「其處が凡ての懸合事の氣轉ですな。萬事左右遣れば雙方の爲に何の位都合が好いか知れんです」

他の客が續いて斯う云つた時、父は「いや何うも」と頭を掻いて「實は今云つた通り最初はね、その位な事ぢや中々疑りが解けないんで、私も少々弱らせられました。夫を色々に光澤を付けたり、出鱈目を拵へたりして、とう／＼女を納得させちまつたんですが、随分骨が折れましたよ」と少し得意氣であつた。

やがて客は謠本を風呂敷に包んで露に濡れた門を潜つて出た。皆な後で世間話をしてゐるなかに、兄丈は六づかしい顔をして一人書齋に入つた。自分は例の如く冷かに重い音をさせる上草履の音を一つ宛聞いて、最後にどんと締まる扉の響に耳を傾けた。

二十

二三週間はそれなり過ぎた。そのうち秋が段々深くなつた。葉鶏頭の濃い色が庭を覗くたびに

自分の眼に映つた。

兄は傳で學校へ出た。學校から歸ると大抵は書齋へ這入つて何かしてゐた。家族のもので滅多に顔を合はす機會はなかつた。用があると此方から二階に上つて、わざ／＼扉を開けるのが常になつてゐた。兄はいつでも大きな書物の上に眼を向けてゐた。それでなければ何か萬年筆で細かい字を書いてゐた。一番我々の眼に付いたのは、彼の茫然として洋机の上に頬杖を突いて居る時であつた。

彼は一心に何か考へてゐるらしかつた。彼は學者で且思索家であるから、黙つて考へるのは當然の事のやうにも思はれたが、扉を開けて其様子を見た者は、如何にも寒い氣がすると云つて、用を済すのを待ち兼ねて外へ出た。最も關係の深い母ですら、書齋へ行くのを餘り難有いとは思つてゐなかつたらしい。

「二郎、學者つてものは皆なあんな偏屈なものかね」

此問を聞いた時、自分は學者でないのを不思議な幸福の様に感じた。それで只えへ々と笑つてゐた。すると母は眞面目な顔をして、「二郎、御前が居なくなると、宅は淋しい上にも淋しくなる

が、早く好い御嫁さんでも貰つて別に成る工面を御爲よ」と云つた。自分には母の言葉の裏に、自分さへ新しい家庭を作つて獨立すれば、兄の機嫌が少しは能くなるだらうといふ意味が明らかに讀まれた。自分は今でも兄がそんな妙な事を考へてゐるのだらうかと疑つても見た。然し自分も既に一家を成して然るべき年輩だし、又小さい一軒の竈位は、現在の収入で何うか斯うか維持して行かれる地位なのだから、かねてから、左右いふ考へはちら／＼と無頓着な自分の頭をさへ横切つたのである。

自分は母に對して、「え、外へ出る事なんか譯はありません。明日からでも出ると仰しやれば出ます。然し嫁の方はさうちんころの様に、何でも構はないから、只路に落ちてさへゐれば拾つて來るといふやうな遣口ちや僕には不向ですから」と云つた。其時母は「そりや無論……」と答へようとするのを自分はわざと遮つた。

「御母さんの前ですが、兄さんと姉さんの間ですね。あれには色々複雑な事情もあり、又僕が固から少し姉さんと知り合つたので、御母さんにも御心配を懸けて濟まない様ですけれども、大根をいふとね。兄さんが學問以外の事に時間を費すのが惜いんで、萬事人任せにして置いて、

何事にも手を出さずに華族然と澄ましてゐたのが悪いんですよ。いくら研究の時間が大切だつて、学校の講義が大事だつて、一生同じ所で同じ生活をしなくつちやならない吾が妻ぢやありませんか。兄さんに云はしたら又學者相應の意見もありませうけれども學者以下の我々には到底もあんな眞似は出来ませんからね」

自分が斯んな下らない理窟を云ひ募つてゐるうちに、母の眼には何時の間にか涙らしい光の影が、段々溜つて來たので、自分は驚いて已めて仕舞つた。

自分は面の皮が厚いといふのか、遠慮がなさ過ぎると云ふのか、それ程宅のものが氣兼ねをして、云はゞ敬して遠ざけてゐるやうな兄の書齋の扉を他よりも屢叩いて話をした。中へ這入つた當分の感じは、さすがの自分にも少し應へた。けれども十分位経つと彼は丸で別人のやうに快活になつた。自分は苦い兄の心機を斯う一轉させる自分の手際に重きを置いて、恰も己れの虚榮心を満足させる爲の手段らしい態度をもつて、わざ／＼彼の書齋へ出入した事さへあつた。自白すると、突然兄から捕まつて危く死地に陥れられさうになつたのも、實は斯ういふ得意の瞬間であつた。

其折自分は何を話してゐたか今儘に覚えてゐない。何でも兄から玉突の歴史を聞いた上、ルイ十四世頃の銅版の玉突臺をわざ／＼見せられた様な気がする。

兄の室へ這入つては、斯んな問題を種に、彼の新しく得た知識を、はい／＼聞いてゐるのが一番安全であつた。尤も自分も御饒舌だから、兄と違つた方面で、ルチサンスとかゴシツクとかいふ言葉を心得顔に振り廻す事も多かつた。然し大抵は世間離れのした斯う云ふ談話文で書齋を出るのが例であつたが、其折は何かの拍子で兄の得意とする遺傳とか進化とかに就いての學説が、銅版の後で出て來た。自分は多分云ふ事がないため、黙つて聞いてゐたものと見える。其時兄が「二郎お前はお父さんの子だね」と突然云つた。自分はそれが何うしたと云はぬ許の顔をして、「左右です」と答へた。

「おれはお前だから話すが、實はうちのお父さんには、一種妙におつちよこちよいの所があるぢやないか」

兄から父を評すれば正に左右であるといふ事を自分は以前から呑込んでゐた。けれども兄に對して此場合何と挨拶すべきものか自分には解らなかつた。

「夫や貴方のいふ遺傳とか性質とかいふものぢや恐らくないでせう。今の日本の社會があれでなくつちや、通させないから、已を得ないのぢやないですか。世の中にやお父さん所かまだ／＼堪らないおつちよこちよがありますよ。兄さんは書齋と學校で高尚に日を暮してゐるから解らないかも知れないけれども」

「夫や己も知つてる。お前の云ふ通りだ。今の日本の社會は——ことによつたら西洋も左右かも知れないけれども——皆な上滑りの御上手もの文が存在し得るやうに出來上がつてゐるんだから仕方がない」

兄は斯う云つて少時沈黙の裡に頭を埋めてゐた。夫から怠さうな眼を上げた。

「然し二郎、お父さんののは、お氣の毒だけれども、持つて生れた性質なんだよ。何んな社會に生きてゐても、あゝより外に存在の仕方はお父さんに取つて六づかしいんだね」

自分は此學問をして、高尚になり、かつ迂闊になり過ぎた兄が、家中から變人扱ひにされるの

みならず、親身の親からさへも、日に日に離れて行くのを眼前に見て、思はず顔を下げて自分の膝頭を見詰めた。

「二郎お前も矢つ張りお父さん流だよ。少しも摺實の氣質がない」と兄が云つた。

自分は痾癩の不意に起る野蠻な氣質を兄と同様に持つてゐたが、此場合兄の言葉を聞いたとき、毫も憤怒の念が萌さなかつた。

「そりや非道い。僕は兎に角、お父さん迄世間の輕薄ものと一所に見做すのは。兄さんは獨りぼつちで書齋にばかり籠つてゐるから、夫でさういふ僻んだ觀察ばかりなさるんですよ」

「ちや例を擧げて見せようか」

兄の眼は急に光を放つた。自分は思はず口を閉ぢた。

「此間諺の客のあつた時に、盲女の話をお父さんがしたらう。あのときお父さんは何とかいふ人を立派に代表して行きながら、其女が二十何年も解らずに煩悶してゐた事を、たゞ一口に胡魔化してゐる。己はあの時、其女のために腹の中で泣いた。女は知らない女だから夫程同情は起らなかつたけれども、實をいふとお父さんの輕薄なのに泣いたのだ。本當に情ないと思つた。……」

「さう女見たやうに解釋すれば、何だつて輕薄に見えるでせうけれども……」

「そんな事を云ふ所が、つまりお父さんの悪い所を受け繼いでゐる證據になる文さ。己は直の事をお前に頼んで、其報告を何時迄も待つてゐた。所がお前は何時迄も言葉を左右に託して、空惚けてゐる……」

二十二

「空惚けてると云はれちや些と可哀さうですね。話す機會もなし、又話す必要がないんですもの」

「機會は毎日ある。必要はお前になくても己の方にあるから、わざ／＼頼んだのだ」

自分は其時ぐつと行き詰つた。實はあの事件以後、嫂について兄の前へ一人出て、眞面目に彼女を論ずるのが如何にも苦痛だつたのである。自分は話頭を無理に横へ向けようとした。

「兄さんは既にお父さんを信用なさらず。僕も其お父さんの子だといふ譯で、信用なさらない様だが、和歌の浦で仰しやつた事とは丸で矛盾してゐますね」

人行

「何が」と兄は少し怒氣を帯びて反問した。

「何がつて、あの時、貴方は仰しやつたちやありませんか。お前は正直なお父さんの血を受け
てゐるから、信用が出来る、だから斯んな事を打ち明けて頼むんだつて」

自分が斯う云ふと、今度は兄の方がぐつと行き詰まつた様な形迹を見せた。自分は此處だと思
つて、わざと普通以上の力を、言葉の裡へ籠めながら斯う云つた。

「そりや御約束した事ですから、嫂さんに就いて、あの時の一部始終を今此處で御話しても一
向差支ありません。固より僕はあまり下らない事だから、機會が来なければ口を開く考へもなし、
又口を開いたつて、只一言で済んで仕舞ふ事だから、兄さんが氣に掛けない以上、何も云ふ必要
を認めないので、今日迄控へてゐたんですから。——然し是非何とか報告をしると、官命で出
張した屬官流に逼られれば、仕方がない。今即刻でも僕の見た通りをお話します。けれども豫め
断つて置きますが、僕の報告から、貴方の豫期してゐるやうな變な幻は決して出て来ませんよ。
元々貴方の頭にある幻なので、客觀的には何處にも存在してゐないんだから」

兄は自分の言葉を聞いた時、平生と違つて、顔の筋肉を殆ど一つも動かさなかつた。唯洋卓の

前に眩を突いたなり、凝としてゐた。眼さへ伏せてゐたから、自分には彼の表情が些とも解らな
かつた。兄は理に明らかな様で、又其理にころりと抛げられる癖があつた。自分はたゞ彼の顔色
が少し蒼くなつたのを見て、是は必竟彼が自分の強い言語に叩かれたのだと判断した。

自分は其所にあつた巻苧入から烟草を一本取り出して燐寸の火を擦つた。さうして自分の鼻か
ら出る青い烟と兄の顔とを等分に眺めてゐた。

「二郎」と兄が漸く云つた。其聲には力も張もなかつた。

「何です」と自分は答へた。自分の聲は寧ろ驕つてゐた。

「もう己はお前に直の事に就いて何も聞かないよ」

「左右ですか。其方が兄さんの爲にも嫂さんの爲にも、また御父さんの爲にも好いでせう。善
良な夫になつて御上げなさい。さうすれば嫂さんだつて善良な夫人でさあ」と自分は嫂を辯護す
るやうに、又兄を戒めるやうに云つた。

「此馬鹿野郎」と兄は突然大きな聲を出した。其聲は恐らく下迄聞えたらうが、すぐ傍に坐つ
てゐる自分には、殆ど豫想外の驚きを心臓に打ち込んだ。

「お前はお父さんの子だけあつて、世渡りは己より旨いかも知れないが、士人の交はりには出来ない男だ。なんで今になつて直の事をお前の口などから聞かうとするものか。輕薄兒め」

自分の腰は思はず坐つてゐる椅子からふらりと離れた。自分は其儘扉の方へ歩いて行つた。

「お父さんのやうな虚偽な自分を聞いた後、何で貴様の報告なんか宛にするものか」

自分は斯ういふ烈しい言葉を背中に受けつゝ、扉を閉めて、暗い階段の上に出た。

二十三

自分は夫から約一週間程といふもの、夕食以外には兄と顔を合した事がなかつた。平生食卓を賑やかにする義務を有つてゐると迄、皆なから思はれてゐた自分が、急に黙つて仕舞つたので、テーブルは變に淋しくなつた。何處かで鳴く蟬の音さへ、併んでゐる人の耳に、肌寒の象徴の如く響いた。

斯ういふ寂寞たる團欒の中に、お貞さんは日毎に近づいて来る我結婚の日程を考へるより外に、何の天地もない如くに、盆を膝の上へ載せて御給仕をしてゐた。陽氣な父は周圍に頓着なく、己

れに特有な勝手な話ばかりした。然し其反響は何時もの様に何處からも起らなかつた。父の方でも丸でそれを豫期する氣色は見えなかつた。

時々席に列つたものが、一度に聲を出して笑ふ種になつたのは唯芳江ばかりであつた。母などは話が途切れておのづと不安になる度に、「芳江お前は……」とか何とか無理に問題を拵へて、一時を糊塗するのを例にした。すると其態とらしさが、すぐ兄の神經に觸つた。

自分は食卓を退いて自分の室に歸る度に、ほつと一息吐くやうに煙草を呑んだ。

「詰らない。一面識のないものが寄つて會食するより猶詰らない。他の家庭もみんな斯んな不愉快なものかしら」

自分は時々斯う考へて、早く家を出てしまはうと決心した事もあつた。あまり食卓の空気が冷やかな折は、お重が自分の後を戀つて、追ひ懸けるやうに、自分の室へ這入つて來た。彼女は何にも云はずに其處で泣き出したりした。或時は何故兄さんに早く詫まらぬのだと詰問するやうに自分を悪らしさうに睨めたりした。

自分は宅に居るのが愈厭になつた。元來性急の癖に決斷に乏しい自分だけれども、今度こそ

は下宿なり間借りなりして、當分氣を抜かうと思ひ定めた。自分は三澤の所へ相談に行つた。其時自分は彼に、「君が大坂などで、あゝ長く煩ふから悪いんだ」と云つた。彼は「君がお直さん杯の傍に長く喰付いてゐるから悪いんだ」と答へた。

自分は上方から歸つて以來、彼に會ふ機會は何度となくあつたが、嫂に就いては、未だ會つて一言も彼に告げた例がなかつた。彼も亦自分の嫂に關しては、一切口を閉ぢて何事をも云はなかつた。

自分は始めて彼の咽喉を洩れる嫂の名を聞いた。また其嫂と自分との間に横はる、深くも淺くも取れる相互關係をあらはした彼の言葉を聞いた。さうして驚きと疑の眼を三澤の上に注いだ。其中に怒を含んでゐると解釋した彼は、「怒るなよ」と云つた。其後で「氣狂になつた女に、しかも死んだ女に惚れられたと思つて、己惚てゐる己の方が、まあ安全だらう。其代り心細いには違ない。然し面倒は起らないから、幾何惚れても、惚れられても一向差支ない」と云つた。自分は黙つてゐた。彼は笑ひながら「何うだ」と自分の肩を捕まへて小突いた。自分には彼の態度が眞面目なのか、又冗談なのか、少しも解らなかつた。眞面目にせよ、冗談にせよ、自分は彼に向つ

て何事をも説明したり、辯明したりする氣は起らなかつた。

自分は夫でも三澤に適當な宿を一二軒教はつて、歸り掛に、自分の室迄見て歸つた。家へ戻るや否や誰より先に、まづお重を呼んで、「兄さんもお前の忠告して呉れた通り愈家を出る事にした」と告げた。お重は案外な様な又豫期してゐたやうな表情を眉間にあつめて、凝と自分の顔を眺めた。

二十四

兄妹として云へば、自分とお重とは餘り仲の善い方ではなかつた。自分が外へ出る事を、第一に彼女に話したのは、愛情のためといふよりは、寧ろ面當の氣分に打勝たれてゐた。すると見る／＼うちにお重の兩方の眼に涙が一杯溜つて來た。

「早く出て上げて下さい。其代り妾も何んな所でも構はない、一日も早くお嫁に行きますから」と云つた。

自分は黙つてゐた。

人行

「兄さんは一旦外へ出たら、それなり家へ歸らずに、すぐ奥さんを貰つて獨立なさる積でせう」と彼女が又聞いた。

自分は彼女の手前「勿論さ」と答へた。其時お重は今迄持ち應へてゐた涙をぼろり／＼と膝の上へ落した。

「何だつて、そんなに泣くんのだ」と自分は急に優しい聲を出して聞いた。實際自分は此事件に就いてお重の眼から一滴の涙さへ豫期して居なかつたのである。

「だつて妾許後へ残つて……」

自分に判切聞こえたのは只是丈であつた。其他は彼女の無暗に引泣上げる聲が邪魔をして殆んど崩れたまゝ、自分の鼓膜を打つた。

自分は例の如く煙草を呑み始めた。さうして大人しく彼女の泣き止むのを待つてゐた。彼女はやがて袖で眼を拭いて立ち上つた。自分は其後妾を見たとき、急に可哀さうになつた。

「お重、お前とは好く喧嘩ばかりしたが、もう今迄通り畦み合ふ機會も滅多にあるまい。さあ仲直りだ。握手しよう」

自分は斯う云つて手を出した。お重は却つて極り悪氣に躊躇した。

自分は是から段々に父や母に自分の外へ出る決心を打ち明けて、彼等の許諾を一々求めなければならぬと思つた。たゞ最後に兄の所へ行つて、同じ決心を是非共練返す必要があるもので、それ丈が苦になつた。

母に打ち明けたのは慥その明くる日であつた。母は此唐突な自分の決心に驚いたやうに、「何うせ出るならお嫁でも極つてからと思つてゐたのだが。——まあ仕方があるまいよ」と云つた後、愴然として自分の顔を見た。自分はすぐ其足で、父の居間へ行かうとした。母は急に後から呼び留めた。

「二郎たとひ、お前が家を出たつてね……」

母の言葉は夫丈で支へて仕舞つた。自分は「何ですか」と聞き返したため、元の場所に立つてゐなければならなかつた。

「兄さんにはもう御話しかい」と母は急に即かぬ事を云ひ出した。

「いゝえ」と自分は答へた。

「兄さんには却てお前から直下に話した方が好いかも知れないよ。なまじ、御父さんや御母さんから取次ぐと、却て感情を害するかも知れないからね」

「え、僕もさう思つてゐます。成丈綺麗にして出る積りですから」

自分は斯う断つて、すぐ父の居間に這入つた。父は長い手紙を書いてゐた。

「大阪の岡田からお貞の結婚に就いて、此間又問ひ合せが来たので、其返事を書かう／＼と思ひながら、とう／＼今日迄放つて置いたから、今日は是非一つ其義務を果さうと思つて、今書いてゐる所だ。序だから左右云つとくが、御前の書く拜啓の啓の字は間違つてゐる。崩すなら其處にある様に崩すものだ」

長い手紙の一端が丁度自分の坐つた膝の前に出てゐた。自分は啓の字を横に見たが、何處が間違つてゐるのか丸で解らなかつた。自分は父が筆を動かす間、床に活けた黄菊だの其後にある懸物だのを心のうちで品評してゐた。

二十五

父は長い手紙を裾の方から巻き返しながら、「何か用かね、又金ぢやないか。金ならなよ」と云つて、封筒に上書を認めた。

自分は極めて簡略に自分の決意を述べた上、「永々御厄介になりましたが……」といふやうな形式の言葉を一寸後へ付け加へた。父は唯「うん左右か」と答へた。やがて切手を状袋の角へ貼り付けて、「一寸其ベルを押して呉れ」と自分に頼んだ。自分は「僕が出させませう」と云つて手紙を受け取つた。父は「お前の下宿の番地を書いて、御母さんに渡して置きな」と注意した。それから床の幅に就いて色々な説明をした。

自分は夫だけ聞いて父の室を出た。是で挨拶の残つてゐるものは、愈兄と嫂丈になつた。兄には此間の事件以來殆んど親しい言葉を換はさなかつた。自分は彼に對して怒り得る程の勇氣を持つてゐなかつた。怒り得るならば、此間罵しられて彼の書齋を出るとき、既に激昂してゐなければならなかつた。自分は後から小さな石膏像の飛んでくる位に恐れを抱く人間ではなかつた。けれどもあの時に限つて、怒るべき勇氣の源が既に枯れてゐたやうな氣がする。自分は室に入つた幽霊が、ふうと又室を出る如くに力なく退却した。其後も彼の書齋の扉を叩いて、快く詫まる丈

の度胸は、何處からも出て來なかつた。斯くして自分は毎日苦しい顔をしてゐる彼の顔を、晩餐の食卓に見る丈であつた。

嫂とも自分は近頃滅多に口を利かなかつた。近頃といふよりも寧ろ大阪から歸つて後といふ方が適當かも知れない。彼女は單獨に自分の筆筒などを置いた小さい部屋の所有主であつた。然しながら彼女と芳江が二人限其處に遊んでゐる事は、一日中で時間に積ると幾何もなかつた。彼女は大抵母と共に裁縫其他の手傳をして日を暮してゐた。

父や母に自分の未來を打ち明けた明る朝、便所から風呂場へ通ふ縁側で、自分は此嫂にばたりと出會つた。

「二郎さん、あなた下宿なさるんですつてね。宅が厭なの」と彼女は突然聞いた。彼女は自分の云つた通りを、何時の間にか母から傳へられたらしい言葉遣をした。自分は何氣なく「え、少時出る事にしました」と答へた。

「其方が面倒でなくつて好いでせう」

彼女は自分が何か云ふかと思つて、凝と自分の顔を見てゐた。然し自分は何とも云はなかつた。

「さうして早く奥さんをお貰ひなさい」と彼女の方から又云つた。自分は夫でも黙つてゐた。

「早い方が好いわよ貴方。妾探して上げませうか」と又聞いた。

「何うぞ願ひます」と自分は始めて口を開いた。

嫂は自分を見下げた様な又自分を調戲ふ様な薄笑ひを薄い唇の兩端に見せつゝ、わざと足音を高くして、茶の間の方へ去つた。

自分は黙つて、風呂場と便所の境にある三和土の隅に寄せ掛けられた大きな銅の金盥を見詰めた。此金盥は直徑二尺以上もあつて自分の力で持上るのも困難な位、重くて且大きなものであつた。自分は子供の時分から此金盥を見て、屹度大人の行水を使ふものだと思ひ、許り想像して、一人嬉しがつてゐた。金盥は今塵で忙しく汚れてゐた。低い硝子戸越しには、是も自分の子供時代から忘れ得ない秋海棠が、變らぬ年毎の色を淋しく見せてゐた。自分は是等の前に立つて、能く秋先に玄關前の藁を、兄と共に叩き落して食つた事を思ひ出した。自分はまだ青年だけれども、自分の背後には既に是丈無邪氣な過去がすつと續いてゐる事を發見した時、今昔の比較が自から胸に溢れた。さうして是から此餓鬼大將であつた兄と不愉快な言葉を交換して、わが家を出なければ

ならないといふ變化に想ひ及んだ。

二十六

其日自分が事務所から歸つてお重に「兄さんは」と聞くと、「まだよ」といふ返事を得た。

「今日は何處かへ廻る日なのかね」と重ねて尋ねた時、お重は「何うだか知らないわ。書齋へ行つて壁に貼り付けてある時間表を見て来て上げませうか」と云つた。

自分はたゞ兄が歸つたら教へて呉れるやうに頼んで、誰にも會はずに室へ這入つた。洋服を脱ぎ替へるのも面倒なので、其儘横になつて寐てゐるうち、何時の間にか本當の眠りに落ちた。さうして他人に説明も何も出来ない様な複雑に變化する不安な夢に襲はれてゐると、急にお重から起された。

「大兄さんがお歸りよ」

斯ういふ彼女の言葉が耳に這入つた時、自分はすぐ立ち上がった。けれども意識は朦朧として、夢のつゞきを歩いてゐた。お重は後から「まあ顔でも洗つて入らつしやい」と注意した。判然し

ない自分の意識は、それすら敢てする勇氣を必要と感ぜしめなかつた。

自分は其儘兄の書齋に這入つた。兄もまだ洋服のまゝであつた。彼は扉の音を聞いて、急に入口に眼を轉じた。其光のうちには或豫期を明かに示してゐた。彼が外出して歸ると、嫂が芳江を連れて、不斷の和服を持つて上がつて來るのが、其頃の習慣であつた。自分は母が嫂に「斯ういふ風にお爲よ」と云ひ付けたのを傍にゐて聞いてゐた事がある。自分はぼんやりしながらも、兄の此眼附によつて、和服の不斷着より、嫂と芳江とを彼は待ち設けてゐたのだと覺つた。

自分は寐惚けた心持が有つたればこそ、平氣で彼の室を突然開けたのだが、彼は自分の姿を敷居の前に見て、少しも怒りの影を現さなかつた。然したゞ黙つて自分の脊廣姿を打ち守る文で、急に言葉を出す氣色はなかつた。

「兄さん、一寸御話がありますか……」

と、自分は遂に此方から切り出した。

「此方へ御這入り」

彼の言語は落ち付いてゐた。且此間の事に就いて何の介意をも含んでゐないらしく自分の耳に

響いた。彼は自分の爲に、わざ／＼一脚の椅子を己の前へ据ゑて、自分を麾ねいた。

自分はわざと腰を掛けずに、椅子の脊に手を載せた儘、父や母に云つたと略同様の挨拶を述べた。兄は尊敬すべき學者の態度で、それを靜かに聞いてゐた。自分の單簡の説明が終ると、彼は嬉しくも悲しくもない常の來客に應接する様な態度で「まあ其處へお掛け」と云つた。

彼は黒いモーニングを着て、あまり好い香のしない葉巻を燻らしてゐた。

「出るなら出るさ。お前ももう一人前の人間だから」と云つて少時煙ばかり吐いてゐた。夫から「然し己がお前を出したやうに皆なから思はれては迷惑だよ」と續けた。「そんな事はありません。唯自分の都合で出るんですから」と自分は答へた。

自分の寐惚けた頭は此時次第に冴えて來た。出來る丈早く兄の前から退きたくなつた結果、振り返つて室の入口を見た。

「直も芳江も今湯に這入つて居るやうだから、誰も上がつて來やしない。其んなにそわ／＼しないで緩くり話すが好い、電燈でも點けて」

自分は立ち上がつて、室の内を明るくした。夫から、兄の吹かしてゐる葉巻を一本取つて火を

點けた。

「一本八錢だ。随分悪い煙草だらう」と彼が云つた。

二十七

「何時出る積かね」と兄が又聞いた。

「今度の土曜あたりに仕ようかと思つてます」と自分は答へた。

「一人出るのかい」と兄が又聞いた。

此奇異な質問を受けた時、自分は少時茫然として兄の顔を打ち守つてゐた。彼がわざと斯う云ふ失禮な皮肉を云ふのか、さうでなければ彼の頭に少し變調を來したのか、何方だか解らない。自分は、自分にも何の見當へ打つて出て好いものか、料簡が定まらなかつた。

彼の言葉は平生から皮肉澤山に自分の耳を襲つた。然しそれは彼の智力が我々よりも鋭敏に働き過ぎる結果で、其他に惡氣のない事は、自分に能く呑み込めてゐた。唯此一言丈は鼓膜に響いたなり、何時迄も其處でぢん／＼熱く鳴つてゐた。

兄は自分の顔を見て、えへ、と笑つた。自分は其笑ひの影にさへ歇斯的里性の稻妻を認めた。

「無論一人で出る氣だらう。誰も連れて行く必要はないんだから」

「勿論です。唯一人になつて、少し新しい空気を吸ひたいんです」

「新しい空気が己も吸ひたい。然し新しい空気を吸はして呉れる所は、この廣い東京に一ヶ所もない」

自分は半ば此好んで孤立してゐる兄を憐れんだ。さうして半ば彼の過敏な神経を悲しんだ。

「ちつと旅行でも爲すつたら何うです。少しは晴々するかも知れません」

自分が斯う云つた時、兄はチョツキの隠袋から時計を出した。

「まだ食事の時間には少し間があるね」と云ひながら、彼は再び椅子に腰を落ち付けた。さうして「おい二郎最う左右度々話す機會もなくなるから、飯が出来る迄此處で話さうぢやないか」と自分の顔を見た。

自分は「え」と答へたが、少しも尻は坐らなかつた。其上何も話す種がなかつた。すると兄が突然「お前バオロとフランチェスカの戀を知つてるだらう」と聞いた。自分は聞いた様な、聞

かない様な氣がするので、すぐとは返事も出来なかつた。

兄の説明によると、バオロと云ふのはフランチェスカの夫の弟で、其二人が夫の眼を忍んで、互に慕ひ合つた結果、とうとう夫に見付かつて殺されるといふ悲しい物語りで、ダンテの神曲の中とかに書いてあるさうであつた。自分は其憐れな物語に對する同情よりも、斯んな話を殊更にする兄の心持に就いて、一種厭な疑念を挾さんだ。兄は臭い煙草の煙の間から、始終自分の顔を見詰めつゝ、十三世紀だか十四世紀だか解らない遠い昔の以太利の物語をした。自分は其間やつとの事で、不愉快の念を抑へてゐた。所が物語が一應済むと、彼は急に思ひも寄らない質問を自分に掛けた。

「二郎、何故肝心な夫の名を世間が忘れてバオロとフランチェスカ又覚えてゐるのか。其譯を知つてるか」

自分は仕方がないから「矢つ張り三勝半七見たやうなものでせう」と答へた。兄は意外な返事に一寸驚いたやうであつたが、「己は斯う解釋する」と仕舞に云ひ出した。

「己は斯う解釋する。人間の作つた夫婦といふ關係よりも、自然が醸した戀愛の方が、實際神

聖だから、それで時を経るに従がつて、狭い社會の作つた窮窟な道徳を脱ぎ棄て、大きな自然の法則を嘆美する聲丈が、我々の耳を刺戟するやうに残るのではなからうか。尤も其當時はみんな道徳に加勢する。二人のやうな關係を不義だと云つて咎める。然しそれは其事情の起つた瞬間を治める爲の道義に驅られた云はゞ通り雨のやうなもので、あとへ残るのは何うしても青天と白日、即ちパオロとフランチェスカさ。何うだ左右は思はんかね」

二十八

自分は年輩から云つても性格から云つても、平生なら兄の説に手を舉げて賛成する筈であつた。けれども此場合、彼が何故わざ／＼パオロとフランチェスカを問題にするのか、又何故彼等二人が永久に残る理由を、物々しく解説するのか、其主意が分らなかつたので、自然の興味は全く不快と不安の念に打ち消されて仕舞つた。自分は奥歯に物の抉まつたやうな兄の説明を聞いて、畢竟それが何うしたのだといふ氣を起した。

「二郎、だから道徳に加勢するものは一時の勝利者には違ないが、永久の敗北者だ。自然に従

ふものは、一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ……」

自分は何とも云はなかつた。

「所が己は一時の勝利者にさへなれない。永久には無論敗北者だ」

自分は夫でも返事をしなかつた。

「相撲の手を習つても、實際力のないものは駄目だらう。そんな形式に拘泥しないで、實力さへ儘に持つておれば其方が屹度勝つ。勝つのは當り前さ。四十八手は人間の小刀細工だ。臂力は自然の賜物だ。……」

兄は斯ういふ風に、影を踏んで力んでゐるやうな哲學をしきりに論じた。さうして彼の前に坐つてゐる自分を、氣味の悪い霧で、一面に鎖して仕舞つた。自分には此朦朧たるものを拂ひ退けるのが、太い麻繩を噛み切るよりも苦しかつた。

「二郎、お前は現在も未來も永久に、勝利者として存在しようとする積だらう」と彼は最後に云つた。

自分は痾癩持だけれども兄程露骨に突進はしない性質であつた。ことさら此時は、相手が全然

正氣なのか、又は少し昂奮し過ぎた結果、精神に尋常でない一種の状態を引き起したのか、第一その方を懸念しなければならなかつた。其上兄の精神状態を其處に導いた原因として、何うしても自分が責任者と目指されてゐるといふ事實を、猶更苛く感じなければならなかつた。

自分はとうとう仕舞迄一言も云はずに兄の言葉を聞く丈聞いてゐた。さうして夫程疑ぐるなら一層嫂を離別したら、晴々して好からうにと考へたりした。

所へ其嫂が兄の平生着を持つて、芳江の手を引いて、例の如く階段を上つて來た。

扉の敷居に姿を現した彼女は、風呂から上りたてと見えて、蒼味の注した常の頬に、心持の好い程、薄赤い血を引き寄せて、肌理の細かい皮膚に手觸を挑むやうな柔らかさを見せてゐた。

彼女は自分の顔を見た。けれども一言も自分には云はなかつた。

「大變遅くなりました。嘸御窮屈でしたらう。生憎御湯へ這入つてゐたものだから、すぐ御召を持つて來る事が出来なくつて」

嫂は斯う云ひながら兄に挨拶した。さうして傍に立つてゐた芳江に、「さあお父さんに御歸り遊ばせと仰やい」と注意した。芳江は母の命令通り「御歸り」と頭を下げた。

自分は永らくの間、嫂が兄に對して是程家庭の夫人らしい愛嬌を見せた例を知らなかつた。自分は又此愛嬌に對して柔げられた兄の氣分が、彼の眼に強く集まつた例も知らなかつた。兄は人の手前極めて自尊心の強い男であつた。けれども、子供のうちから兄と一所に育つた自分には、彼の脳天を動きつゝある雲の往來が能く解つた。

自分は助け船が不意に來た嬉しさを胸に藏して兄の室を出た。出る時嫂は一面識もない眼下のものに挨拶でもするやうに、一寸頭を下げて自分に默禮をした。自分が彼女から斯んな冷淡な挨拶を受けたのも亦珍らしい例であつた。

二十九

二三日してから自分はとうとう家を出了。父や母や兄弟の住む、古い歴史を有つた家を出た。出る時は殆んど何事をも感じなかつた。母とお重が別れを惜むやうに浮かない顔をするのが、却て厭であつた。彼等は自分の自由行動をわざと妨げる様に感ぜられた。嫂は淋しいながら笑つて呉れた。

人行

「もう御出掛。では御機嫌よう。又ちよく／＼遊びに入らつしやい」

自分は母やお重の曇つた顔を見た後で、此一口の愛嬌を聞いた時、多少の愉快を覺えた。

自分は下宿へ移つてからも有樂町の事務所へ例の通り毎日通つてゐた。自分を其處へ周旋して呉れたものは、例の三澤であつた。事務所の持主は、昔三澤の保証人をしてゐた（兄の同僚の）Hの叔父に當る人であつた。此人は永らく外國に居て、内地でも相應に経験を積んだ大家であつた。胡麻鹽頭の中へ指を突つ込んで、無暗に頭垢を掻き落す癖があるので、差し向の間に火鉢でも置くと、時々火の中から妙な臭を立てさせて、非道く相手を弱らせる事があつた。

「君の兄さんは近來何を研究してゐるか」など、度々自分に聞いた。自分は仕方なしに、「何だか一人で書齋に籠つて遣つてるやうです」と極めて大體な答へをするのを例のやうにしてゐた。

梧桐が坊主になつたある朝、彼は突然自分を捕へて、「君の兄さんは近頃何うだね」と又聞いた。斯う云ふ彼の質問に慣れ切つてゐた自分も、其時ばかりは餘りの不意打に一寸返事を忘れた。

「健康は何うだね」と彼は又聞いた。

「健康は餘り好い方ぢやないです」と自分は答へた。

「少し氣を付けないと不可ないよ。餘り勉強ばかり爲てゐると」と彼は云つた。

自分は彼の顔を打ち守つて、其處に一種の眞面目な眉と眼の光とを認めた。

自分は家を出てから、まだ一遍しか家へ行かなかつた。其折そつと母を小蔭に呼んで、兄の様子を聞いて見たら「近頃は少し好い様だよ。時々裏へ出て芳江をブランコに載せて、押して遣つたりしてゐるからね。……」

自分は夫で少しは安心した。夫限宅の誰とも顔を合はせる機會を拵へずに今日迄過ぎたのである。

晝の時間に一品料理を取寄せて食つてゐると、B先生（事務所の持主）が又突然「君は慥か下宿したんだつたね」と聞いた。自分は唯簡單に「え、」と答へて置いた。

「何故。家の方が廣くつて便利だらうぢやないか。それとも何か面倒な事でもあるのかい」

自分は愚圖ついて頗る曖昧な挨拶をした。其時呑み込んだ麵麩の一片が、如何にも水氣がないやうに、ばさ／＼と感ぜられた。

「然し一人の方が却つて氣樂かも知れないね。大勢ごた／＼してゐるよりも。——時に君はま

だ獨身だらう、何うだ早く細君でも有つちや」

自分はB先生の此言葉に對しても、平生の通り氣樂な答が出来なかつた。先生は「今日は君いやに意氣銷沈してゐるね」と云つたぎり話頭を轉じて、他のものと愚にも附かない馬鹿話を始め出した。自分は自分の前にある茶碗の中に立つてゐる茶柱を、何かの前徴の如く見詰めたぎり、左右に起る笑ひ聲を聞くともなく、又聞かぬでもなく、默然と腰を掛けてゐた。さうして心の裡で、自分こそ近頃神經過敏症に罹つてゐるのではなからうかと不愉快な心配をした。自分は下宿にゐて餘り孤獨なため、斯う頭に變調を起したのだと思ひ付いて、歸つたら久し振に三澤の所へでも話に行かうと決心した。

三十

其晩三澤の二階に案内された自分は、氣樂さうに胡坐をかいた彼の姿を見て羨ましい心持がした。彼の室は明るい電燈と、暖かい火鉢で、初冬の寒さから全然隔離されてゐるやうに見えた。自分は彼の痲疾が秋風の吹き募るに従つて、漸々好い方へ向いて來た事を、かねてから彼の色に

も姿にも知つた。けれども今の自分と比較して、彼が斯う悠たり構へてゐようとは思へなかつた。高くて暑い空を、恐る／＼仰いで暮らした大阪の病院を憶ひ起すと、當時の彼と今の自分とは、殆んど地を換たと一般であつた。

彼はつい近頃父を失つた結果として、當然一家の主人に成り済ましてゐた。Hさんを通してB先生から彼を使ひたいと申し込まれた時も、彼はまづ己れを後にするといふ好意からか、若しくは贅澤な嗜好みからか、折角の位置を自分に譲つて呉れた。

自分は電燈で照された彼の室を見廻して、其壁を隙間なく飾つてゐる風雅なエツチングや水彩畫などに就て、しばらく彼と話し合つた。けれども何ういふものか、藝術上の議論は十分經つた経たないうちに自然と消えて仕舞つた。すると三澤は突然自分に向つて、「時に君の兄さんだがね」と云ひ出した。自分は此處でも亦兄さんかと驚いた。

「兄が何うしたつて？」

「いや別に何うしたつて事もないが……」

彼は是丈云つて只自分の顔を眺めてゐた。自分は勢ひ彼の言葉とB先生の今朝の言葉とを胸の

中で結び付けなければならなかつた。

「さう半分でなく、話すなら皆な話して呉れないか。兄が一體何うしたと云ふんだ。今朝もB先生から同じ様な事を聞かれて、妙な気がしてゐる所だ」

三澤は焦烈つたさうな自分の顔を尙懇氣に見詰めてゐたが、やがて「ぢや話さう」と云つた。

「B先生の話も僕のも矢つ張り同じHさんから出たのだらうと思ふがね。Hさんのは又學生から出たのだつて云つたよ。何でもね、君の兄さんの講義は、平生から明瞭で新しくつて、大變學生に氣受が好いんださうだが、其明瞭な講義中に、矢張り明瞭ではあるが、前後と何うしても辻褃の合はない所が一二箇所出て来るんだつてね。さうして夫を學生が質問すると、君の兄さんは元來正直な人だから、何遍も何遍も繰返して、其處を説明しようとするが、何うしても解らないんださうだ。仕舞に手を額へ當て、何うも近來頭が少し悪いもんだから……と茫乎硝子窓の外を眺めながら、何時迄も立つてゐるんで、學生も、そんなら又此次にしませうと、自分の方で引き下がつた事が、何でも幾遍もあつたと云ふ話さ。Hさんは僕に今度長野（自分の姓）に逢つたら、少し注意して見るが好い。ことによると烈しい神経衰弱なのかも知れないからつて云つたが、

僕もとう／＼それなり忘れて仕舞つて、今君の顔を見る迄は思ひ出せなかつたのだ」

「そりや何時頃の事だ」と自分はせはしなく聞いた。

「丁度君の下宿する前後の事だと思つてゐるが、判然した事は覚えて居ない」

「今でも左右なのか」

三澤は自分の思ひ通つた顔を見て、慰めるやうに「いや／＼」と云つた。

「いや／＼夫はほんに一時的の事であつたらしい。此頃では全然平生と變らなくなつたやうだと、Hさんが二三日前僕に話したから、もう安心だらう。然し……」

自分は家を出た時に自分の胸に刻み込んだ兄との會見を思はず憶ひ出した。さうして其折の自分の疑ひが、或は學校で證明されたのではなからうかと考へて、非常に心細く且恐ろしく感じた。

三十一

人行

自分は力めて兄の事を忘れようとした。すると不圖大阪の病院で三澤から聞いた精神病の「娘さん」を聯想し始めた。

「あのお嬢さんの法事には間に合つたのかね」と聞いて見た。

「間に合つた。間に合つたが、實にあの娘さんの親達は失敬な厭な奴だ」と彼は拳骨でも振り廻しさうな勢ひで云つた。自分は驚いて其理由を聞いた。

彼は其日三澤家を代表して、築地の本願寺の境内とかにある菩提所に参詣した。薄暗い本堂で長い讀經があつた後、彼も列席者の一人として、一抹の香を白い位牌の前に焚いた。彼の言葉によつて、彼程の誠をもつて、其若く美しい女の靈前に額づいたものは、彼以外に殆どあるまいといふ話であつた。

「あいつ等はいくら親だつて親類だつて、只靜かなお祭りでも爲てゐる氣になつて、平氣でゐやがる。本當に涙を落したのは他人の己丈だ」

自分は三澤の斯ういふ憤慨を聞いて、少し滑稽を感じたが、表ではたゞ「成程」と肯がつた。すると三澤は「いや其れ丈なら何も怒りやしない。然し癪に障つたのはその後だ」

彼は一般の例に従つて、法要の済んだ後、寺の近くにある或料理屋へ招待された。其食事中に、彼女の父に當る人や、母に當る女が、彼に對して談をするうちに妙に引つ掛つて來た。何の悪意

もない彼には、最初一向その當こすりが通じなかつたが、段々時間の進むに従つて、彼等の本旨が漸く分つて來た。

「馬鹿にも程があるね。露骨にいへばさ、あの娘さんを不幸にした原因は僕にある。精神病にしたのも僕だ、と斯うなるんだね。さうして離別になつた先の亭主は、丸で責任のないやうに思つてゐるらしいんだから失敬ぢやないか」

「何うして又さう思ふんだらう。そんな筈はないがね。君の誤解ぢやないか」と自分が云つた。

「誤解？」と彼は大きな聲を出した。自分は仕方なしに黙つた。彼はしきりにその親達の愚劣な點を述べたて、已まなかつた。その女の夫となつた男の輕薄を罵しつて措なかつた。仕舞に斯う云つた。

「何故そんなら始めから僕に遣らうと云はないんだ。資産や社會的地位ばかり目當にして……」

「一體君は貰ひたいと申し込んだ事でもあるのか」と自分は途中で遮つた。

「ないさ」と彼は答へた。

「僕がその娘さんに――その娘さんの大きな潤つた眼が、僕の胸を絶えず往來するやうになつたのは、既に精神病に罹つてからの事だもの。僕に早く歸つて来て呉れと頼み始めてからだもの」
彼は斯う云つて、依然として其女の美しい大な眸を眼の前に描くやうに見えた。もし其女が今でも生きて居たなら何んな困難を冒しても、愚劣な親達の手から、若しくは輕薄な夫の手から、永久に彼女を奪ひ取つて、己れの懷で暖めて見せるといふ強い決心が、同時に彼の固く結んだ口の邊に現れた。

自分の想像は、此時其美しい眼の女よりも、却て自分の忘れようとしてゐた兄の上に逆戻りをした。さうして其女の精神に祟つた恐ろしい狂ひが耳に響けば響く程、兄の頭が氣に掛つて來た。兄は和歌山行の汽車の中で、其女は慥かに三澤を思つてゐるに違ないと斷言した。精神病で心の憚が解けたからだと其理由迄も説明した。兄はことによると、嫂をさういふ精神病に罹らして見たい、本音を吐かせて見たい、と思つてるかも知れない。さう思つてゐる兄の方が、傍から見ると、もうそろ／＼神經衰弱の結果、多少精神に狂ひを生じかけて、自分の方から恐ろしい言葉を家中に響かせて狂ひ廻らないとも限らない。

自分は三澤の顔などを見てゐる暇を有たなかつた。

三十二

自分がかねて母から頼まれて、此次若し三澤の所へ行つたら、彼にお重を貰ふ氣があるか、ないか、夫となく彼の様子を探つて來るといふ約束をした。しかし其晩は何うしても左右いふ元氣が出なかつた。自分の心持を了解しない彼は、却て自分に結婚を勧めて已まなかつた。自分の頭は又それに對して氣乗のした返事をする程、穩かに澄んでゐなかつた。彼は折を見て、ある候補者を自分に紹介すると云つた。自分は生返事をして彼の家を出た。外は十文字に風が吹いてゐた。仰ぐ空には星が粉の如くさゝやかな力を集めて、此風に抵抗しつゝ輝いた。自分は佗しい胸の上に兩手を當て、下宿へ歸つた。さうして冷たい蒲團の中にすぐ潜り込んだ。

夫から二三日しても兄の事がまだ氣に懸つたなり、頭が何うしても自分と調和して呉れなかつた。自分はとう／＼番町へ出掛て行つた。直接兄に會ふのが厭なので、二階へはとう／＼上らなかつたが、母を始め他の者には無沙汰見舞の格で、何氣なく例の通りの世間話をした。兄を交へ

ない一家の團樂は却て寛いだ暖かい感じを自分に與へた。

自分は歸り際に、母を一寸次の間へ呼んで、兄の近況を聞いて見た。母は此頃兄の神経が大分落ち付いたと云つて喜んで居た。自分は母の一言でやつと安心したやうなもの、母には氣の付かない特殊の點に、何だか變調がありさうで、却つてそれが氣掛りになつた。さればと云つて、兄に會つて自分から彼を試験しようといふ勇氣は無論起し得なかつた。三澤から聞いた兄の講義が一時變になつた話も母には告げ得なかつた。

自分は何も云ふ事のないのに、茫乎暗い部屋の襖の蔭に寒さうに立つて居た。母も自分に對して其處を動かなかつた。其上彼女の方から自分に何かいふ必要を認めるやうに見えた。

「尤も此間少し風邪を引いた時、妙な嚙語を云つたがね」と云つた。

「何んな事を云ひました」と自分は聞いた。

母はそれには答へないで、「なに熱の所爲だから、心配する事はないんだよ」と自分の間を打ち消した。

「熱がそんなに有つたんですか」と自分は更に別の事を尋ねた。

「それがね、熱は三十八度か八度五分位なんだから、其んな筈はないと思つて、お醫者に聞いて見ると、神経衰弱のものは少しの熱でも頭が變になるんだつてね」

醫學の初步さへ心得ない自分は始めて此知識に接して、思はず眉をひそめた。けれども室が暗いので、母には自分の顔が見えなかつた。

「でも氷で頭を冷したら、其お蔭で熱がすぐ引いたんで安心したけれど……」
自分は熱の引かない時の兄が、何んな嚙語を云つたか、それが未だ知りたいので、薄ら寒い襖の蔭に依然として立つてゐた。

次の間は電燈で明るく照されてゐた。父が芳江に何か云つて調戲ふたびに、皆なの笑ふ聲が陽氣に聞こえた。すると突然其笑ひ聲の間から、「おい二郎」と父が自分を呼んだ。

「おい二郎、又御母さんに小遣でも強請つてるんだらう。お綱、お前見たやうに、さう無暗に二郎の口車に乗つちや不可ないよ」と大きな聲で云つた。

「いゝえ其んな事ぢやありません」と自分も大きな聲で負けずに答へた。

「ぢや何だい、そんな暗い所で、こそ〱御母さんを取つ捉まへて話して居るのは。おい早く

光るい所へ面を出せ」

父が斯う云つた時、明るい室の方に集まつたものは一度にとつと笑つた。自分は母から聞き度い事も聞かずに、父の命令通り、はいと云つて、皆なの前へ姿をあらはした。

三十三

それから暫くの間は、B先生の顔を見ても、三澤の所へ遊びに行つても、兄の話は一向話題に上らなかつた。自分は少し安心した。さうして成るべく家の事を忘れようと試みた。然し下宿の徒然に打ち勝たれるのが何より苦しいので、よく三澤の時間を潰しに此方から押し寄せたり、又引つ張り出したりした。

三澤は厭きずに何時迄も例の精神病の娘さんの話をした。自分は此異様なおのろけを聞くたびに、屹度兄と嫂の事を連想して自から不快になつた。それで、時々又かといふ様子を色にも言葉にも表はした。三澤も負けては居なかつた。

「君も君のおのろけを云へば、夫で差引損得なしぢやないか」などと自分を冷かした。自分は

もう些と彼と往來で喧嘩をする所であつた。

彼には斯ういふ風に、精神病の娘さんが、影身に添つて離れないので、自分はかねて母から頼まれたお重の事を彼に話す餘地がなかつた。お重の顔は誰が見ても、まあ十人並以上だらうと、仲の善くない自分にも思へたが、惜い事に、此大切な娘さんとは、丸で顔の型が違つてゐた。

自分の遠慮に引き換へて、彼は平氣で自分に嫁の候補者を推挙した。「今度何處かで一寸見て見ないか」と勧めた事もあつた。自分は始めこそ生返事許してゐたが、仕舞は本氣に其女に會はうと思ひ出した。すると三澤は、まだ機會が來ないから、最う少し、最う少し、と會見の日を順繰りに先へ送つて行くので、自分は又氣を腐らした末、遂に其女の幻を離れて仕舞つた。

反對に、お貞さんの方の結婚は愈事實となつて現るべく、目前に近いて來た。お貞さんは相應の年をしてゐる癖に、宅中で一番初心な女であつた。是といふ特色はないが、何を云つても、ちき顔を赤くする所に變な愛嬌があつた。

自分は三澤と夜更に寒い町を歸つて來て、下宿の冷たい夜具に潜り込みながら、時々お貞さんの事を思ひ出した。さうして彼女も斯んな冷たい夜具を引き擔ぎながら、今頃は近い未來に通る

暖かい夢を見て、誰も氣の付かない笑ひ顔を、半ば天鵞絨の襟の裡に埋めてゐるだらうなどと思像した。

彼女の結婚する二三日前に、岡田と佐野は、氷を裂くやうな汽車の中から身を顛はして新橋の停車場に下りた。彼は迎へに出た自分の顔を見て、いようといふ掛聲をした。それから「相變らず二郎さんは呑氣だね」と云つた。岡田は己れの呑氣さ加減を自覺しない男のやうにも思はれた。翌日番町へ行つたら、岡田一人のために宅中騒々しく賑つてゐた。兄も外の事と違ふといふ意味か、別に苦い顔もせず、其渦中に捲込まれて黙つてゐた。

「二郎さん、今になつて下宿するなんて、そんな馬鹿がありますか、家が淋しくなる丈ぢやありませんか。ねえお直さん」と彼は嫂に話し掛けた。此時丈は嫂も流石變な顔をして黙つてゐた。自分も何とも云ひやうがなかつた。兄は却て冷然と凡てに取り合はない氣色を見せた。岡田は既に酔つて何事にも拘泥せずへらへら口を動かした。

「尤も一郎さんも善くないと僕は思ひますよ。さう貴方、書齋にばかり引つ込んで勉強してゐたつて、話らないぢやありませんか。もう貴方位學問をすれば、何處へ出たつて引けを取るんぢ

やないんだからね。然し二郎さん始め、お直さんや叔母さんも好くないやうですね。一郎は書齋より外は嫌ひだ／＼つて云つときながら、僕が來て斯う引つ張り出せば、譯なく二階から下りて來て、僕と面白さうに話して呉れるぢやありませんか。左右でせう一郎さん」

彼は斯う云つて兄の方を見た。兄は黙つて苦笑ひをした。

「ねえ叔母さん」

母も黙つてゐた。

「ねえお直さん」

彼は返事を受ける迄順々に聞いて廻るらしかつた。お直はすぐ「岡田さん、貴方いくら年を取つても饒舌る病氣が癒らないのね。騒々しいわよ」と云つた。それで皆なが笑ひ出したので、自分ほつと一息吐いた。

三十四

人行

芳江が「叔父さん一寸入らつしやい」と次の間から小さな手を出して自分を招いた。「何だい」

と立て行くと彼女は何處からか、大きな信玄袋を引摺出して、「はお貞さんのよ、見せたげませうか」と自慢らしく自分を見た。

彼女は信玄袋の中から天鷲絨で張つた四角な箱を出した。自分は其中にある眞珠の指環を手にとつて、ふんと云ひながら眺めた。芳江は「是もよ」と云つて、今度は海老茶色を出したが、是は自分が洗濯其他の世話になつた禮に買つて遣つた寶石なしの單純な金の指環であつた。彼女は又「是もよ」と云つて、縞珍の紙入を出した。其紙入には模様風に描いた菊の花が金で一面に織り出されてゐた。彼女は其次に比較的大きくて細長い桐の箱を出した。是は金と赤銅と銀とで、蔦の葉を綴つた金具の付いてゐる帶留であつた。最後に彼女は櫛と笄を示して、「是卵甲よ。本當の籠甲ぢやないんだつて。本當の籠甲は高過ぎるから御已めにしたんですつて」と説明した。自分には卵甲といふ言葉が解らなかつた。芳江には無論解らなかつた。けれども女の子であつて、「是一番安いよ。四方張よか安いよ。玉子の白味で貼り付けるんだから」と云つた。「玉子の白味で何處をどう貼り付けるんだい」と聞くと、彼女は、「そんな事知らないわ」と取り濟ました口の利き方をして、さつさと信玄袋を引き摺つて次の間へ行つて仕舞つた。

自分は母からお貞さんの當日着る着物を見せて貰つた。薄紫がかつた御納戸の縮緬で、紋は蔦、裾の様は竹であつた。

「是ぢや餘り閑靜過ぎやしませんか、年に合はして」と自分は母に聞いて見た。母は「でもね餘り高くなるから」と答へた。さうして「是でも御前二十五圓掛つたんだよ」と付け加へて、無知識な自分を驚かした。地は去年の春京都の織屋が脊負つて來た時、白の儘三反許用意に買つて置いて、此間迄箆の抽出に仕舞つたなり放つてあつたのださうである。

お貞さんは一座の席へ先刻から少しも顔を出さなかつた。自分は大方極りが悪いのだらうと想像して、其極りの悪い所を、此處で一目見たいと思つた。

「お貞さんは何處に居るんです」と母に聞いた。すると兄が「あゝ忘れた。行く前に一寸お貞さんに話があるんだつた」と云つた。

みんな變な顔をしたうちに、嫂の唇には著るしい冷笑の影が閃めいた。兄は誰にも取合ふ氣色もなく、「一寸失敬」と岡田に挨拶して、二階へ上がった。其足音が消えると間もなく、お貞さんは自分達の居る室の敷居際迄來て、岡田に丁寧な挨拶をした。

彼女は「さあ何うぞ」と會釋する岡田に、「今一寸御書齋迄参らなければなりませんから、いづれ後程」と答へて立ち上がった。彼女の上氣したやうにほつと赤くなつた顔を見た一座のものは、氣の毒な爲か何だか、強ひて引き留めようともしなかつた。

兄の二階へ上がる足音はそれ程強くはなかつたが、何時でも上履を引掛けてゐる爲、びしや／＼する響が、下からよく聞こえた。お貞さんの素足の上に、女のつゝましやかな氣性をあらはす所爲か、丸で聞き取れなかつた。戸を開けて戸を閉ぢる音さへ、自分の耳には全く這入らなかつた。

彼等二人は其處で約三十分許何か話してゐた。其間、嫂は平生の冷淡さに引き換て、尋常のものより機嫌よく話たり笑つたりした。けれども其裏に不機嫌を藏さうとする不自然の努力が強く潜在してゐる事が自分に能く解つた。岡田は平氣でゐた。

自分は彼女が兄と會見を終つて、自分達の室の横を通る時、其足音を聞き付けて、用あり氣に不意と廊下へ出た。ばつたり出逢つた彼女の顔は依然として恥づかしさうに赤く染つてゐた。彼女は眼を俯せて、自分の傍を擦り抜けた。其時自分は彼女の臉に涙の宿つた痕迹を慥かに認めた

やうな氣がした。けれども書齋に入った彼女が兄と差向ひで何んな談話をしたか、それは未だに知る事を得ない。自分丈ではない、其委細を知つてゐるものは、彼等二人より以外に、恐らく天下に一人もあるまいと思ふ。

三十五

自分は親戚の片割として、お貞さんの結婚式に列席するやう、父母から命ぜられてゐた。其日は丁度雨がしよぼ／＼降つて、婚禮には似合しからぬ佻びしい天氣であつた。何時もより早く起きて番町へ行つて見ると、お貞さんの衣裳が八疊の間に取り散らしてあつた。

便所へ行つた歸りに風呂場の口を覗いて見たら、硝子戸が半分開いて、其中にお貞さんのお化粧をしてゐる姿がちらりと見えた。それから「あら其處へ障つちや厭ですよ」といふ彼女の聲が聞こえた。芳江は面白半分何か悪戯をすると見えた。自分も芳江の眞似を遣らうと思つたが、場合が場合なのでつい遠慮して茶の間へ戻つた。

しばらくしてから、又八疊へ出て見ると、みんながお召換を遣つてゐた。芳江が「あのお貞さ

んは手へも白粉を塗けたのよ」と大勢に吹聴してゐた。實を云ふと、お貞さんは顔よりも手足の方が赤黒かつたのである。

「大變眞白になつたな。亭主を欺瞞すんだから善くない」と父が調戲つてゐた。

「あしたになつたら旦那様が嘸驚くでせう」と母が笑つた。お貞さんも下を向いて苦笑した。彼女は初めて島田に結つた。それが豫期出来なかつた斬新の感じを自分に與へた。

「此髷でそんな重いものを差したら嘸苦しいでせうね」と自分が聞くと、母は「いくら重くつても、生涯に一度はね……」と云つて、己れの黒紋付と白襟との合ひ具合をしきりに氣にしてゐた。お貞さんの帯は嫂が後へ廻つて、ぐつと締めて遣つた。

兄は例の臭い巻煙草を吹かしながら廣い縁側を彼方此方と逍遙してゐた。彼は此結婚に、丸で興味を有たないやうな、又彼一流の批評を心の中に加へてゐるやうな、判断の出来悪い態度をあらはして、時々我々の居る座敷を覗いた。けれども一寸敷居際に留まる文で決して中へは遣入らなかつた。「仕度はまだか」とも催促しなかつた。彼はフロックに絹帽を被つてゐた。

愈出る時に、父は一番綺麗な俵を擇つて、お貞さんを乗せて遣つた。十一時に式がある筈の

所を少し時間が後れた爲め岡田は太神宮の式臺へ出て、わざ／＼我々を待つてゐた。皆ながどや／＼と一度に控所に這入ると、其處にはお婚さんがたゞ一人質に取られた置物のやうに椅子へ腰を掛けてゐた。やがて立ち上がつて、一人／＼に挨拶をするうちに、自分は控所にある洋卓やら、絨氈やら、白木の格天井やらを眺めた。突き當りには御簾が下りてゐて、中には何か居るらしい氣色だけれども、奥の全く暗いため何物をも髣髴する事が出来なかつた。其前には鶴と浪を一面に描いた目出度い一雙の金屏風が立て廻してあつた。

縁女と仲人の奥さんが先、それから婿と仲人の夫、其次へ親類がつゞくといふ順を、袴羽織の男が出て来て教へて呉れたが、肝腎の仲人たるべき岡田はお兼さんを連れて來なかつたので、「ちや甚だ御迷惑だけど、一郎さんとお直さんに引き受けて戴きませうか、此場限り」と岡田が父に相談した。父は簡單に「好からうよ」と答へた。嫂は例の如く「何うでも」と云つた。兄も「何うでも」と云つたが、後から、「然し僕等のやうな夫婦が媒妁人になつちや、少し御兩人の爲に悪くだらう」と付け足した。

「悪いなんて——僕がするより名譽でさあね。ねえ二郎さん」と岡田が例の如く軽い調子で云

つた。兄は何やら其理由を述べたいらしい氣色を見せたが、すぐ考へ直したと見えて、「ぢや生れて初めての役を引き受けて見るかな。然し何にも知らないんだから」と云ふと、「何向ふで何も彼も教へて呉れるから世話はない。お前達は何もしないで済むやうにちやんと拵へてあるんだ」と父が説明した。

三十六

反橋を渡る所で、先の人が何かに支て一同一寸留つた機會を利用して、自分はそつと岡田のフロックの尻を引張つた。

「岡田さんは實に呑氣だね」と云つた。

「何故です」

彼は自ら媒妁人をもつて任じながら、その細君を連れて來ない不注意に少しも氣が付いてゐないらしかつた。自分から呑氣の譯を聞いた時、彼は苦笑して頭を掻きながら、「實は伴れて來ようと思つたんですがね、まあ何うかなるだらうと思つて……」と答へた。

反橋を降りて奥へ這入らうといふ入口の所で、花嫁は一面に張り詰められた鏡の前へ坐つて、黒塗の盥の中で手を洗つてゐた。自分は後から脊延をして、お貞さんの姿を見た時、成程これ列が後れるんだなと思ふと同時に吹き出し度なつた。折角丹精して塗り立てた彼女の手も、此神聖な一杓の水で、無残に元の如く赤黒くされて仕舞つたのである。

神殿の左右には別室があつた。其右の方へ兄が佐野さんを伴れて這入つた。其左の方へ嫂がお貞さんを伴れて這入つた。それが左右から出て來て着座するのを見ると、兄夫婦は眞面目な顔をして向ひ合せて坐つてゐた。花嫁花婿も無論の事、謹んだ姿で相對してゐた。

式壇を正面に、後の方にすらりと並んだ父だの母だの自分達は、此二様の意味を有つた夫婦と、繪の具で塗り潰した綺麗な太鼓と、何物を中に藏してゐるか分らない、御簾を靜肅に眺めた。

兄は腹のなかで何を考へてゐるか、餘所目から見ると、尋常と變る所は少しもなかつた。嫂は元より取り繕つた様子もなく、自然其儘に取り済ましてゐた。

彼等は既に過去何年かの間に、夫婦といふ社會的に大切な経験を彼等なりに嘗めて來た、古い夫婦であつた。さうして彼等の嘗めた経験は、人生の歴史の一部分として、彼等に取つては再び

しがたい貴いものであつたかも知れない。けれども何方から云つても、蜜に似た甘いものではなかつたらしい。此苦い経験を有する古夫婦が、己れ達のあまり幸福でなかつた運命の割前を、若い男と若い女の頭の上に割り付けて、又新しい不仕合な夫婦を作る積なのかしらん。

兄は學者であつた。かつ感情家であつた。其蒼白い額の中に或は此位な事を考へてゐたかも知れない。或はそれ以上に深い事を考へてゐたかも知れない。或は凡ての結婚なるものを自ら呪詛しながら、新郎と新婦の手を握らせなければならぬ仲人の喜劇と悲劇とを同時に感じつゝ坐つてゐたかも知れない。

兎に角兄は眞面目に坐つてゐた。嫂も、佐野さんも、お貞さんも、眞面目に坐つてゐた。其内式が始まつた。巫女の一人が、途中から腹痛で引き返したといふので介添が其代りを勤めた。自分の隣に坐つてゐたお重が「大兄さんの時より淋しいのね」と私語いた。其時は簫や太鼓を入れて、巫女の左右に入れ交ふ姿も蝶のやうに翩々と華麗に見えた。

「御前の嫁に行く時は、あの時位賑かにして遣るよ」と自分はお重に云つた。お重は笑つてゐた。

式が済んでみんなが控所へ歸つた時、お貞さんは我々が立つてゐるのに、わざ／＼絨氈の上へ手を突いて、今迄厄介になつた禮を丁寧に述べた。彼女の眼には淋しさうな涙が一杯溜つてゐた。新夫婦と岡田は晝の汽車で、すぐ大阪へ向けて立つた。自分は雨のブラツトフォームの上で、二三日箱根あたりで逗留する筈のお貞さんを見送つた後、父や兄に別れて獨り自分の下宿へ歸つた。さうして途々自分にも當然番の廻つてくるべき結婚問題を人生に於ける不幸の謎の如く考へた。

三十七

人行

お貞さんが攫はれて行くやうに消えて仕舞つた後の宅は、相變らずの空気で包まれてゐた。自分の見た所では、お貞さんが宅中で一番の呑氣ものらしかつた。彼女は永年世話になつた自分の家に、朝夕帯を執つたり、洗ひ酒ぎをしたりして、下女だか仲働だか分らない地位に甘んじた十年の後、別に不平な顔もせず佐野と一所に雨の汽車で東京を離れて仕舞つた。彼女の腹の中も日常彼女の繰り返しつゝ慣れ抜いた仕事の如く明瞭でかつ器械的なものであつたらしい。一家團

樂の時季とも見るべき例の晩餐の食卓が、一時重苦しい灰色の空気で鎖された折でさへ、お貞さん丈は其中に坐つて、平生と何の變りもなく、給仕の盆を膝の上に載せたまゝ平氣で控へてゐた。結婚當日の少し前、兄から書齋へ呼ばれて出て来た時、彼女の顔を染めた色と、彼女の臉に充ちた涙が、彼女の未來のために、何を語つてゐたか知らないが、彼女の氣質から云へば、それがために長い影響を受けようとも思へなかつた。

お貞さんが去ると共に冬も去つた。去つたと云ふよりも、先づ大した事件も起らずに済んだと評する方が適當かも知れない。斑らな雪、枯枝を掃ぶる風、手水鉢を鎖ざす氷、孰れも例年の面影を規則正しく自分の眼に映した後、消えては去り消えては去つた。自然の寒い課程が斯う繰返されてゐる間、番町の家は凝として動かすにゐた。其家の中にある人と人との關係も何うか斯うか今迄通り持ち應へた。

自分の地位にも無論變化はなかつた。唯お重が遊び半分時々々苦情を訴へに來た。彼女は來る度に「お貞さんは何うしてゐるでせうね」と聞いた。

「何うしてゐるでせうつて、——お前の所へ何とも云つて來ないのか」

「來る事は來るわ」

聞いて見ると、結婚後のお貞さんに就いて、彼女は自分より遙に豊富な知識を有つてゐた。自分は又彼女が來る度に、兄の事を聞くのを忘れなかつた。

「兄さんは何うだい」

「何うだいつて、貴方こそ悪いわ。家へ來ても兄さんに逢はずに歸るんだから」

「わざ／＼避けるんぢやない。行つても何時でも留守なんだから仕方がない」

「嘘を仰しやい。此間來た時も書齋へ這入らずに逃げた癖に」

お重は自分より正直な丈に眞赤になつた。自分はこの事件以後何うかして兄と故の通り親しい關係になりたいと心では希望してゐたが、實際はそれと反對で、何だか近寄り悪い氣がするので、全くお重の云ふ如く、宅へ行つて彼に挨拶する機會があつても、成る可く會はずに歸る事が多かつた。

お重に遣り込められると、自分は無言の降意を表する如くにはあは／＼と笑つたり、わざと短い口影を撫でたり、時によると例の通り煙草に火を點けて曖昧な煙を吐いたりした。

左右かと思ふと却てお重の方から突然「大兄さんも随分變人ね。あたし今になつて全く貴方が喧嘩して出たのも無理はないと思ふわ」などと云つた。お重から藪から棒に斯う驚かされると、自分は腹の底で自分の味方が一人殖えたやうな氣がして嬉しかつた。けれども表向彼女の意見に相槌を打つ程の稚氣もなかつた。叱り付ける程の御氣もなかつた。只彼女が歸つた後で、忽ち今迄の考へが逆まになつて、兄の精神状態が周圍に及ぼす影響杯が頻りに苦になつた。段々生物から孤立して、書物の中に引き摺り込まれて行くやうに見える彼を平生よりも一倍氣の毒に思ふ事もあつた。

三十八

母も一二遍來た。最初來た時は大變機嫌が好かつた。隣の座敷にゐる法學士は何處へ出て何を勤めてゐるのだ杯と、自分にも判然解らないやうな事を、左も大事らしく聞いたりした。其時彼女は宅の近況に就て何にも語らずに、「此頃は方々で風邪が流行るから氣をお付け。お父さんも二三日前から咽喉が痛いつて、濕布をしてお出でだよ」と注意して去つた。自分は彼女の去つた後、

兄弟夫婦の事を思ひ出す暇さへなかつた。彼等の存在を忘れた自分は、快よい風呂に入つて、旨い夕飯を食つた。

次に訪ねて呉れた時の母の調子は、前に較べると少し變つてゐた。彼女は大阪以後、ことに自分が下宿して以後、自分の前でわざと嫂の批評を回避するやうな風を見せた。自分も母の前では氣が咎めるといふのか、必要のない限り、嫂の名を憚つて、成るべく口へ出さなかつた。所が此注意深い母が其折卒然と自分に向つて、「二郎、此處文の話だが、一體お直の氣立は好いのかね悪いのかね」と聞いた。果して何か始まつたのだと心得た自分は冷りとした。

下宿後の自分は、兄に就いても嫂に就いても不謹慎な言葉を無責任に放つ勇氣は全くなかつたので、母は自分から何一つ満足な材料を得ずして去つた。自分の方でも、何故彼女が此氣味の悪い質問を自分に突然と掛けたか遂に要領を得ずに母を逸した。「何か又心配になるやうな事でも出来たのですか」と聞いても、彼女は「なに別に是と云つて變つた事はないんだがね……」と答へる丈で、後は自分の顔を打守るに過ぎなかつた。

自分は彼女が歸つた後、しきりに此質問に拘泥し始めた。けれども前後の事情だの母の態度だ

のを綜合して考へて見て、何うしても新しい事件が、わが家庭のうちに起つたとは受取れないと判断した。

母もあまり心配し過ぎて、とうとう／＼嫂が解らなくなつたのだ。

自分は最後に斯う解釋して、恐ろしい夢に捉へられたやうな氣持を抱いた。

お重も來、母も來る中に、嫂は、遂に一度も自分の室の火鉢に手を翳さなかつた。彼女がわざと遠慮して自分を尋ねない主意は、自分にも好く呑み込めてゐた。自分が番町へ行つたとき、彼女は「二郎さんの下宿は高等下宿なんですつてね。お室に立派な床があつて、庭に好い梅が植てあるつて云ふ話ぢやありませんか」と聞いた。然し「今度拜見に行きますよ」とは云はなかつた。自分も「見に入らつしやい」とは云ひかねた。尤も彼女の口の上つた梅は、何處かの畠から引つこ抜いて來て、其儘其處へ植たと思はれない無意味なものであつた。嫂が來ないのとは異様の意味で、又同様の意味で、兄の顔は決して自分の室の裡に見出されなかつた。

父も來なかつた。

三澤は時々來た。自分はある機會を利用して、それとなく彼にお重を貰ふ意があるかないかを探つて見た。

「左右だね。あのお嬢さんも最う年頃だから、そろ／＼何處かへ片付ける必要が逼つて來るだらうね。早く好い所を見付けて嬉しがらせて遣り給へ」

彼はたゞ斯う云つた丈で、取り合ふ氣色もなかつた。自分は夫限斷念して仕舞つた。

永いやうで短い冬は、事の起りさうで事の起らない自分の前に、時雨、霜解、空つ風……と既定の日程を平凡に繰り返して、斯様に去つたのである。

陰刻な冬が彼岸の風に吹き拂はれた時自分は寒い害から顔を出した人のやうに明るい世界を眺めた。自分の心の何處かには此明るい世界も亦今遣り過ぎた冬と同様に平凡だといふ感じがあつた。けれども呼吸をする度に春の匂が脈の中に流れ込む快よさを忘れる程自分は老いてゐなかつた。

自分は天氣の好い折々室の障子を明け放つて往來を眺めた。又廂の先に横はる蒼空を下から透すやうに望んだ。さうして何處か遠くへ行きたいと願つた。學校にゐた時分ならもう春休みを利用して旅へ出る支度をする筈なのだけれども、事務所へ通ふやうになつた今の自分には、そんな自由は到底望めなかつた。偶の日曜ですら寐起の悪い顔を一日下宿に持ち扱つて、散歩にさへ出ない事があつた。

自分は半ば春を迎へながら半ば春を呪ふ氣になつてゐた。下宿へ歸つて夕飯を済ますと、火鉢の前へ坐つて煙草を吹かしながら茫然自分の未來を想像したりした。其未來を織る糸のうちには、自分に媚びる花やかな色が、新しく活けた佐倉炭の焰と共にちら／＼と燃え上るのが常であつたけれども、時には一面に變色して何處迄行つても灰の様に光澤を失つてゐた。自分は斯ういふ想像の夢から突然何かの拍子で現在の我に立ち返る事があつた。さうして此現在の自分と未來の自分とを運命が何ういふ手段で結び付けて行くだらうと考へた。

自分が不意に下宿の下女から驚かされたのは、丁度斯んな風に現實と空想の間に迷つて凝と火鉢に手を翳してゐた、或宵の口の出來事であつた。自分は自分の注意を己れ一人に集めてゐたといふものか、實際下女の廊下を踏んで来る足音に氣が付かなかつた。彼女が思ひ掛なくすうと襖を開けた時自分は始めて偶然のやうに眼を上げて彼女と顔を見合せた。

「風呂から」

自分はすぐ斯う聞いた。是より外に下女が今頃自分の室の襖を開ける筈がないと思つたからである。すると下女は立ちながら「いゝへ」と答へたなり黙つてゐた。自分は下女の眼元に一種の

笑ひを見た。其の笑ひの中には相手を翻弄し得た瞬間の愉快を女性的に貪りつゝある妙な閃があつた。自分は鋭く下女に向つて、「何だい、突立つた儘」と云つた。下女はすぐ敷居際に膝を突いた。さうして「御客様です」と稍眞面目に答へた。

「三澤だらう」と自分が云つた。自分は或事で三澤の訪問を豫期してゐたのである。

「いゝえ女の方です」

「女の人？」

自分は不審の眉を寄せて下女に見せた。下女は却て澄ましてゐた。

「此方へ御通し申しますか」

「何といふ人だい」

「知りません」

「知りませんが、名前を聞かないで無暗に人の室へ客を案内する奴があるかい」

「だつて聞いても仰やらないんですもの」

下女は斯う云つて、又先刻の様な意地の悪い笑を目元で笑つた。自分はいきなり火鉢から手を

放して立ち上つた。敷居際に膝を突いてゐる下女を追ひ退けるやうにして上り口迄出た。さうして土間の片隅にコートを着た儘寒さうに立つてゐた嫂の姿を見出した。

二

其日は朝から曇つてゐた。然も打ち續いた好天氣を一度に追ひ拂ふやうに寒い風が吹いた。自分は事務所から歸りがけに、外套の襟を立てゝ歩きながら道々雨になるのを氣遣つた。其雨が先刻夕飯の膳に向ふ時分からしと／＼と降り出した。

「好く斯んな寒い晩に御出掛でした」

嫂は軽く「えゝ」と答へたぎりであつた。自分は今迄坐つてゐた蒲團の裏を返して、それを三尺の床の前に直して、「さあ此方へ入らつしやい」と勧めた。彼女はコートの片袖をする／＼と脱ぎながら「さうお客扱ひにしちや厭よ」と云つた。自分は茶器を洒がせる爲に電鈴を押した手を放して、彼女の顔を見た。寒い戸外の空気に冷えた其頬は何時より蒼白く自分の眸子を射た。不斷から淋しい片鬱さへ平生とは違つた意味の淋しさを消える瞬間にちら／＼と動かした。

「まあ好いから其處へ坐つて下さい」

彼女は自分の云ふ通りに蒲團の上に坐つた。さうして白い指を火鉢の上に翳した。彼女はその姿から想像される通り手爪先の尋常な女であつた。彼女の持つて生れた道具のうちで、初から自分の注意を惹いたものは、華奢に出来上つた其手と足とであつた。

「二郎さん、貴方も手を出して御あたりなさいな」

自分は何故か躊躇して手を出しかねた。其時雨の音が窓の外で蕭々とした。晝間吹募つた西北の風は雨と共にぱつたりと落ちたため世間は案外静かになつてゐた。只時を區切つて樋を叩く雨滴の音丈がぼたり／＼と響いた。嫂は平生の通り落ち付いた態度で、室の中を見廻しながら「成程好い御室ね、さうして静だ事」と云つた。

「夜だから好く見えるんです。晝間来て御覽なさい、随分汚ならしい室ですよ」

自分は少時嫂と應對してゐた。けれども今自白すると腹の中は話の調子で示される程穩かなものでは決してなかつた。自分は嫂が此下宿へ訪ねて来ようとは其時迄決して豫期してゐなかつたのである。空想にすら描いてゐなかつたのである。彼女の姿を上り口の土間に見出した時自分

ははつと驚いた。さうして其驚きは喜びの驚きよりも寧ろ不安の驚きであつた。

「何で来たのだらう。何で此寒いのにわざ／＼来たのだらう。何でわざ／＼晩になつて灯が點いてから来たのだらう」

是が彼女を見た瞬間の疑惑であつた。此疑惑に初手からこたはつた自分の胸には、火鉢を隔てて彼女と相對してゐる日常の態度の中に絶えざる壓迫があつた。それが自分の談話や調子に不愉快なそらくしさを興た。自分はそれを明かに自覺した。それから其空々しさがよく相手の頭に映つてゐるといふ事も自覺した。けれども何うする譯にも行かなかつた。自分は嫂に「冴え返つて寒くなりましたね」と云つた。「雨の降るのに好く御出掛ですね」と云つた。「何うして今頃御出掛です」と聞いた。對話が其處迄行つても自分の胸に少しの光明を投げなかつた時、自分は硬くなつた、さうしてジョコンダに似た怪しい微笑の前に立ち竦まざるを得なかつた。

「二郎さんは少時會はないうちに、急に改まつちまつたのね」と嫂が云ひ出した。

「そんな事は有りません」と自分は答へた。

「いゝえ左右よ」と彼女が押し返した。

自分はつと立つて嫂の後へ廻つた。彼女は半間の床を脊にして坐つてゐた。室が狭いので彼女の帯のあたりは殆んど杉の床柱とすれ／＼であつた。自分が其間へ一足割り込んだ時、彼女は窮屈さうに體軀を前の方へ屈めて「何をなさるの」と聞いた。自分は片足を宙に浮かした儘、床の奥から黒塗の重箱を取り出して、それを彼女の前へ置いた。

「一つ何うです」

斯う云ひながら蓋を取らうとすると、彼女は微かに苦笑を洩らした。重箱の中には白砂糖を振り懸けた牡丹餅が行儀よく並べてあつた。昨日が彼岸の中日である事を自分は此牡丹餅によつて始めて知つたのである。自分は嫂の顔を見て眞面目に「食べませんか」と尋ねた。彼女は忽ち吹き出した。

「貴方も随分ね、其御萩は昨日宅から持たせて上げたんぢやありませんか」

自分は已を得ず苦笑しながら一つ頬張つた。彼女は自分の爲に湯呑へ茶を注いでくれた。

自分は此牡丹餅から彼女が今日墓詣りのため里へ行つて其歸り掛に此處へ寄つたのだと云ふ事を漸く確めた。

「大變御無沙汰をしておりますが、彼方でも別にお變りはありませんか」

「え、有り難う、別に……」

言葉寡な彼女はたゞ簡單に斯う答へた丈であつたが、その後へ、「御無沙汰つて云へば、貴方番町へも随分御無沙汰ね」と付け加へて、ことさらに自分の顔を見た。

自分は全く番町へは遠ざかつてゐた。始めは宅の事が苦になつて一週に一度か二度行かないと気が済まない位だつたが、何時か中心を離れて餘所からそつと眺める癖を養ひ出した。さうして其眺めてゐる間少くとも事が起らずに済んだといふ自覺が、無沙汰を無事の原因のやうに思はせてゐた。

「何故元のやうにちよく／＼入らつしやらないの」

「少し仕事の方が忙しいもんですから」

「さう？ 本當に？ 左右ぢやないでせう」

自分は嫂から斯う追窮されるのに堪へなかつた。其上自分には彼女の心理が解らなかつた。他の人はどうあらうとも、嫂丈は此點に於て自分を追窮する勇氣のないものと今迄固く信じてゐたからである。自分は思ひ切つて「あなたは大胆過ぎる」と云はうかと思つた。けれども疾に相手から小膽と見縮られてゐる自分は遂に卑怯であつた。

「本當に忙がしいのです。實は此間から少し勉強しようと思つて、そろ／＼其準備に取り懸つたもんですから、つい近頃は何處へも出る氣にならないんです。僕は何時迄斯んな事をして愚圖々々してゐたつて詰らないから、今のうち少し本でも讀んで置いて、もう少ししたら外國へも行つて見たいと思つてるんだから」

此答への後半は本當に自分の希望であつた。自分は何でもいゝから只遠くへ行きたい行きたいと願つてゐた。

「外國つて、洋行？」と嫂が聞いた。

「まあ左右です」

「結構ね。御父さんに願つて早く遣つて御頂きなさい。妾話して上げませうか」

自分も無駄と知りながらそんな事を幻のやうに考へてゐたのだが、彼女の言葉を聞いた時急に、「お父さんは駄目ですよ」と首を振つて見せた。彼女はしばらく黙つてゐた。やがて物憂さうな調子で「男は氣樂なものね」と云つた。

「些とも氣樂ぢやありません」

「だつて厭になれば何處へでも勝手に飛んで歩けるぢやありませんか」

四

自分は何時か手を出して火鉢へあたつてゐた。その火鉢は幾分か脊を高くかつ分厚に拵へたものであつたけれども、大きさから云ふと、普通の箱火鉢と同じ事なので二人向ひ合せに手を翳すと、顔と顔との距離があまり近過ぎる位の位地にあつた。嫂は席に着いた初から寒いといつて、猫背の人のやうに、心持胸から上を前の方に屈めて坐つてゐた。彼女の此姿勢のうちには女らしいといふ以外に何の非難も加へやうがなかつた。けれども其結果として自分は勢ひ後へ反り返る氣味で座を構へなければならなくなつた。それですら自分は彼女の富士額を是程近く且長く見詰

めた事はなかつた。自分は彼女の蒼白い頬の色を酸の如く眩しく思つた。

自分は斯ういふ比較的窮屈な態度の下に、彼女から突如として彼女と兄の關係が、自分が宅を出た後も唯好くない一方に進んで行く丈であるといふ厭な事實を聞かされた。彼女は是迄此方から問ひ掛けなければ、決して兄の事に就いて口を開かない主義を取つてゐた。たとひ此方から問ひ掛けても「相變らずですわ」とか、「何心配する程の事ぢやなくつてよ」とか答へて只微笑するのが常であつた。それを丸で逆さまにして、自分の最も心苦しく思つてゐる問題の真相を、向ふから積極的に此方へ吐き掛けたのだから、卑怯な自分は不意に硫酸を浴せられた様にひり／＼とした。

然し一旦緒を見出した時、自分は出来る丈根掘り葉掘り聞かうとした。けれども言葉の浪費を忌む彼女は、さう此方の思ひ通りにはさせなかつた。彼女の口にする所は重に彼等夫婦間に横たはる氣不味さの閃電に過ぎなかつた。さうして氣不味さの近因に就ては遂に一言も口にしなかつた。それを聞くと、彼女はたゞ「何故だか分らないのよ」といふ丈であつた。實際彼女にはそれが分らないのかも知れなかつた。又分つてゐる癖にわざと話さないのかも知れなかつた。

「何うせ妾が斯んな馬鹿に生れたんだから仕方がないわ。いくら何うしたつて爲るやうに爲るより外に道はないんだから。さう思つて諦らめてゐれば夫迄よ」

彼女は初めから運命なら畏れないといふ宗教心を、自分一人で持つて生れた女らしかつた。其代り他の運命も畏れないといふ性質にも見えた。

「男は厭になりさへすれば二郎さん見たいに何處へでも飛んで行けるけれども、女は左右は行きませんから。妾なんか丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植られたが最後、誰か来て動かして呉れない以上、とても動けやしません。凝としてゐる丈です。立枯になる迄凝としてゐるより外に仕方がないんですもの」

自分は氣の毒さうに見える此訴への裏面に、測るべからざる女性の強さを電氣のやうに感じた。さうして此強さが兄に對して何う働かかと思ひ及んだ時、思はずひやりとした。

「兄さんは只機嫌が悪い丈なんでせうね。外に何處も變つた所はありませんか」

「左右ね。夫や何とも云へないわ。人間だから何時何んな病氣に罹らないとも限らないから」
彼女はやがて帯の間から小さい女持の時計を出してそれを眺めた。室が靜かなので其蓋を締め

る音が意外に強く耳に鳴つた。恰も穩かな皮膚の面に鋭い針の先が觸れたやうであつた。
「もう歸りませう。——二郎さん御迷惑でしたらう斯んな厭な話を聞かせて。妾今迄誰にもした事はないのよ、斯んな事。今日自分の宅へ行つてさへ黙つてる位ですもの」
上り口に待つてゐた車夫の提灯には彼女の里方の定紋が付いてゐた。

五

其晩は靜かな雨が夜通し降つた。枕を叩くやうな雨滴の音の中に、自分は何時迄も嫂の幻影を描いた。濃い眉とそれから濃い眸子、それが眼に浮ぶと、蒼白い額や頬は、磁石に吸ひ付けられる鐵片の速度で、すぐ其周圍に反映した。彼女の幻影は何遍も打ち崩された。打ち崩される度に復同じ順序がすぐ繰返された。自分は遂に彼女の唇の色迄鮮かに見た。其唇の兩端にあたる筋肉が聲に出ない言葉の符號の如く微かに顫動するのを見た。それから、肉眼の注意を逃れようとする微細の渦が、壓に寄らうか崩れようかと迷ふ姿で、間斷なく波を打つ彼女の頬をあり／＼と見た。

自分は夫位活きた彼女を夫位劇しく想像した。さうして雨滴の音のぼたり／＼と響く中に、取り留めもない色々な事を考へて、火照つた頭を惱まし始めた。

彼女と兄との關係が悪く變る以上、自分の身體が何處に何う飛んで行かうとも、自分の心は決して安穩であり得なかつた。自分は此點に就て彼女にもつと具體的な説明を求めたけれども、普通の女のやうに零碎な事實を訴への材料にしない彼女は、殆んど自分の要求を無視した様に取り合はなかつた。自分は結果からいふと、焦慮される爲に彼女の訪問を受けたと同じ事であつた。彼女の言葉は凡て影のやうに暗かつた。それでゐて、稻妻のやうに簡潔な閃を自分の胸に投げ込んだ。自分は此影と稻妻とを綴り合せて、若しや兄が此間中痾癖の嵩じた揚句、嫂に對して今迄にない手荒な事でもしたのではなからうかと考へた。打擲といふ字は折檻とか虐待とかいふ字と並べて見ると、忌はしい残酷な響を持つてゐる。嫂は今の女だから兄の行爲を全く此意味に解してゐるかも知れない。自分が彼女に兄の健康状態を聞いた時、彼女は人間だから何時何んな病氣に罹るかも知れないと冷かに云つて退けた。自分が兄の精神作用に掛念があつて此間を出したのは彼女にも通じてゐる筈である。従つて平生よりも猶冷淡な彼女の答は、美しい己れの肉に

加へられた鞭の音を、夫の未來に反響させる復讐の聲とも取れた。——自分は怖かつた。

自分は明日にも番町へ行つて、母からでもそつと彼等二人の近況を聞かなければならぬと思つた。けれども嫂は既に明言した。彼等夫婦關係の變化に就ては何人もまだ知らない、又何人も告げた事がないと明言した。影のやうな稻妻のやうな言葉のうちから其消息をぼんやりと焼き付けられたのは、天下に自分の胸がたつた一つある許であつた。

何故あれ程言葉の寡ない嫂が自分に丈それを話し出したのだらうか。彼女は平生から落付いてゐる。今夜も平生の通り落付いてゐた。彼女は昂奮の極訴へる所がないので、わざ／＼自分を訪うたものとは思へなかつた。だいち訴へといふ言葉からしてが彼女の態度には不似合であつた。結果から云へば、自分は先刻云つた通り寧ろ彼女から焦慮されたのであるから。

彼女は火鉢にあたる自分の顔を見て、「何故さう堅苦しくして居らつしやるの」と聞いた。自分が「別段堅苦しくはしてゐません」と答へた時、彼女は「だつて反つ繰り返つてるぢやありませんか」と笑つた。其時の彼女の態度は、細い人指ゆびで火鉢の向側から自分の頬べたでも突つつきさうに狎れ／＼しかつた。彼女は又自分の名を呼んで、「吃驚したでせう」と云つた。突然雨の

降る寒い晩に来て、自分を驚かして遣つたのが、左も愉快な悪戯でもあるかの如くに云つた。

……

自分の想像と記憶は、ぼたり／＼と垂れる雨滴の拍子のうちに、夫からそれからと留度もなく深更迄廻轉した。

六

人行

夫から三四日の間といふもの自分の頭は絶えず嫂の幽霊に追ひ廻された。事務所の机の前に立つて肝心の圖を引く時ですら、自分は此祟を拂ひ退ける手段を知らなかつた。或日には始終他人の手を借りて仕事を運んで行く様な齒搔ゆい思さへ加はつた。斯うして自分で自分を離れた気分を持ちながら、上部文を人並に遣つて行くのに傍の者は何故不審がらないのだらうと疑ぐつて見たりした。自分は餘程前から事務所ではもう快活な男として通用しない様になつてゐた。ことに近來は口數さへ碌に利かなかつた。それで此三四日間に起つた變化も亦他の注意に上らずに済んでゐるのだらうと考へた。さうして自己と周囲と全く遮断された人の淋しさを獨り感じた。

自分は此の間に一人の嫂を色々に視た。——彼女は男子さへ超越する事の出来ないあるものを嫁に來た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき牆も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天眞の發現に過ぎなかつた。

或時は又彼女が凡てを胸のうちに疊み込んで、容易に己を露出しない所謂しつかりものゝ如く自分の眼に映じた。さうした意味から見ると、彼女は有り觸れたしつかりものゝ域を遙に通り越してゐた。あの落付、あの品位、あの寡黙、誰が評しても彼女はしつかりし過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく圖々しいものでもあつた。

或利那には彼女は忍耐の權化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない氣高さが潜んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と坐つた。恰も其坐つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆んど彼女の自然に近い或物であつた。

一人の嫂が自分には斯う色々に見えた。事務所の机の前、晝餐の卓の上、歸り途の電車の中、

下宿の火鉢の周圍、さまざまの所でさまざまに變つて見えた。自分は他の知らない苦しみを他に言はずに苦しんだ。其間思ひ切つて番町へ出掛けて行つて、大體の様子を探るのがともかくも順序だとは、屢胸に浮かんだ。けれども卑怯な自分はそれを敢てする勇氣を有たなかつた。眼の前に怖い物のあるのを知りながら、わざと見ない爲に臉を閉ぢてゐた。

すると五日目の土曜の午後突然父から事務所の電話口迄呼び出された。

「御前は二郎かい」

「さうです」

「明日の朝一寸行くが好いかい」

「へえ」

「差支があるかい」

「いえ別に……」

「ちや待つて、呉れ、好いだらうね。左様なら」

父はそれで電話を切つて仕舞つた。自分は少からず狼狽した。何の用事であるかをさへ確める

餘裕を有たなかつた自分は、電話口を離れてから後悔した。もし用事があるなら呼び付けられさうなものだのにとすぐ變に思つても見た。父が向ふから來るといふ違例な事が、此間の嫂の訪問に何か關係がある様な氣がして、自分の胸は一層不安になつた。

下宿に歸つたら、大阪の岡田から來た一枚の繪端書が机の上に載せてあつた。それは彼等夫婦が佐野とお貞さんを誘つて、楽しい半日を郊外に暮らした記念であつた。自分は机に向つて長い間其繪端書を見詰めてゐた。

七

日曜には思ひ切つて寢坊をする癖のついてゐた自分も、次の朝丈は割合に早く起きた。飯を済まして新聞を讀むと、其新聞が汽車を待ち合せる間に買つて、せはしなく眼を通す時のやうに、何の見る所もない程、詰らなく感ぜられた。自分はすぐ新聞を棄てた。然し五六分経たないうちに又それを取り上げた。自分は煙草を吸つたり、眼鏡の曇を丁寧に拭つたり、色々な所作をして、父の來るのを待ち受けた。

父は容易に來なかつた。自分は父の早起をよく承知してゐた。彼の性急にも子供のうちから善く馴らされてゐた。落ち付かない自分は、電話でも掛けて、何うしたのか此方から父の都合を聞いて見ようかと思つた。

母に狎れ抜いた自分は、常から父を憚つてゐた。けれども、本當の底を割つて見ると、柔和しい母の方が、苛酷しい父よりは却て怖かつた。自分は父に怒られたり小言を云はれたりする時に、恐縮はしながらも、矢つ張り男は男だと腹の中で思ふ事が度々あつた。けれども此場合は何時もと違つてゐた。いくら父でもさう容易く高を括る譯に行かなかつた。電話を掛けようとした自分は又掛け得ずに仕舞つた。

父はとう／＼十時頃になつて遣つて來た。羽織袴で少し極り過ぎた服装はしてゐたが、顔付は存外穩かであつた。小さい時から彼の手元で育つた自分は、事のあるかないかを彼の顔色からすぐ判断する功を積んでゐた。

「もつと早く御出だらうと思つて先刻から待つてゐました」

「大方床の中で待つてたんだらう。早いのはいくら早くつても驚かないが、御前に氣の毒だか

らわざと遅く出掛けたのさ」

父は自分の汲んで出した茶を、飲むやうに嘗めるやうに、口の所へ持つて行つて、室の中をちら／＼見廻した。室には机と本箱と火鉢がある丈であつた。

「好い室だね」

父は自分達に對してもよく斯んな愛嬌を云ふ男であつた。彼が長年社交のために用ひ慣れた言葉は、遠慮のない家庭に迄、何時か這入り込んで來た。それ程枯れた御世辭だから、それが自分には他の「御早う」位にしかなかなかつた。

彼は三尺の床を覗いて其處に掛けた幅物を眺め出した。

「丁度好いね」

其軸は特に此處の床の間を飾るために自分が父から借りて來た小形の半切であつた。彼が「是なら持つて行つても好い」と投げ出して呉れた丈あつて、自分には丁度好くも何ともない變なものであつた。自分は苦笑してそれを眺めてゐた。

其處には薄墨で棒が一本筋違に書いてあつた。其上に「此棒ひとり動かす、さはれば動く」と

賛がしてあつた。要するに繪とも字とも片のつかない詰らないものであつた。

「御前は笑ふがね。是でも濫いものだよ。立派な茶懸になるんだから」

「誰でしたつけね書き手は」

「それは分らないが、何れ大徳寺か何か……」

「さう／＼」

父はそれで懸物の講釋を切り上げようとはしなかつた。大徳寺がどうの、黄檗がどうのと、自分には丸で興味のない事を説明して聞かせた。仕舞に「此棒の意味が解るか」拵と云つて自分を悩ませた。

八

人行
其日自分は父に伴られて上野の表慶館を見た。今迄彼に隨いてさういふ所へ行つた事は幾度となくあつたが、まさかその爲に彼がわざ／＼下宿へ誘ひに來ようとは思へなかつた。自分は父と共に下宿の門を出て上野へ向ふ途々も、今に彼の口から何か本當の用事が出るに違ないと豫期し

てゐた。然しそれを此方から聞く勇氣はとても起らなかつた。兄の名も嫂の名も彼の前には封じられた言葉の如く、自分の聲帯を固く括り付けた。

表慶館で彼は利休の手紙の前へ立て、何々せしめ候……かね、といつた風に、解らない字を無理にぼつ／＼読んで居た。御物の王羲之の書を見た時、彼は「ふうん成程」と感心してゐた。其書が又自分には至つて詰まらなく見えるので、「大いに人意を強うするに足るものだ」と云つたら、「何故」と彼は反問した。

二人は二階の廣間へ入つた。すると其處に應舉の繪がずらりと十幅ばかり懸けてあつた。それが不思議にも續きもので、右の端の巖の上に立つてゐる三羽の鶴と、左の隅に翼をひろげて飛んでゐる一羽の外は、距離にしたら約二三間の間、悉く波で埋つてゐた。

「唐紙に貼つてあつたのを、剥がして懸物にしたのだね」

一幅毎に残つてゐる開閉の手摺の痕と、引手の取れた部分の白い型を、父は自分に指し示した。自分は廣間の真中に立つて此雄大な畫を描いた昔の日本人を尊敬する事を、父の御蔭で漸く知つた。

二階から下りた時、父は玉だの高麗焼だのの講釋をした。柿右衛門と云ふ名前も聞かされた。一番下らないのはのんかうの茶碗であつた。疲れた二人は遂に表慶館を出た。館の前を掩ふやうに聳えてゐる蒼黒い一本の松の木を右に見て、綺麗な小路をのそ／＼歩いた。それでも肝心の用事に就いて、父は一言も云はなかつた。

「もうぢき花が咲くね」

「咲きますね」

二人は又のそ／＼東照宮の前迄來た。

「精養軒で飯でも食ふか」

時計はもう一時半であつた。小さい時分から父に伴れられて外出する度に、屹度何處かで物を食ふ癖の付いた自分は、成人の後も御供と御馳走を引き離しては考へてゐなかつた。けれども其日は何故だか早く父に別れたかつた。

行き掛けに氣の付かなかつた其精養軒の入口は、五色の旗で隙間なく飾られた網を、何時の間にか縦横に渡して、絹帽の客を華やかに迎へてゐた。

「何かあるんですよ今日は。大方貸し切りなんでせう」

「成程」

父は立ち留つて木の間にちら／＼する旗の色を眺めてゐたが、やがて氣の付いた風で、「今日は二十三日だつたね」と聞いた。其日は二十三日であつた。さうしてKといふ兄の知人の結婚披露の當日であつた。

「つい忘れてゐた。一週間ばかり前に招待狀が來てゐたつけ。一郎と直と二人の名宛で」

「Kさんはまだ結婚しなかつたのですかね」

「さうさ。善く知らないが、まさか二度目ぢやなからうよ」

二人は山を下りてとう／＼其左側にある洋食屋に這入つた。

「此處は往來がよく見える。ことに寄ると一郎が、絹帽を被つて通るかも知れないよ」

「嫂さんも一所なんですか」

「さあ。何うかね」

二階の窓際近くに席を占めた自分達は、花で飾られた低い瓶を前に、廣々した三橋の通りを見

下した。

九

食事中父は機嫌よく話した。然し用談らしい改まつたものは、珈琲を飲む迄遂に彼の口に上らなかつた。表へ出た時、彼は始めて氣の付いたらしい顔をして、向ふ側の白い大きな建物を眺めた。

「やあ何時の間にか勸工場が活動に變化してゐるね。些とも知らなかつた。何時變つたんだらう」

白い洋館の正面に金字で書いてある看板の周囲は、無數の旗の影で安價に彩られてゐた。自分は職業柄、左も仰山らしく東京の眞中に立つてゐる此粗末な建築を、情ない眼付で見た。

「何うも驚くね世の中の早く變るには。さう思ふと己なぞも何時死ぬか分らない」

好い日曜なのと時刻が時刻なので、往來は今が人の出盛りであつた。華やかな色と、陽氣な肉と、浮いた足並の簇がるなかで斯う云つた父の言葉は、妙に周囲と調和を缺いてゐた。

自分は番町と下宿と方角の岐れる所で、父に別れようとした。

「用があるのかい」

「え、少し……」

「まあ好いから宅迄御出」

自分は帽子の鑰へ手を懸けた儘躊躇した。

「い、から御出よ。自分の宅ぢやないか。偶には来るものだ」

自分は極りの悪い顔をして父の後に随がつた。父はすぐ後を振り向いた。

「宅ぢや近頃御前が来ないので、みんな不思議がつてるんだぜ。二郎は何うしたんだらうつて。

遠慮が無沙汰といふが、御前のは無遠慮が無沙汰になるんだから猶悪い」

「さう云ふ譯でもありませんが。……」

「何しろ来るが好い。言譯は宅へ行つて、御母さんにたんとするさ。己はたゞ引つ張つて行く

役なんだから」

父はずん／＼歩いた。自分は腹の中で恰も丁年未滿の若者のやうな自分の態度を苦笑しながら、

黙つて父と歩調を共にした。其日は此間とは打つて變つて、青春の第一日ともいふべき暖かい光を、南へ廻つた太陽が自分達の上へ投げかけてゐた。襟の襟を付けた重いとんびを纏つた父も、少し厚手の外套を着た自分も、先刻からの運動で、少し温氣に蒸される氣味であつた。其春の半日を自分は父の御蔭で、珍らしく方々引つ張り廻された。此老いた父と、斯う肩を並べて歩いた例は近頃頓となかつた。此老いた父と是から先もう何度斯うして歩けるものか夫も分らなかつた。自分は鈍い不安のうちに、微かな嬉しさと、其嬉しさに伴ふ一種の果敢なさとを感じた。さうして不意に自分の胸を襲つた此感傷的な氣分に、成るべく己れを任せるやうな心持で足を運ばせた。

「御母さんは驚いてゐるよ。御彼岸に御萩を持たせて遣つても、返事も寄こさなければ、重箱を返しもしないつて。一寸でも好いから來ればいゝのさ。來られない譯が急に出來た譯でもあるまいし」

自分は何とも返事をしなかつた。

「今日は久し振りに御前を伴れて行つて皆なに會はせようと思つて。——御前一郎に近頃會つ

た事はあるまい」

「え、實は下宿をする時挨拶をした限です」

「それ見ろ。所が今日は生憎一郎が留守だがね。御父さんが上野の披露會の事を忘れてゐたのが悪かつたけれども」

自分は父に伴れられて、とう／＼番町の門を潜つた。

十

座敷に這入つた時、母は自分の顔を見て、「おや珍らしいね」と云つた丈であつた。自分は殆ど權柄づくで此處へ引つ張られて來ながらも、途々父の情を難有く感じてゐた。さうして暗に家に歸つてから母に會ふ瞬間の光景を豫想してゐた。その豫想が此一言で打ち崩されたのは案外であつた。父は家内の誰にも打ち合せをせず、全く自分一人の考へで、此不心得な息子に親切を盡して呉れたのである。お重は逃げた飼犬を見るやうな眼付で自分を見た。「そら迷子が歸つて來た」と云つた。嫂はたゞ「入らつしやい」と平生の通り言葉寡な挨拶をした。此間の晩一人で尋

ねて來た事は、丸で忘れて仕舞つたといふ風に見えた。自分も人前を憚つて一口もそれに觸れなかつた。比較的陽氣なのは父であつた。彼は多少の諧論と誇張とを交せて、今日何うして自分をおびき出したかを得意らしく母やお重に話した。おびき出すといふ彼の言葉が自分には仰山でかつ滑稽に聞えた。

「春になつたから、皆なもちつと陽氣になくつちや不可ない。此頃のやうに黙つて許りちや、丸で幽霊屋敷のやうで、くさ／＼する丈だあね。桐島でさへ立派な家が建つ時節ぢやないか」

桐島といふのは家のつい近所にある角地面の名であつた。其處へ住まふと何か崇があるといふ昔からの言ひ傳へで、此間迄空地になつてゐたのを、此頃になつて漸く或る人が買ひ取つて、大きな普請を始めたのである。父は自分の家が第二の桐島になるのを恐れでもするやうに、活々とした傍のものに話し掛けた。平生彼の居馴染んだ室は、奥の二間續きで、何か用があると、母でも兄でも、其處へ呼び出されるのが例になつてゐたが、其日はいつもと違つて、彼は初めから居間へは這入らなかつた。たゞ袴と羽織を脱ぎ棄てたなり、其處へ坐つた儘、長く自分達を相手に喋舌つてゐた。